

この氣の毒な神父カトン師については、もはや話す折もあるまいから、ここで簡単にその痛ましい物語を結んでおく。他の修道僧たちは、師が立派な人であり、少しも道樂な坊さんらしくない典雅な身持であるのを、嫉妬というよりむしろ憤慨し、師が自分たちと同じように人から憎まれないという理由で、師を憎みはじめたのである。主だった者たちが反對の徒黨を結び、師の地位を羨みながら、それまでは師の顔も正面から見られなかった小修道士どもを煽動した。師はさんざんの侮辱を加えられ、免職させられ、質素ながら風雅に雜作をととのえた居室までも取上げられた。それから、私の知らない何處かへ追放されてしまった。要するに、このような卑劣漢どもがあまりにひどい侮辱をもって師を壓倒したために、師の高潔で、正義を誇る魂はそれに抗することができなかつたのである。そして、師は最も愛すべき社交界にこの上もないよろこびを齎した後に、何處かの土牢か牢獄の奥の卑しい粗末な寢床の上で、師を識る限りのあらゆる立派な人々に惜しまれ、歎かれつつ、悲しみのうちに死んだ。そして、その人々は、師の缺點としては、師が修道僧であつたということしか認めていなかったのである。

こういう楽しい生活を續けているうちに、私は間もなくすっかり音楽の虜となつて、もう他のことが考えられなくなつた。役所へ出かけるのも厭々であつた。仕事に縛られたり精を出したりすることが、我慢のならない苦痛となり、終には仕事をすっかりやめて、全く音楽に没頭したいと考えるようになった。こんな氣違沙汰が反對されずに通るわけのないことはお察しの通りである。定収入のあるまともな地位を棄てて、不安定な弟子を追いかけ廻すなぞということは、ママさんをよるこぼすためには餘りに非常識な決心だつた。たとえ將來の進歩が自分の考えているように洋々たるものであると假定したところで、一生音楽家の身分に身を墮すというのは、自分の大望をひどく内輪に限つてしまふことだつた。ママさんは大袈裟な計畫ばかり立てる人だつたから、私のことについては、もう例のオーボンヌの言葉など全く信用せず、私が詰らない藝ごとに本氣で夢中になつてゐるのを見て心を痛めた。そして「歌や踊りじゃ出世にならぬ」という、パリではあまり通用しないが、そういう俗諺を度々私に繰返して聞かせた。しかし、ママさんは一方で、私がどうにも抵抗のできない嗜好に引きずられてゐるのを見てとつていた。私の音楽好きは音楽狂にまでなつた。そして仕事もまるでうわの空であつたから、そのために解雇される恐れがあつた。解雇されるぐらいなら、此方から暇を貰つた方がずっとよかつた。そこで、私はまたママさんに訴えて、この仕事は永續しきしきしようもない、生活するためには何か腕に職を持つていなければ

ならない、人の保護に身を委ねたり、旨く行くかどうか分らない新しい仕事を試みて徒に修業の時期を逸し、パンを得る力もえられないようなことになるよりも、自分の趣味にも適い、ママさんも選んでくれた腕の職を、實地の練習で物にする方がずっと確實である、というようなことを言つた。とうとう、相手が満足するまでの條理を盡して、というより、さんざんにしつこく言つたり甘えたりした揚句に、ママさんの承諾を強奪した。そこで私は早速土地調査局長のコッチェルリ氏のところへ、何かこの上もない立派な仕事でもしたように、大威張りで出かけて行き、お禮を述べた。こうして、私は理由も原因も口實もなく、自分の職を、二年足らず前に得た時と同じほどの、或いはそれ以上のよろこびをもつて、自らすすんで去つたのである。

この行動は、ひどく無分別ではあつたが、その地方では一種の尊敬を私に惹きつけ、それが役に立つた。或る人々は私に何か力でもあるかのように推量した。また、或る人々は、私が全く音楽に没頭したのを見て、拂つた犠牲で才能を判斷し、この藝術にそれほどの情熱を持っているのなら、きつとすばらしい才能のある人だろう、と思ひこんだ。盲人の國では片眼の者が王様になる。あたりに碌なものがいなかつたから、私は立派な先生で通つたのである。その上、いくらか歌の方の素養もないわけでもなし、加えて年齢や風采にも助けられて、私はやがて書記の俸給を償うに足る以上の女弟子を持つようになつた。

生活の愉樂のために、このように極端から極端へ急に移れるものでないことは、確かである。土地調査の役所では、この上もなく不愉快な仕事に、それ以上に不愉快な人間たちと一緒に一日八時間身體を縛られる。櫛もろくに使わない不潔な者が大部分を占めてゐるという田舎者の息や汗の悪臭のする陰氣な事務室の中に閉じこめられてゐる。そして、注意と臭氣と束縛と倦怠のために、時には目まいがするほど、やりきれない氣分になる。これに反して、今や私は突如として上流社交界の人となり、最も立派な家庭に出入して、持てはやされることとなつたのである。どこへ行つても、しとやかな、愛撫するよくな取りなし、お祭りさわぎ。おめかしをした可愛らしいお嬢さんたちが待っていて、ちやほやと迎えてくれる。眼に見るものは綺麗なものばかり。鼻にかぐものは薔薇やオレンジの花の匂いばかり。歌い、喋り、笑い、樂しむ。そこを出るのも、よそで同じようなことをしに行くためにすぎない。こういう利益が同じなら、どちらを選ぼうと迷ふことのないのは言うまでもない。だから、私は自分の選擇を非常に満足して、かつてこれを悔いたことはなかつた。

そして、生活行動を理性で衡量し、昔のように非常識な考えに引きずられることがなくなった今日でも、これを悔いていないのである。

自分の嗜好にのみ耳を傾けて、そのために期待を裏切られなかった、というのは恐らくこの時だけである。この土地の人々の如才のない待遇、親しみやすい心持、気軽な氣質などは、世間との交際を楽しいものにしてくれた。そして、當時私が世間との交際を好んだ事實は、今の私が人間どもの間での生活を好まないとしても、それは私が悪いのではなく、むしろ人間どもの方が悪いからだ、ということを示すのである。

サヴォアの人々が富裕でないのは氣の毒である。というより、サヴォアの人々が富裕であったら、恐らく氣の毒だったかも知れない。なぜなら、今日あるがままのサヴォアの人々は、私の識る限り最良の、また最も社交的な民衆であるからである。快い、信頼に足る交際の中に、人の世の甘味を味わい得る小都會がこの世に有るとすれば、それはシャンペリーである。この地方に集っている貴族は、樂に生活するに足るだけのものしか持たず、出世するに十分なほどのものはない。従って、野心に没頭することはできず、止むを得ずシネアスの諫言に従っている。貴族は青年時代を軍職に捧げ、やがて郷里に歸って、靜かに年老るのである。名譽心と理性がこの二つの生き方に満ちている。婦人たちはみな美しいが、美しくなくても濟む。その美をさらに美しくし、或いはこれを補うものすらすべて具有しているからである。私は自分の職業柄多くの若い娘たちに會ったが、不思議なことに、シャンペリーではただの一人も魅惑的でなかった娘を見た記憶がない。そういう眼で見たからだろう、という人があるかも知れない。それはそうとも言える。しかし、別に大げさな物の言い方をしているわけではないのである。實際、私の若い女弟子たちのことを思い出すと楽しくてならない。その中の最も愛らしい娘たちの名を茲に擧げて、その傍で送った無邪氣でまた甘美な幸福な時代に、私やその娘たちを呼び戻してはいけないだろうか。その第一は近所の娘で、ゲーム氏の弟子の姉妹に當るメラレイド嬢であった。非常に活潑な、栗色の髪の毛だったが、活潑と言っても、物優しくして、しとやかで、お轉婆なところは少しもなかった。その年頃の娘が大抵そうであるように、メラレイド嬢も少し瘦せていた。しかし、その輝いた眼やすらりとした胴體や人を惹きつける物腰は、肥っていないにもかかわらず十分に人の心をよるこぼせるものだった。私はいつも午前中にその家へ行った。メラレイド嬢は太

ていまだ昔段階のまま、髪はただ無難な束ねたばかり、私が行くたびに髪に花を挿して飾った。そして、私が歸ると、髪

を結うために、その花を抜くのであった。この世の中で、美しい婦人が昔段階でいるほどこわいものはない。着飾ってれば、その百分の一もこわくないだろう。午後にはその家へ行くことになっていたマントン嬢はいつも飾っている方で、やはり快い感銘を受けたけれど、それは別のものだった。マントン嬢は灰色がかかった金髪をしていて、非常に愛くるしく、非常に臆病で、また非常に色が白かった。澄んだ、音階の正しい、細い聲は、なかなか思い切った發聲をしなかった。胸に熱湯で火傷した痕があったが、それは青い縁飾の肩掛ではすっかり隠しきれなかった。この印は時々私の注意をその邊に惹きつけたが、やがて傷痕でないものに惹かれるようになった。近所にいた娘のうち一人のシャル嬢はもう成熟し切った獨身の女で、脊が高く、肩のあたりがむっちり美しく、肥りじしで、様子がよかった。美人というほどではなかったけれど、やさしい淑やかさと、むらのない氣質と、善良な性質とで特筆しなければならぬ人だった。シャンペリー第一の美人と言われた姉のシャルリー夫人は、もう音楽を習ってはいなかったが、娘さんには習わせていた。娘さんというのは、まだ幼かったが、氣の毒にも少し赤毛でなかったら、きつと成長した後の美しさは母親に匹敵するだろうと思われた。また、訪問會教會にもフランス人の令嬢がいて、その名前は忘れたが、私の好きな娘たちの名簿に入れておく價值がある。いかにも尼さんらしいゆっくりした一本調子な言葉つきをしていたが、その一本調子な言葉つきで、ひどく突然なことを言ったりするので、何だかその顔つきとしくり合わないように思えた。それに、この令嬢はものぐさで、自分の才を人に見せる勞をとることも好まなかった。誰に向ってもそれだけの心やりを示さなかった。一二カ月ばかり氣のない稽古をした末に、令嬢は私をもう少し精勤させようと思つて、漸くそこに氣がついた。というのは、私はどうしても精勤する氣になれなかったからである。稽古をしてやっていると、稽古が楽しかった。しかし、人から無理にそうさせられたり、時間に命令されることは嫌いだ。何事につけても、束縛と屈従はとも我慢できなかったのである。それらは快樂そのものをさえ厭に思わせる。人の話では、回教徒の國では、夜明け頃に人が街々を廻って、夫が妻に務めを果たすようにふれて歩くのである。そういう時の私はきつと意地悪なトルコ人の夫となるであろう。

私はまた中産階級の中にも何人かの女弟子を持っていた。とりわけその中の一人は、私とママさんの關係が變化する間接の原因となった。一切を打ち明けなければならぬのであるから、この事についても茲に述べなければならぬ。そ

*1 紀元前三世紀頃の人。野心多い王に仕えてその非望を諫止したことで有名である。

の女弟子というのは、或る食料品屋の娘で、その名をラール嬢と言ひ、まったくギリシャ塑像のモデルのような娘だつた。若し生命も魂もない眞實の美というやうなものがあるとすれば、この女などは今まで見、の最上の美人と言ふべきであらう。その無感覺なこと、冷たいこと、無頓著なことは一寸信じられないぐらいであつた。この娘を嬉ばせることも怒らせることも、どちらもできることではなかつた。そして、私は思うのだが、この娘は人から手出しをされても、きつと、好き嫌いというのでなく、無神経から、されるままになつていただろう。そういう危い目に遭つては大變なので、母親は娘の傍を一步も離れなかつた。そして、娘に歌を習わせたり、若い先生をあてがったりして、できるだけ娘の氣を引立てようとしていたが、これは成功しなかつた。先生が娘の機嫌取りをしている間、母親は先生の方の機嫌取りをしたが、これもまた大して成功しなかつた。ラールのおかみさんは生れつきの快活さの上に、娘が持つ筈の快活さも加えて持つていた。陽氣な愛嬌つたぶりの顔に、あばたの痕があつた。燃えるやうな小さい眼をしていて、それが少し血走つてゐるのは、いつも眼性が悪かつたからである。毎朝、訪ねて行くと、いつもクリーム入りの珈琲がちゃんと支度してあつた。そして、母親は私の唇の上にびつたりと接吻して私を迎えることを一度も缺かしたことはなかつた。この接吻は、そのまま私から娘に返して、娘がどんな風に受けとるか見たいものだといふ好奇心を起させた。尤も、かういふことはすべて單純で意味もなく行われたのだから、主人のラール氏がそこにいるときでも、機嫌取りや接吻はいつもと變らずに行われた。主人はまったくのお人好しで、いかにもそうした娘の父親らしい人だつた。しかし、おかみさんはこの主人をおいて他に男を拵えるやうなことはしなかつた。その必要がなかつたからである。

私はこのやうに可愛がつて貰うのは、單なる友情のあらわれと考へていたから、いつもの事ながら、愚にもそれに平氣で應じていた。それにしても、時には煩いと思ふこともあつた。といふのは、元氣者のラールのおかみさんが無理なことを言うのであつた。そして、若し晝間なぞおかみさんの店の前を、寄らずに通りすぎてしまつと、そのことで騒動が持ち上つたかも知れないほどだつた。だから、急いでいる時などは、わざわざ廻り道をして他の街を通らなければならなかつた。おかみさんの家へ入つたが最後、出るのがなかなか容易でないことが分りきつていたからである。

ラールのおかみさんが餘り私に構はらないから、私の方も構はないわけにいかなくなつた。親切にひどくほだされた。私はそのことをママさんに、秘密のない事を話すやうに話した。そして、たとえ秘密があつたとして、やはりママさんに

は話したらうと思ふ。といふのは、何事につけても、ママさんに内證にしておくのは、私には不可能であつたらうからだ。私の心はママさんの前では、神の前に出たやうに開放されていたのである。ママさんはこの事を私と同じ單純さでは受取らなかつた。私が友情としか見なかつたものを、それ以上のものと考へた。ラールのおかみさんは、私を石部金吉だと考へていて、その金吉が加減を段々に啓蒙するのを名譽だと心得てゐる。そして、おしまひには何とかかとか、自分の氣持をこちらに分らせてしまふやうなことになる。ママさんはそう判断したのであつた。そして、ママさんには、自分が育て上げた者の教育を他の女が引受けるのはよろしくない、といふことを別にしても、私の年頃や境遇の者が陥り易い陥穽から私を守るためには、一層ママさんに相應しい理由もあつたわけである。その頃、これより更に危険な種類の陥穽を張つたものがあつた。これは旨く脱れることができたが、そのためにママさんは、私が絶えず危険に脅かされてゐるのだから、どうしてもできる限りの豫防法を講じてやる必要があるだ、と感ずるやうになつた。

女弟子の一人の母親に當るマントン伯爵夫人といふのは、非常に才のある人で、それだけに性質が意地悪だといふ評判だつた。人の噂では、色々な騒動の種を蒔いたことだつたが、中でも或る騒動からアントルモン家がひどい目に遭ふやうになつたのも、夫人の蒔いた種であつた。ママさんはこの夫人と親交があつて、相手の性格は十分に識つていた。或る男にマントン夫人が自信を持つていたところが、その男はママさんが好きになつた。ママさんとしては、別に向うから言い寄られたわけでもなく、こちらから持ちかけたわけでもなく、全く惡氣のないうちに、そんな氣持を男に抱かせてしまつたのだが、マントン夫人からすれば、男がそんな選り好みをしたのは女の罪だと、ママさんを逆恨みするやうになつた。それ以來といふものは、夫人は戀仇のママさんに、色々な惡戯をしかけて来るやうになつたが、それは一つも成功しなかつた。そうしたまことに滑稽な惡戯の一つを見本としてここに述べてみよう。或る時、二人は近隣の紳士たちと田舎へ行つてゐたことがあるが、その中に例の執心の男も入つてゐた。或る日、マントン夫人は、この紳士たちの一人に向つて、ヴァラン夫人はただの氣取り屋で、趣味といふものは少しもない、身なりなんかもなつていない、襟卷の仕方でもまるで町のおかみさんみたいだ、と言つた。

「その襟卷の件についてはですな」と、相手の男は、ふざけるのが好きで、こんな事を言つた。

「それには曰くがあるんです。私はよく知つてゐるんですが、あの人の胸元には、大きな、厭らしい鼠の形のような傷痕が

ありましてね。そいつが今にも驅け出しそうな恰好をしているんですよ」

憎悪は戀と同じく人を信じ易くさせるものである。マントン夫人は、これはいい事を聞いたと思った。そして、或る日、ママさんが、マントン夫人のつれない戀人と二人でカルタをやっていると、この時とばかり、そつと戀仇の背後へ廻って、いきなりママさんの椅子を半分引き倒して、旨い工合に襟卷ネツカチの下を暴露した。ところが、大きな鼠どころか、紳士は、まるでそれと異つたものを眼にすることになった。容易に見ることはできないが、見たら忘れることがなほお難かしい代物であった。そして、これは少しもマントン夫人の利益とはならなかった。

マントン夫人は立派な人だけに取巻かれていたという人だったから、私などは夫人の氣を惹くような人間ではなかった。それでもいくら私に注意を拂ったのは、こちらの容貌のせいではなかった。そんなものを、夫人が全く意に介していなかったことは確かである。ただ、私には才知があるように人から思われていたので、それが夫人の趣味に役立つかも知れなかったからである。趣味と言つても、夫人は殊に諷刺詩に相當に強い興味を持っていた。自分の氣に入らない人々のことについて、歌や詩を作るのが好きだった。若し私に、夫人が詩をひねくるのを助けるだけの才能があり、それを書くだけの親切があると見込まれたら、夫人と私の二人だけで忽ちシャンベリーじゅうをてんやわんやにしてしまったであらう。そういう諷刺詩の出所が追窮されるであらう。マントン夫人は私を犠牲にして難をのがれるであらう。そして、恐らく私は、貴婦人たちに向つて口巧者になれるようにと、残りの生涯をずつと閉じこめられてしまつたであらう。

幸いにも、こういうことは起らなかった。マントン夫人は二三度私を晚餐に引きとめて喋らせたが、私をただの阿呆だと判断した。自分でも自分が阿呆だと感じ、本當ならその阿呆のために色々な危険を免れたのだからそれに感謝しなければならぬところだったのに、却つて自分の阿呆を歎き悲しみ、わが友ヴァンテールの腕前を羨んだのである。マントン夫人に取つて私はいつまでも娘さんの教師としてのみにとどまり、それ以上のものとはならなかった。とは言いがら、私はシャンベリーでは平和に、また常に人々から可愛がられて生活した。それは、マント夫人から才人とされ、土地の他の人々からは蛇のように思われるよりもずつとよかつた。

それはそれとして、ママさんは、私に若氣の過ちを犯させないために、そろそろ一人前の男として、待遇する時期が來たと思つた。そして、この待遇を實行したけれど、それは、こんな場合に、どんな女でも思いつかない奇妙な方法によつ

たのであつた。ママさんは前よりもずつと嚴肅な態度をとり、話も眞面目な話をするようになった。お説教をするにも、いつもはふざけたような快活な調子が混つていたのに、それが突如として常に氣品のある調子と入れ代つた。それは打ちとけたものでなく、といつて嚴格なものでもなく、何か意味ありげに思われた。この變化の理由を自分で色々と考えてみたが分らないので、しばらくして、こちらから訊いてみた。ママさんはそれを待っていたのである。ママさんは、その翌日、例の庭園へ散歩に行こうと言ひ出した。翌日になると、朝から二人で出かけた。一日中、二人だけでいられるように手筈がされてあつた。ママさんは、私に與えたいと思つていた情愛に對して、前もつて私の心構えを作らせるために、その一日を用いたわけであつた。と言つても、それは他の女が、手練手管と御機嫌買ひによつてするようなのとちがつて、こちらを誘惑するというより教育するためになされる思いやりと理性に満ちた談話、つまり私の肉感に訴えるよりも心情に訴える談話によるのであつた。とは言いがら、ママさんがしてくる談話が、どんなに立派で有益なものであつても、また、そのために冷たく味氣ない談話となるようなことはなかつたとしても、私はそれに當然拂うべき注意を拂わなかつたし、他の場合だつたら肝に銘じたにちがひなかつたが、その時だけはそうでなかつた。話の言ひ出し、何か手廻しをしているような様子が、不安の念を與えた。ママさんの話している間、われにもなくぼんやりと夢見るような氣持になつていた私は、相手の言つている事柄よりも、話の結着は何だろるかといふことの方に氣を取られていた。そして、理解するまではないなかな骨が折れたが、それでもやがて向うの話の結着が分つて來ると、ママさんの傍で暮すようになって以來、ただの一度でも頭に浮びもしなかつたさういふ思いつきの新奇さが、忽ち私の心のすべてを占めて、相手が言つていることをもう考える力がなくなつてしまつた。ママさんのことだけを思いつめて、言葉には耳を傾けなかつた。

若い人々にひどく興味のあるものをあげすけに見せながら、一方で自分の言うことに相手の注意を向けさせようとする、これは教育者が極めて胃しやすい無理である。そして、私もまたこれを「エミール」の中で避けることができなかった。青年は、目分に示された物に動かされて、それだけに氣を取られる。そして、諸君の前置き言葉などは一足飛びに飛び越えて、諸君が導いて行こうと思つている所へ一ぺんに達しようとするのである。青年の考えからすれば、諸君の導き方がいかにも緩慢に思われる。従つて、相手の注意を求めようと思つたら、前もつて此方の氣持を推量させてはいけな

い。この邊のところ、ママさんのやり方がまづかつたのである。組織的な頭腦から來る一種の氣紛れというのか、ママ

さんは條件を言い出すのにひどく無駄な用心をした。ところが、私はこの条件の代償を見て取るや否や、よく聴きもしないで、急いで直ぐに同意してしまった。このような場合に、その代償を思い切つて値切れるほど淡泊なそして氣敢な男や、そんなことをされて我慢のできるような女が、この世にただの一人でもいるとは思えない。ママさんはあくまでも風變りであった。私の同意に對して、この上もなく尤もらしい手續を履ませたのである。つまり、八日間だけ考慮の餘地を與えようというのであった。私はそんな必要はない、と言いつ切つたが、それは實は嘘だった。というのは、これもずいぶん風變りなことだったが、私としてもその八日間があつた方がうれしかったからである。それほどひどくこの思いつきの新奇さが私の心を打ち、また、それほどひどく私は頭の中が混亂してしまつていたから、これを整理するためには、どうしても猶豫が必要だったのである。

その八日間は私の身には八世紀も續いたような氣がしたろうと人は思うかも知れない。ところが、まるで反對で、本當に八世紀も續いて貰いたいような心持だったのである。その時の自分の状態を、どんな風に描いていいか分らない。焦慮の混つた何かしら恐ろしい氣持、自分の慾望しているものが空おそろしく、幸福になることが避けられる何か正しい道でもないものかと、頭の中を本氣に探し廻つたことも度々だつたほどである。私の激しく好色な性質、燃え立つ血潮、戀に酔つた心、體力、健康、年齢、そんなものを考えてみて頂きたい。異性に飢え渴ききつていたこんな状態でありながら、まだ一人の女性にも近づかなかつたことも考えてみて頂きたい。想像・慾求・虚榮・好氣心などが一緒になつて、男になりたいたい、男に見せかけたいという熾烈な慾望が私の身を焼いたことも考えみて頂きたい。とりわけ、(というのは、これは忘れてはならないことだから)ママさんに對する私の激しく深い愛着が、和らぐどころか、日に日に高ぶるばかりであつたこと、ママさんの傍にいななければ、幸福でなかつたこと、ママさんの傍を離れるのは、ただママさんのことを考えるためだけだつたこと。私の心は、ママさんの温情、その優しい性格に満たされていたばかりでなく、ママさんの性、その容貌、その身體、ママさん自身、一言で言えば、私にとつてママさんを親愛なものとするあらゆる關聯によつて、満たされてきたことなどを、つけ加えて考えてみて頂きたい。そして、こちらが十歳も十二歳も年下であつたから、ママさんが老けていたとか、老けていたように思われたとかいうことは想像して頂きたくない。ママさんと初めて會つて、あれほど甘美な陶醉を覺えて以來五六年たつが、ママさんはその頃とまったく變つていなくなつたし、私にも變つたようには全

然思われなかつた。私にとつては相變らず魅力的であり、また誰に取つても尙そうであつた。ただ身體だけは少しばかり肥つて來ていた。それ以外は、同じ眼ざし、同じ色つや、同じ胸元、同じ顔立ち、同じ美しい金髪、同じ快活さ、その聲音まで同じであつた。そして、その若々しい銀のような聲音は、常に私に非常に強い印象を與え、今日でもなお少女の美しい聲音を耳にすると感慨を覺えないわけにいかないほどである。

これほど親愛する人を自分のものにするという期待の中で、當然私が恐れなければならなかつたのは、その期待の先まわりをやり、自分自身を抑えつけていられるほど十分に慾望や想像を制御できないのではあるまいか、ということだつた。後に分ることだが、壯年の頃の私は、好きな婦人に一寸でも此方に意があるらしいと考へただけで、もう血潮がわき立ってしまった、そのためにその婦人と自分を距てている短い距離を不都合なく縮めることができなほほどであつた。それなのに、若い盛り頃の私が、生れて初めての悦樂を前にして、少しもあせらなかつたのは、何たる奇蹟だつたらうか。その享樂の時が刻々に近づくのを、よろこびよりも苦痛をもつて見ていたのはなぜだつたらうか。また、自分を陶醉させる筈の無上の歡喜を感じないで、ほとんど嫌惡と恐怖を感じたのは、なぜだつたらうか。若し私が自分の幸福を體よく免れ得たら、心からそうしただらうことには、些かの疑いもないのである。ママさんに對する私の愛着の物語には、色々奇妙なところがある、と前に言つておいた。これも確かにその一例であつて、誰にもこんなことは思いもよらなかつたであらう。

これを讀む人は、非常に不快な感じを起して、そもそもヴァラン夫人は前から他の男のものとなつていたのでから、その身體を今度は二人の男に分け與えると言ひ出して、却つて私の眼に自分の値打を下げたのだ、そして、輕侮の念が、夫人から與えられた私の感情を醒ましたのだ、と判定する。それは間違ひである。二人に分與する、というのは、實際、私にとってはひどい苦痛だつた。それは、夫人や私には事實相應しくないことのように思へたし、また極めて當然の潔癖さからも苦痛だつた。しかし、夫人に對する私の感情について言えば、そのために私の感情は變質はしなかつた。夫人を自分のものにしたと思ひなかつたその時が、夫人を一番心から愛していた時だつた、と誓つて言うことができる。

夫人の心が貞潔であり、その氣質が氷のようであることは、私のあまりによく知つていたところであつて、官能のよろ

こびのために夫人がこのように身を投げ出したのだなぞとは一瞬間も思わなかった。他の手段では避け得られない危険から、私の身を救い、私にいつまでも本心と義務を失わせまいという心やりだけが、夫人をしてその義務の一つに背かせたのであることを、私は全く確信している。そして、夫人がその義務を他の女と同じような眼で見ないかつたことは、後に述べる通りである。私はママさんを不憫に思い、また自分でも歎いた。「いけません、ママさん。そんな必要はありませんよ。そんなことをされなくなつて、僕は大丈夫です」と、私は言いたい気がした。しかし、そうは言えなかつた。それは第一に、口にすべき事ではなかつたからであり、第二には、そんなことを言うのは本當ではない、他の女たちから自分を守り、どんな誘惑にも負なけいようにしてくれることのできるのはただ一人の女に限る、と内心では感じていたからである。ママさんを自分のものにした欲望のない私は、他の女を自分のものにした欲望をママさんの力で取り去って貰えるのがうれしかった。それほど私は、ママさんから私の氣を散らすものを、すべて不幸だと見ていたのである。

一緒に、しかも無邪氣に暮らした長い習慣は、ママさんへの私の愛情を弱めるどころか、益々強めていたのであるが、しかし、同時に、この愛情に別の傾向を興えていた。このために、私の愛情は一層深く、恐らく一層優しいものとなつたが、それと共に、肉感的なところが少なくなつて來ていた。ヴァラン夫人のことを、いつもママさんと呼び習わし、夫人に對しては息子同様の馴々しさで接し續けて來たために、自分は本當にママさんの息子だと思ふような癖がついていた。ママさんをどんなに親愛していても、いざこの人を自分のものにするという段になつて、私が少しもあせつた氣を起さなかつた眞の理由は、そこにあつたと思つてゐる。初めの頃の感情は、それ程強烈ではなかつた代りに、もっと肉感的であつたことを、今でもよく憶えている。アマシーにいた頃の私は陶酔の中にいた。シャンペリーではもうそれを脱してゐた。いつもあらん限りの熱情をこめてママさんを愛してゐたことは愛してゐたが、自分のためよりも、むしろママさんのためにママさんを愛してゐた。少くも、この人のもとは、快樂よりも幸福を求めてゐた。ママさんは、私にとつて、姉以上、母親以上、友達以上、あるいは戀人以上のものでさえあつた。そして、ママさんが戀人でなかつたわけは、これがためであつた。最後にまた、私はママさんに戀慕するために餘りに愛しすぎてゐた。このことは私の頭の中で一番はつきりしてゐるところである。

待つていたというよりむしろ恐れてゐたその日が、とうとうやつて來た。私は一切を誓約し、少しも欺かなかつた。代

償を望むことなく自分の約束を確認した。ところが、私はその代償を得たのである。生れて初めて、女性の、しかも自分の鐘愛する女性の腕の中に、自分自身を見出したのであつた。幸福だつたらうか。否。私は快樂を味わつた。その快樂の魅力を、名状もできぬ打ち勝ち難い哀愁が毒害した。何か不倫を犯したかのような氣持だつた。二度か三度、恍惚のうちママさんを強く抱きしめた時、私はママさんの胸を涙で濡らした。ママさんとは言へば、悲しもうでもうれしもうでもなかつた。優しく落著いてゐた。ママさんはあまり色情は強くなかつたし、肉感を求めようともしない人だつたから、肉慾の歡喜を感じなかつたし、肉慾の苛責も決して感じなかつた。

私は繰返して言う。ママさんの過失はすべて錯誤から來たのであつて、決して激情から來たものではなかつた、と。ママさんは良い家柄に生れ、心は清く、正しいことを好み、眞直ぐな徳操の高い性情であり、趣味も洗練されてゐた。生れつき高雅な品性を有し、自分ではいつもこれを尊重してゐたのに、決してこれに従つたことがなかつた。それは自分を善く導く心情に聽く代りに、悪く導く理性に聽いたからであつた。誤つた主義に迷わされた時には、眞の感情がいつもそれを否認した。しかし、不幸なことに、ママさんは哲學を鼻にかけてゐた。そして、自己流儀の倫理が、心の教える倫理をぶちこわしたのである。

ママさんの最初の戀人だつたタヴェル氏が、ママさんの哲學の先生だつた。そして、その教えた主義は、ママさんを誘惑するために必要とした主義だつたのである。タヴェル氏は、ママさんが夫から、またその義務から心を離さず、常に冷靜で理智的であつて、肉感では攻め落すことができないのを見て取つて、詭辯をもつて攻撃を加えた。そして、ママさんがそんなに氣にしている義務などというものは、ただ子供を面白がらせるために拵え上げられた教理問答のお喋りであり、男女の結合は、それ自身はこの上もなく無意味なものであり、貞操というものは、止むを得ない見せかけであつて、その道徳性は俗論に關するのであり、夫の心の平和は、妻の義務の唯一の尺度であり、従つて、人に知れない不貞は、被害者にとつても良心にとつても何物でもない、というようなことを、ママさんに教えこんだ。そして、最後には、これはそれ自身としては何でもないことで、悪評さえ立たなければ露われるものではない、それだけで貞女らしく見える女なら誰でも、本當の貞女なのだ、とママさんを丸めこんでしまつた。こうして、この悪者は世間知らずの若い人妻の、心までは腐敗させなかつたが、その理性を腐敗させ、自分の目的を遂げたのである。ところが、タヴェル氏は、その罰

に、ママさんに教えた夫の操縦法を、今度は自分も受けているのだと思ひ込むようになって、この上もない嫉妬に身を焼いた。それが勘違いだったかどうか私は知らない。新教の宣教師ペレー師がタヴェル氏の後釜になったと言われている。私の知っているのは、この若い人妻の冷静な氣質が、あんな物の考え方からこの人を防いでくれた筈なのに、却って後になっては、そういう物の考え方を捨てる妨げとなった、ということだけである。ママさんには、自分が何とも思っていないことを、人々がひどく重大視するわけが分らなかった。自分には少しも苦痛でない禁慾を、決して美德の名で尊んではいなかった。

従って、ママさんはこの謬説を自分のためには濫用しなかったが、しかし、他人のためには濫用した。そして、それは、ほとんど同じように誤てはいたがママさんの心の優しさとは一層よく合致した一つの主義によったのであった。ママさんが常に信じていたところによると、男を女に結びつけるには、女が身を委すに若くものはなかった。そして、ママさんは男の友達たちを友情でしか愛してはいなかったけれども、その友情というのが、ひどく情愛のこもったものであって、男たちを一層強く自分に結びつけるために、ママさんはできるだけの手段を用いた。それが、まことに異例なことに、ほとんどすべて成功した。ママさんはまったく人好きのする人であって、一緒にいて親密さが増せば増すほど、この人が好きになる新しい理由がいくつも発見できるのである。もう一つ注意に値することは、最初の失敗以来、ママさんは不都合な男しか寵愛しなくなっていた。立派な人々はみんな無駄骨を折るだけだった。しかし、最初にママさんから憐れまれた人が、おしまいは愛されるようにならなかったとしたら、その人はよほど見どころのなかった人にならなければならぬ。たとえママさんらしくない選擇をすることがあっても、それはママさんの氣高い心には決して起らない低劣な嗜好からではなくて、ママさんが常に必ずしも十分な分別をもって制御しなかった餘りに寛大すぎる、餘りに人情に脆すぎる、餘りに思いやりのありすぎる、また餘りに感じ易すぎるその性格からのみ来たのであった。

ママさんは幾つかの過た主義に迷わされたことはあったが、しかし、また、決して放棄することのなかった敬服すべき主義をどれほど澤山もついていたことだったろう。どれほど多くの美德によって、その弱點を償っていたことだったろう。肉感の加わることがあれほど少なかった過失をも、弱點という名で呼ぶことができるのならば。一つの點でママさんを欺いた例の男は、他の無数の點で相手に立派な教育を與えたわけであった。そして、ママさんの激情は、たけり狂りこと

がなかつたから、常に自分の理智の光明に聽従することができて、持ち前の詭辯に迷わされさえしなければ、立派にやっていた。間違ったことをやっても、その動機は賞すべきものだ。過つてへまなことはやっても、悪事をしようと思ふことはできなかった。二心と虚言とは大嫌いだった。正しく、公平で、人情深く無慾で、自分の言葉や友達に對し、また自ら義務と認めるものに對しては忠實であり、復讐とか憎悪とかは不可能であり、人を赦すことに少しでも褒むべきところがあるときえ思わなかった。最後に、ママさんの最も恕しがたい點に立戻つて言うと、ママさんは自分の情愛を正しく評價しなかつた代りに、決してそれを下等な商賣にはしなかつた。情愛を惜氣もなく撒きちらした。しかし、たえずやりくり算段の生活をしていたにも拘らず、情愛を賣物にはしなかつた。そして、私は敢て言うのであるが、アスパシヤを尊重できたソクラテスならば、ヴァラン夫人をも必ず尊敬したであらう、と。

夫人が感じ易い性格であり、冷静な氣質であつたと言うと、例の如くその矛盾を咎める人があるだろうことは前もって分る。そして、そう咎めるのも無理はないのである、造化の神の方が間違つていて、こんな組合せのある筈はないのかも知れない。私としては、この組合せがあつたことを知っているだけである。ヴァラン夫人を識つていた人々は、今日もなお、その大部分が存命しているけれど、その人々もまた夫人がそんな人だつたことを知っていたにちがいない。なお敢て附言すれば、夫人はこの世にただ一つの快樂しか知っていなかった。それは、自分の愛する者たちに快樂を與えるということだ。たのである。しかし、これについて論議をしたり、そんな事は事實でないと言明したりすることは各人の勝手である。私の役目は、眞實を言うことであつて、眞實を信じさせることではない。

以上述べたことはすべて、われわれの結合の後の談話によつて、少しずつ私の知つたところであつた。そして、このよきな談話だけでも、われわれの結合は楽しいものとなつた。夫人は自分の情愛が私のためになるだろうと望んでいたが、その通りだった。私はそこから非常な利益を得て、大いに啓發された。今までの夫人は、まるで子供に話して聞かせるように、私には私の身のことしか話さなかつた。ところが、今は、私を一人前の男として待遇しはじめ、自分の身のことも話した。夫人から聞くことは何もかも非常に興味があり、非常に私を感動させるように覺えたので、私は深く反省し、そ

ホー アスパシヤは紀元前五世紀頃のアテネ社交界の麗人で才知をもつて囁つていた。ソクラテスをはじめ、多くの哲學者・政治家・文學者等に愛され、ペリクレスの如きはアスパシヤのためにその妻を棄てたと傳えられる。

の打明話を、相手から受ける教訓以上に自分のために利用した。相手が本當に心から物を言っていると感ずる時、われわれの心も相手の吐露を受けるためにうち開く。そして、道學者先生の教訓などは、われわれの愛著する良識ある婦人の優しく愛情深い雑談に遠く及ばないものである。

夫人と親しく暮すようになってから、夫人としては今までもそうだったが、それ以上に私を鼻目に見るようになったから、私については、次のような判断を下した。つまり、私はひどくきこちない様子にはしているけれども、世に出るための教育を受けるだけの價値はあり、また、他日何かの足場に乗って世に出るようになれば、きっと立身出世することもあるだろう。夫人はこの考えに基いて、私の思慮分別を養成することばかりでなく、外貌や舉措も立派に作り上げ、愛嬌のあり氣品のある人間に仕立てようと氣を配った。そして、世間での成功はこれを美德と結びつけ得るといふことが眞實であるとすれば（私はそうは信じないが）、そのためには、少くも、夫人が取り上げ、私に教えようとした道より他の道はあり得ないと私は確信する。というのは、ヴァラン夫人は人間を識っていて、虚偽もなく油断もなく、また相手を欺いたり怒らせたりすることなく、人間に接する術を心得ていたからである。しかし、この術は夫人の興える教訓の中よりもその性格の中に多くあった。教えるよりも實行する方が得意だった。しかも、私はそういう術を學ぶにこの世で最も不適當な人間だった。従つて、そのつもりで夫人のしてくれた一切のことは、舞踏や劍術の先生を私にあてがうためにしてくれただ心づかいと同じで、ほとんど骨折損になつたのである。私は敏捷で、身體つきもよく均齊がとれていたらけれども、ミニュエットの踊り一つ習いおぼえることもできなかった。肉刺のために、踵で歩く癖がひどくて、ローシユはどうしてもこの癖を治してくれることができなかった。そして、相當に身輕な風はしていたけれども、詰らない溝川一つ飛び越せたためしかなかった。劍術の道場ではなおいけなかった。三カ月稽古した後でも、まだ試合ができるほどになれず、いつも教師相手に初歩の練習ばかりやっていた。それに、手頸は十分に柔軟でなく、腕は十分に確りしていなかった。教師が氣まぐれにこちらの劍を拂い飛ばしてやろうと思つた時には、いつも私は劍を持ちこたえていることができないほどだった。その上、そういう稽古と、それを教え込もうと意氣こんでいる教師が厭で厭でたまらなかつた。人殺しの法をそんなに鼻にかけている人間の氣が知れなかつた。教師は自分の大天才をこちらに分らせようと思つて、説明をするときには、いつもろくに知りもしない音樂のことと引き比べて話をした。守勢とか中段のお突きと、音樂上の音程の第三度、第四度と

の間に、驚くべき類似を見出してゐた。また、佯撃をやるうとする時には、この嬰音符にご用心なさい、なぞと言つた。昔は *diaces* の *ル* を *feintes* と言つていたからである。また、教師が私の手から劍をはね飛ばしてしまふと、いかにも馬鹿にしたような笑いを浮べながら、これが休止符ですよ、なぞとも言つた。要するに、前立と胸當をつけたこの厭な男ほど、世にも我慢のならない生意氣な奴を見たことがなかつた。

このように、稽古事は何をやっても手が上らなかつたので、やがて厭になつてやめてしまつた。しかし、別のもつと有益な術、即ちわが運命に甘んじてゐること、一層華やかな運命を望まないこと、という術には大いに進歩を遂げた。華やかな運命など、自分の柄にないものだと感じはじめたのである。ママさんの生活を幸福なものにしようという願望だけに頭を使つていた私は、ママさんの傍にいればいつも楽しかつた。そして、市中を廻るために傍を離れなければならぬ時は、音樂にはずいぶん情熱を抱いていたけれど、授業をするのは煩いなと思ふようになって來た。

クロード・アネがママさんと私の交情が親密になつたことに氣づいていかどうかは私は知らない。しかし、それがアネに隠されていなかったと考へなければならぬ。アネは非常に爛眼な男だったが、また非常に思慮があつて、自分の考へに反することは決して口にせず、そうかと言つて、自分の考へをいつも言うわけではなかつた。知つてゐるらしい様子は少しも見せなかつたが、その行動から見ても、どうも知つてゐたらしかつた。そして、その行動は確かに卑劣な精神から來たものではなく、自分は女主人の主義を奉じてゐるのだから、女主人が主義通りの實行をしてもそれを自分としては不可とすることができない、というところから來ていたのである。アネは夫人と同じぐらいの若さだったが、ひどく老成してどつしりしてゐたから、われわれ二人を、大目に見てやれる子供のように考へてゐた。また、われわれとして、二人とも、アネを尊敬すべき男として見てゐた。アネから受ける尊重を大切に思わなければならなかつた。ママさんがアネに抱いてゐた愛著の全貌を漸く私が識つたのは、ママさんがアネに不貞を働いた以後のことだった。私がママさんによつてのみ考へ、感じ、呼吸してゐたことは、向うもよく知つてゐたから、自分がどれほどアネを愛してゐるかを私に示して、私にも同じようにアネを愛させようとした。そして、それには、アネへの友情よりも敬意の方に重きを置いてゐたのは、その方が私としては最も共感のできる感情だつたからである。ママさんは、アネと私とは二人とも自分の生活の幸福のためにはどうしても必要だと言つてゐたから、われわれ二人の心はどんなに感動し、二人は何度涙と共に抱擁

したことだったろう。これを讀む婦人がたには、どうぞ意地悪く笑わないで頂きたい。ママさんの氣質として、このような要求は、いかげんなものではなかった。本當に心からの要求だったのである。

このようにして、恐らく世界に類例のない社會が、われわれ三人の間に出来上った。われわれの願ひも心配も情愛もすべて共通だった。何ものもこの小さい圈内から出なかつた。一緒に生活する、三人だけで生活する習慣が次第に強くなつて、食事の時に三人のうちの一人が缺けるとか、他人が一人入つたりすると、何もかも調子が狂つた。そして、そういう特殊な關係なのに拘らず、二人だけの差し向ひは、三人一緒にいるよりも楽しさが少かつた。われわれの間に氣がねが起らなかつたのは、互に深く信頼し合つていたからであり、倦怠が生じなかつたのは、三人とも非常に忙しかつたからだった。相變らず計畫好きで活動的だったママさんは、われわれを二人とも暇にはしておかなかつた。それに、こちらにもそれぞれ自分のために時間の要る仕事もあつた。私の考えるところでは、無爲は個人生活にあつても社會生活にあつても、共に害悪を齎すものである。始終一室にとじこめられて、互に顔つき合せ、仕事と言つては、たえず無駄話をしていただけ。こんなことほど、人の見界をせばめ、無駄事・誹謗・無愛想・中傷・虚言などを生むものはない。みな忙しかれば、何か言うことがある時のほかは口を利かない。ところが、何もしていないと、どうしても始終口を利いていなければならぬ。これがあらゆる束縛の中で最も都合な最も危険な束縛である。更に極言すれば、或る會合を眞に楽しいものとするためには、各人がそこで何かしていることが必要であるばかりでなく、何か多少の注意を要する仕事をしている必要がある、と言いたい。編物などをするのは、何もしないと同じことで、編物をしてゐる婦人を樂しますためには、腕を組んだ婦人を相手にすると同じほどの氣骨が折れるものである。しかし、刺繡をしてゐる婦人となると、話は別である。仕事に氣を取られているから、沈黙の間も充實している。腹も立つし、馬鹿々々しくもあるのは、そういう合間に、大の男が十二三人も、立ったり坐つたり、行つたり來たり、踵でくるつと廻つてみたり、煖爐の上の置物を二百遍もひねくり廻したり、饒舌の泉をいつまでも涸らすまいと頭を搾つたりしてゐるのを眺めることである。まったく何というご立派な仕事だろう。こういう連中は、何をしようと、いつも他人や自身の厄介者になるばかりであろう。私がモティエにいた時分は、近所の婦人たちの家へ編紐の仕事をやりに行つたものだった。若し再び社交界へ戻るようになったら、私はいつもポケットの中に劍玉でも忍ばせておくことにしよう。そして、何も言うことがなければ、口を利かなくても済むように、

一日じゅう劍玉で遊んでいよう。皆がてんでこれをやつたら、人間ももつと人が好くなるだろうし、人間同志の交際ももつと信頼が置け、もつと愉快になるだろうと思ふ。要するに、不眞面目な人が笑いたければ笑つてもいいが、私としては、今の世にできる唯一の倫理はこの劍玉倫理だけだ、と言いたいのである。

その上、われわれは此方から倦怠を避ける心配をしなくても済んだ。煩さい連中が絶えずやつて來て盛に倦怠を興えるので、われわれが三人だけになつた時には、もう倦怠は残つていなかったのである。昔はお客が來ると焦々したものだだったが、これは少しも減じなかつた。ただ前と違ふのは、その焦々に氣を取られる時間が前より少なくなつただけであつた。氣の毒なママさんは、昔ながらの計畫や方式の氣まぐれな樂しみを忘れていなかった。それどころか、家計が苦しくなればなるほど、それに備えるために、夢のような考えに耽るのであつた。現在の財源が少ければ少いほど、未來にその財源の夢を見た。この偏執は年が進むにつれて、益々ママさんの心の中に大きくなつた。そして、社交や青春の快樂への嗜好が減退するにつれて、秘法とか計畫とかいふものへの嗜好がそれに代つた。家の中は香具師・製造業者・仙丹師・各種の企業家なぞでいつも一杯だった。そして、この連中は、利益金を何百萬ずつ分配するというようなことを言ひながら、しまひには一エキニのお金欲しいと言ひ出すのであつた。ママさんの家からは、誰も手ぶらで出るものはなかつた。そして、私の驚くことの一つは、ママさんが永い間これほど莫大な浪費をやつていて、よくもその財源を涸らしたり、債權者を厭がらせたりしなかつたものだ、ということである。

この話の頃、ママさんが一番没頭してゐた計畫は、シャンベリーに王室植物園を開設して、これに有給の職員を一人づけるということだ、ママさんの考へた計畫の中では最も條理に合つたものだった。そして、この地位が誰のためかきめられてあつたかは、お察しの通りである。アルプスの山間にあるこの町の位置は、植物學には極めて好都合であつた。そして、いつも一つの計畫をもう一つの別の計畫で容易にしようとするママさんは、それに藥學校を建てる計畫を加えていた。醫者と言へばせいぜい藥劑師ぐらいしかいないこの貧しい地方では、藥學校はまったく有用なもののように思われ

た。ヴィットリオ王の歿後、侍醫長のグロッシがシャンベリーに隠退したことは、この計畫にとって非常に好都合のようにママさんには思われ、恐らくそれから思い立つたのであろう。いづれにせよ、ママさんはグロッシに取り入りはじめた。ところが、グロッシは私が知る限りの最も皮肉な、最も殘忍な男であつたから、なかなか取り入るどころではなかつ

た。次に一例として述べる二三の逸話によってそれが分るだろうと思う。

或る時、グロッシは他の醫師と立會診察をした。その中にはアマシーから呼び寄せられた、患者の掛りつけの醫師がいた。その青年はまだ醫師としては修業が不十分だったが、侍醫長の意見とは反対の意見を敢て述べた。侍醫長は、その返事の代りに、青年がいつ歸國するか、どの道を通るのか、どんな乗物に乗るのか、と訊いた。青年はその間に一々答えた後で、何か御用でもあるのですか、と訊きかえした。すると、グロッシは、

「いや、いや。ただ、君の通り道の、何處かの窓へ行つてね。驢馬が馬へ乗って通るのを拜見したいと思つてさ」と言つたのである。

グロッシはまた金持で冷酷だったと同じく吝嗇でもあった。或る時、友人の一人が良い擔保をもつて金を借りようと思つた。するとグロッシは、友人の手を握りしめ、齒ぎしりしながら、

「君。聖ペテロが天國から降りて来て、三位一體を擔保に入れるから十ピストール貸してくれと言つたつて、貸すもんじゃないよ」と言つた。

また、或る日、サヴォアの知事で、非常な信心家のピコン伯爵の家へ午餐に招かれて、時間より早く先方へ着いた。すると、丁度その時念珠禱の最中だった知事閣下は、グロッシに、暇つぶしにどうです、と奨める。グロッシは返事の仕様もなく、恐ろしく濫い顔をしながら、膝をつく。ところが、二度ほど「アヴェ・マリア」を唱えるか唱えないかのうちに、我慢ができなくなって、不意に立ち上ると、ステッキを持ち、一言も言わずに立去つてしまふ。ピコン伯爵は追いかけるが、グロッシさん、グロッシさん。一寸待つて下さい。向うでは鐵串ですばらしい赤鷓鴣が焼けているんですがねえ」と叫んだ。

グロッシは振向きながら、

「閣下。天使の蒲焼があつても、此處にはとても居られませんか」と答えた、という。

侍醫長グロッシ先生はこのような人だつた。こんな人間を相手に廻して、ママさんはどうとう手なづけてしまったのである。グロッシ先生は非常に多忙な身だったが、それにも拘らず、ママさんの家にはごく頻繁に来る習わしとなり、アネに目をかけて、その物識りを尊重し、ひどく褒めていた。そして、こんな熊のような人間には思いもよらないことだが、

相手に過去の引け目を感じさせないために、アネを尊重に遇する風を装つた。というのは、アネはその時はもう召使の地位にはいなかったけれど、元は召使だったことは誰も知っていたから、その場合侍醫長の垂範と先例さえあれば、人々もアネに對して、他のことではとてもそうしないような鄭重な口を利くようになるにちがひなかったからである。クロード・アネは、禮服を著け、櫛目の正しい假髪を被り、重々しく端正な風采をし、思慮の深い注意の行きとどいた行動をし、藥學や植物學には相當に造詣があり、醫師會の覺えも芽出度かつたから、若し設置の計畫が實施されたら、王室植物園の職員の仕事にやりとげられるだろう、と豫想しても不合理ではなかつた。そして、グロッシも本氣でその計畫を面白いと思つて、これを採用した。そして、後は、平和が恢復して有用な事業のことが考えられるようになり、それに要する經費が支辨できるようになった時を見はからつて、この計畫を宮廷へ持ち出しさえすればよかつたのであつた。

私は植物學のために生れついて來ているように思うのであるが、若しこの計畫が實施に移されたら、恐らく私は植物學に身を委ねるようになっていただろうと思われる。ところが、この計畫は、最もよく組立てられた目論見でもひっくり返してしまふあの不慮の打撃という奴のために失敗してしまつた。私は次第次第に人類の悲惨の一例となるように運命づけられていたわけだつた。恰も、斯様な大試煉に私を呼び寄せていた天命が、そこへ行き著くための一切の邪魔物を、私のために手ずから拂いのけてくれた、と言つてもいいくらいである。或る時、アネは「ゲニビ」を探しに山の頂上へ行ったことがあつた。ゲニビというのは、アルプス山にしか生育しない珍奇な植物で、グロッシ先生が必要としていたのである。その山あるきの時に、この氣の毒な青年は餘り熱心にやりすぎて、とうとう肋膜炎を起した。ゲニビはこの病氣の特効薬と言われていたが、それはアネの生命を救うことができなかった。そして、非常な名醫であることに間違ひのなかつたグロッシの醫術をもつてしても、また、アネの優しい女主人と私との及ぶかぎりの看病にもかかわらず、五日目の日に、この上もない痛ましい死苦の後で、アネはわれわれに抱かれて死んで行つた。この臨終の間、アネを勵ましたのは私だけだつた。そして、私は悲しみと熱誠に溢れてアネを勵ましつづけたので、若しそれが相手に聞えていたら、幾分かはその慰めとなつていた筈である。このようにして、私は最も固い生涯の友を失つた。アネは尊敬すべき稀有の男であつた。アネにあつては、自然が教育の代りとなつていた。そして、下賤の身でありながら、大人物たるのあらゆる徳を養つていた。

*1 アネは一七三四年三月十四日に埋葬された。

世間の前に大人物として現われるためには、永く生きることと處を得ることが恐らく不足していただけであった。

その翌日、この上もなく強く眞剣な悲しみのうちに、ママさんと二人、アネのことを話していた。すると、その話の最中、不意に、自分はアネの衣服を、殊に前から目についていたあの立派な禮服を受け継いでやろう、というあさましい卑しい心が起った。そう考えた私は、その結果、ママさんにそのことを話した。というのは、ママさんに對しては、考えることと話すこととは私に取っては同じことだったからである。この憎むべき卑劣な言葉ほど、ママさんに、今度の損失を沁々と感じさせたものはなかった。魂が高潔で、無私無慾なのが故人の持っていた長所だったからである。氣の毒なママさんは、一言の返事もなく、向うを向いて泣きはじめた。高價な貴重な涙。私にはこの涙の意味が分って、それは私の心の中にすべて流れこんだ。その涙は、不誠實な低劣な感情を跡形もなく洗い去った。この時以後、このような考えは二度と心に起ることがなかった。

この損失は、ママさんに悲しみと同じほどの損失をかけた。この時以後、ママさんの事業は落ち目に向うばかりとなった。アネは規帳面な青年で、女主人の家の中にもいつも秩序を保っていた。人々はアネの監視を恐れていたから、浪費もそれだけ少なくて済んだ。ママさん自身もアネの非難が怖くて、無駄使いをずいぶん控えていた。ママさんはアネの愛情だけでは足りず、尊敬も失うまいとしていたから、あなたは人のものも自分のものも見境なく使い散らすなどと、時々アネから思い切つて言われると、それが正當な小言だけに、ママさんには應えた。私もアネと同じ意見で、そう言つたことさえある。しかし、私はアネほどママさんへ押しが利かず、私のお説教はアネのそれのようにには利き目がなかった。アネがいなくなつてみると、私がどうしてもその代りとならざるを得なかったが、それは好むところではなく、また私の柄でもなかった。私は旨くやれなかった。注意も足りないし、ひどく臆病だった。自分だけで口小言を言いながら、何事も成行きに委してしまつた。その上、信用だけは同じように信用を得ていたが、權威が同じではなかった。家の無秩序を見て、これに悩み、これを嘆いたけれど、私の言葉は聴き入れられなかった。私は、餘りに若く餘りに激し易かつたから、理智的でいられる権利が持てなかつた。つまり、私が會計監査の役目に手を出したりすると、ママさんはこちらの頼つたを優しく叩いて、私のことを小型マントール先生^{*}などと呼び、否應なしに私に相當した役目をさせるのだった。節度のない浪費が、晩かれ早かれ當然ママさんを窮境に投げこむだろうという深刻な感情は、自分が家の監視人となつ

て、收支の間の不均衡をこの眼で判断できるようになつただけに、一層強い印象を與えた。その頃以後、常に私が自分自身に感じて來た吝嗇に傾く氣持は、この時期にはじまつたのである。私は發作的な衝動に馳られた時でなければ、決して氣遣いじみた無駄使いをしたことはなかった。しかし、その頃までは、お金が有ろうと無かろうと、大して氣にかからなかつた。それが、そういうことが氣になりはじめ、自分の財布を大切にしようになつた。私が卑しい人間になつたのも、實は氣高い動機からだった。というのは、本當のところ、私は豫想する悲境に臨んで、ママさんにいくらかの資力を残しておくことしか考えていなかったからである。債權者たちから年金を差押えられはしないか、年金が全然停止されはしまいか、と心配した。そして、自分の狭い考えから、そうなれば僅かな貯金でも非常な助けになるだろうと思つていた。しかし、貯金するためには、また、殊に貯金を使わずにしておくためには、ママさんに隠れてしなければならなかつた。なぜなら、ママさんが遺算段しているのに、私が小金を持つていたことは、ママさんに隠れてしなければならなかつたからである。そこで、私は、此處彼處と小さい隠し場を見つけて、そこへ何ルイかのお金を蓄えておいた。この蓄えをママさんの足元へ投げ出す時の來るまでは、ぼつぼつ増やして行こうというつもりだった。ところが、隠し場所の選擇方が甚だ下手だったので、いつもママさんから看破された。そして、隠し場を見つけたことを私に知らせるために、ママさんは、私の藏つておいた金貨を奪つて、その代りに異つた貨幣でもっと多額のものを入れておくのであった。私はすっかり恥かしくなつて、自分の小さい寶を共同財産の中へ繰入れてしまつた。すると、ママさんは、さつそくそのお金を私のためにといつて、銀の劔とか時計とかいうような、身につけるものや、道具類に必ず費消してしまふのだった。

お金を蓄えるのは決して旨く行きそうもないし、ママさんに取つても何の足しになりそうもないことが分つた。そこで、私の心配する不幸に備えるには、ママさんがもう私を養えなくなり、自分のパンにも事を缺くようになった場合に、私がママさんを養えるようになることより他の手段はない、と終に氣がついた。ところが、生憎なことに、私は自分の計畫を好きな方面に樹つて、幸運を音楽に求めようと躍氣になつた。そして、頭の中に樂想や歌曲が思い浮ぶのを感じると、これを旨く活用できるように成れさえすれば、忽ち有名な人になる、その樂音をもつて世界じゅうの金銀をすべ

*1 カンプレーの司教であり、後にフランス王太子の師傅となつたフェヌロンの教育小説「テレマク」に出て來る人物。マントールは謹嚴な理想的師傅の典型とされている。

て吸い寄せるような、現代のオルフェウス*1になれるものと考えた。どうやら楽譜が読めるようになっていたから、あとはただ作曲を學べばいい。困難はそれを教えてくれる誰かを見つけ出すことだった。というのは、例のラモーだけでは、獨學で勉強を遂げられる望みはなかったし、ル・メートル先生がいなくなつてからは、和聲學の一寸でも分る者は、一人もサヴォアにはいなくなつていたのである。

さて、此處でもまた、私の生涯を満たしている無定見な行爲の一つを、諸君は見るわけである。この無定見は、目的物を直接に目ざしていると考えられている時ですら、度々私をその反對に奔らせるものであった。ヴァンテュールは前に作曲の先生であつたブランシャル師のことを度々話したことがあつた。非常に才能のある秀でた人で、當時はブザンソンの大教會の樂長であつたが、今はヴェルサイユ會堂の樂長である。私はブザンソンへ行つて、ブランシャル師の教えを受けようと思いついた。この思いつきはなかなか條理にかなつたものだと思われたから、ママさんにもそう思わせてしまふことができた。ママさんは、さつそくこの小旅行の準備のために立働きの、しかも、その支度は何事にもそうしたように金に飽かせたものだった。このように、私はいつも破産を防ぎ、將來ママさんの浪費の穴を埋める計畫をもつていたのだが、この時ですらまずママさんに八百フランからの出費をかけてしまつた。ママさんの破滅を救えるようになるために、それに拍車をかけていたわけだった。ずいぶん馬鹿げた行いではあつたが、私にしても、また、ママさんにしても、それぞれ勝手な夢を描き、私は私で、ママさんのために役立つ仕事をするのだと思つていたし、ママさんはママさんで、私のために役に立つ仕事をするのだと信じこんでいた。

私はヴァンテュールがまだアマシューにいて、ブランシャル師への紹介状が貰えるつもりにしていた。ところが、もうアマシューにはいなかった。ヴァンテュールの消息としては、私への置土産として残して行つた自作自筆の四部のミサ唱歌だけで満足しなければならなかつた。私はこれを紹介状代りに持つて、ジュネーヴを経由して、ブザンソンへ行つた。ジュネーヴでは親戚に会いに行つた。また、ニヨンを通る時には、父に會つたが、父は例の如く私を迎え、荷物を後から届けることを引受けてくれた。私は馬に乗つていたから、荷物はおくれて來るのである。ブザンソンに着いた。ブランシャル師は快く私を迎え、教授もしてくる、他の用もしてくると約束した。いよいよ稽古をはじめるときになつて、父からの手紙で、私の荷物が、スイス國境にあるフランスのルツ税關で差押えられて、没收されたことを知つた。この知ら

せに喫驚した私は、ブザンソンで知合ひになつた人々の力をかりて、没收の理由を知ろうとした。というのは、密輸品などは絶対に持つていなかつたことを確信していたから、どういふ口實を没收の理由にしたのか想像がつかなかつたからである。それが、とうとう分つた。珍らしい話だから、此處に述べておかなければならない。

私はジャンベリーで、リヨンの人で、大變に好人物のデュヴィエ氏*2という老人を知つていた。この人は、攝政時代*3には査證局で働いていたが、失職してからは、土地調査局の方へ勤めに來ていたのである。デュヴィエ氏は社交界の生活をした人で、才能もあり、知識もあつて、柔和で腰が低かつた。音樂にも通じていた。私と同じ部屋で働いていたから、まわりにいる熊のような粗野な連中の中で、特にこの人と交わるようになった。氏はパリと手紙をやりとりしていたから、いろいろ詰らないことを知つていた。つまり、なぜということなしに擴がり、いつの間にか消滅し、その聲が止まればもう誰も二度と思ひ出すことのないような、詰らない、取るに足らないこと、その場限りの新聞種だつた。私は時々デュヴィエ氏をママさんの家の食事に連れて來たから、向うはいくらか私の御機嫌も取つた。そして、私を面白がらせようと思つて、下らない色々な書き物を私にも好きにならせようと骨を折つた。私はそういうものが大嫌いで、自分一人では讀んでみる氣は一度も起らなかつたのである。ところが、不幸にも、そういう碌でもない紙切れが一枚、新調の服の、チヨッキのポケットに残つていたのであつた。尤もその服は、税關吏の眼を通すために、二三度は着たものであつた。その紙切れは、ラシーヌの「ミトリダード」の美しい場面を作りかえた、詰らないジャンセニスト流*4の狂詩文であつた。私はこれを十行も讀まずに、ポケットの中へ入れ、そのまま忘れていたのである。これが私の旅装を没收させたわけだつた。税關吏は私の鞆の内容品目録の冒頭に、大げさな調書をつけていたが、この調書の中で、件の書き物はフラ

*1 ギリシャ 神話に出て來る音樂の名手。
*2 ジャンベリーの北方一〇〇キロばかりのところにあるフランスの都市。
*3 一七三二年か三年の六月二十八日であると言われる。到着の翌日ヴァラン夫人に宛てて出したルソオの熱烈な書簡が今日も残つてゐる。
*4 フランスとスイスの國境にあるジュラ山脈中の國境の小村で、この街道は昔から兩國を結ぶ主要な道路であつた。
*5 ルイ十四世の歿後、ルイ十五世が成年に達するまでオルレアン公が攝政となつてゐた。一七一五年から一七二三年までのことを言う。
*6 ラシーヌは十七世紀の有名なフランスの古典悲劇作家。「ミトリダード」は五幕の韻文悲劇である。
*7 ジャンセニストは常にエスイク派と對抗するカトリックの一派で、異端視されて迫害を蒙つてゐた。

ンスで印刷配布の目的をもってジュネーヴより持ち込まれたものである、と推測し、神及び教會の敵に對する神聖な罵詈に言を及ぼし、この極悪非道な計畫を未然に防いだ自分たちの信心深い監視についての自讃で終っていた。恐らく私のシヤツまでも異教の匂いがしていたのだろう。というのは、あの恐ろしい紙切れのために、私の貧しい荷物については、決して理由も消息も知らされることなしに、一切が没收されてしまったからである。私が問い合せた徴税官は、色々な報告や通知や證明や覺などを此方に要求して來たので、まるで迷宮にでも迷いこんだ心持で、しまいは何もかも抛棄してしまわなければならなくなった。私はルッス税關の調書を保存しておかなかつたことを本當に残念に思っている。それはこの書に附屬する筈の文集の文書の中では、特に目に立つべき一篇であつた。

この損害で、ブランシャール師とは何もしないうちに、直ぐにジャンベリーへ歸らなくてはならなかつた。そして、色と考えてみて、自分は何をやっても不運ばかりにつきまといわれることが分つたので、これからは、ただ專一にママさんの傍にくっついていて、ママさんの運命の中に安住し、自分の力の及ばない未來のことを徒に心配しないように、と決心した。ママさんはまるで私が何か大した財寶でも持ち歸つたように私を迎え、少しづつまた衣類を整えてくれた。そして、二人にとっては、相當に手痛い私の不運ではあつたが、それもやがて來たと同じ早さで忘れられてしまつた。

この不運のために、音樂の方の計畫は少しさめてしまつたけれど、相變らず例のラモアの勉強はやめずにいた。そして、苦心の末に、とうとうラモイが分るようになり、作曲もいくつか小さい試作品ができた。それが旨く行つたので、私はなお勇氣が出た。アントルモン侯爵の子息のベルガルド伯爵は、アウグスト王の歿後、ドレスデンから歸國していた。伯爵は長いことパリにいた人で、音樂を非常に好み、ラモイの音樂に熱中していた。その兄弟のナンジ伯爵はヴァイオリンを弾き、二人の姉妹に當るラ・トゥール伯爵夫人は少し歌ができた。このために、ジャンベリーでは音樂が流行し、公開の音樂會のようなものができ上つた。人々は初め私をその指揮者に擬したが、それは少し荷が勝ちすぎることに氣がついて、ちがつた取きめをした。それでも、私はその音樂會に自作の小曲を發表してはいたが、とりわけ或る歌謡曲が大いに人氣を呼んだ。大して上出來の作ではなかつたが、新しい歌詞と、私の作としては豫期以上の印象的なものに満ちていた。この紳士たちは、私があまり樂譜も讀めないもので、まさか作曲がどうやらできようとは思つていず、他人の作を旨くやつてゐるのだ、と信じていた。これを確かめるつもりで、或る朝のこと、ナンジ氏がクレランボアの歌謡曲をもつて私

に會いに來た。氏の話によると、その歌謡曲は自分の聲の都合で移調したものであるが、そのために原曲の低音部が樂器で演奏できなくなつたから、別の低音部を作つて附けなければならぬといふのである。これは大變な仕事で、すぐにこの場というわけにはいかない、と私は答えた。氏は私が逃げるつもりだろうと思つて、それではせめて宣敘調の低音部だけでもいいから作つてくれ、とせき立てた。そこで私は作つてみた。勿論旨くは作れなかつた。何事につけても、旨くやるためには、氣樂と自由が私には必要だつたからである。しかし、少くも私はそれを規則通りには作つた。そして、氏はその場にいたのだから、私が作曲法の原則を心得ていたことを疑うわけにはいかなかつた。このようにして、私は女子を失ふことはなかつたが、しかし、みんなが音樂會を開き、しかも、私がいなくても濟むのが分つて來たので、音樂に對しては少し熱がさめた。

大體その頃平和が恢復して、フランス軍はまた山を越えた。多くの將校がママさんに會いに來たが、中でも、オルレアソ聯隊長ロートレック伯爵という人に、ママさんから紹介された。伯爵は後にジュネーヴ駐在の全權公使、最後には元帥にまでなつた人である。ママさんの話を聞いて、伯爵は私に非常な關心を持ち、色々なことを約束した。この約束は晩年の頃になつて漸く思い出してくれたが、この頃には私も伯爵の力を必要としないようになっていた。當時、トリノの大使を父に持つセネクテール若侯爵という人も、その頃ジャンベリーに立寄つた。侯爵がマントン夫人宅に午餐に招かれた時、私もやはり行つていて、食事を共にした。食後、音樂の話になつた。侯爵はなかなかの音樂通だつた。當時、歌劇「エフタ」^{*4}が出たばかりだつた。侯爵はその話をした。みんなはその本を見せて貰つた。侯爵は私に向つて、二人でこの歌劇をやってみませんか、と言つて、私を頼え上らせた。侯爵が本をめくると、丁度次の有名な二部合唱のところが出た。

La terre, l'enfer, le ciel même (大地も、地獄も、空でやえぬ)

Tout tremble devant le Seigneur. (主の御前にすべて打ち震う)

*1 異本。「……たつては、ちかち手を盡しても、決して……」

*2 ポーランド王アウグスト二世は一七三三年に歿した。

*3 一七三五年十月三日に假條約がウイーンで調印された。

*4 ベルグランの師の歌詞、モントクレールの作曲したもので、一七三二年三月四日に初演された。

「君は幾音部歌いますか。私はこの六音部を受持ちましょう」と、セネクテール侯爵は言った。私はまだそういうフランス風の性急さには慣れていなかった。そして、私でも時には聯合樂譜をどうにかこうにか讀むことはあったが、それにしても、同じ人間が同時に、六音部はおろか、二音部でも歌えるとは理解できなかった。音樂の練習で、このように一音部から他の音部へすつと移り、聯合音譜を一目に見渡すというようなことほど骨の折れる仕事はなかった。セネクテール侯爵は私がこの申出を斷わつた態度から、この男、音樂が分らないらしい、と思ひ込もうとしたにちがいない。マントン嬢に贈りたいと思つている歌を譜に取つて貰いたい、と私に言い出したのは、多分その疑念を確かめるつもりだったのであろう。私は斷わるわけにもいかなかった。セネクテール侯爵はその歌を歌つた。私は譜に取つた。しかも、何度も歌を繰返して貰わなかつた。やがて、侯爵は譜を讀んで、非常に正確に書いてあると思つた。實際に正確でもあつたのである。侯爵は私が迷惑に思つていたことを知つていたので、この一寸した成功を大げさにほめて自分の氣を晴らした。實は極めて簡單なことだつたのである。要するに、私は音樂には非常に通じていた。ただ、一瞥の機敏さだけが足りないものであつた。これは何事につけても私のできないことだつたし、殊に音樂では十分の練習によつてでしか得られないものである。いずれにせよ、私に一寸恥かしい思ひをさせたことを、他の人々や私の心から消そうとして、侯爵が色々と親切に氣をつかつたことには、私も心からうれしく思つた。そして、それから十二年か十五年経つて後、パリの方々の家でセネクテール侯爵と顔を合すことがあつたが、私はその時何度かこの逸話を相手に思ひ出させ、いつまでも私がそれを忘れないでいることを示そうと考へた。しかし、侯爵はあの時以來ずっと兩眼を失つていた。昔はその眼をよく使つたものだと思ひ手に思ひ出させて、侯爵の悲しみを新たにするに忍びなかつた。だから、私は口を噤んでいた。

茲で私は自分の過去の生活を現在のそれと初めて結びつける時期に觸れて來るわけである。今日まで續いている當時からの幾人かの交友は、私にとって非常に貴重なものとなつた。私の舊友たちはあの幸福だつた無名の頃のことを度々なつかしく思ひ出させてくれた。その頃、私の友と自任した者たちは、本當に私の友であり、純粹な好意から、私のために私を愛してくれた。有名人と關係を持つとうという虚榮心からでもなく、或いは友と稱して、友を傷つける機會をより多く見出そうという祕かな慾望からでもなかつた。わが舊友ゴフクールと初めて知合つたのも、この頃であつた。人々は私からゴフクールを奪い取るうとあらゆる努力を傾けたが、それにも拘らず、ゴフクールはいつまでも私の友として残つてい

た。いつまでも残つていた！ 否。あゝ、悲しい哉。私は最近この友を失つたばかりなのだ。^{*1}しかし、ゴフクールは、生きることをやめた時でなければ、私を愛することをやめなかつた。そして、われわれの友情は、ゴフクールの死と共に終つたのである。ゴフクール氏はこの世に於ける最も愛すべき人々のうちの一人だつた。この人に會つてこの人を愛さないことはできなかつた。ゴフクールと生活を共にして、この人に全身から愛著しないことはできなかつた。私は生涯のうち、これほど豁達な、これほど優しい、これほど明朗な、これほど感情と才知とを示した、そして、これほど信頼を抱かせる顔を見たことがなかつた。どんなに慎しみ深い人でも、ゴフクールを一目見ると、忽ち二十年來の知己のように親しくならざるを得なかつた。そして、私のように、初對面の人とはなかなか氣易くなれないたちの者でも、ゴフクールに對しては最初の瞬間から心易くなつた。その音調・抑揚・談話はその顔つきに全く合致していた。聲音は澄んで、重くて、よく透つた。太く鋭い美しい低音は、耳を滿たし、心に響いた。あれほどむらのない柔和な陽氣さ、あれほどさっぱりした眞實の優美さ、また、あれほど趣味に洗煉された自然な才能を持つことは不可能であつた。それに加えて、少々八方美人すぎたかも知れなかつたが、とにかく人を愛する心、分けへだてをしない世話好きな性格。熱心に友人たちのために盡す、或いは、むしろ、自分が盡せる人の友人となる、しかも、他人の仕事を非常に身を入れてやりながら、自分自身の仕事を極めて巧みに運んで行くことを知つてゐる。ゴフクールはつまらない時計屋の息子であり、自身もやはり時計屋であつた。しかし、その容貌と才能とはこの人を他の社會へ呼び、本人もやがてその社會へ入つたのである。ジュネーヴ駐在のフランス辨理公使ラ・クロジュール氏の知遇を受け、その紹介で、パリに多くの有益な知己を得た。そのお蔭で、ヴァレ州の鹽の用達を引き受けるようになった。二萬リーヴルの年收を得た。相當に輝かしいその幸運も、男の方面では、そこが行きづまりだつた。ところが、女の方面では、門前市をなす盛況だつた。選りほうだつた。^{*2}そして、好きなことをやつた。それにもまして、ゴフクールとして珍らしく、また尊敬すべきことは、あらゆる階級の人々と關係をしていながら、何處へ行つても可愛がられ、すべての人からちやほやされ、決して誰からも妬かれたり憎まれたりしなかつたことであつた。こうして、ゴフクールは生前ただの一人も敵を持たずに死んだと私は信じてゐる。幸福な男だ。ゴフクール

*1 ルソオより二十歳ほど年長のゴフクールは一七六六年に歿した。

*2 奥本。「そして、何でも選んだ」

は毎年エスへ湯治に來た。ここには近隣の地方から名流の人々が集つた。サヴォアの貴族とはすべて懇意だつたゴフクールは、エスからシャンペリーへ來て、ベルガルド伯爵やその父君のアントルモン侯爵に會つた。この人々の家でママさんはゴフクールと知合いになり、また私をも引合おせたのだつた。この相識は、將來べつに何ともあることもありそうになつたし、また永い年月の間うち絶えていたけれど、後に述べるような機會に再び温められ、まことの友愛となつたのである。その友愛から言つても、私があれば親しく交わつた友人のことを話させて貰つてもいいわけであるが、ゴフクールの思い出について、些も個人的な利害を加えなくとも、この人はまことに愛すべき人間であり、幸福に生れつゝいた男であつた。その思い出は、人類の名譽のために、永く保持すべきものと考へる。尤も、この魅力的な人でも、後に見られるように、やはり他の人々と同様に缺點はあつた。しかし、若しこゝろい缺點がなかつたら、恐らくゴフクールはそれほど愛すべき人間とはならなかつたかも知れないのである。この人をできるだけ興味多い人間とするためには、何かこちらから向うを赦してやれる點もなければならぬのである。

同じ頃の、もう一つ別の關係がまだ消えないでいて、それが、人間の心からなかなか失せにくいあのほかないこの世の幸福という希望を餌に、今だに私を誘惑している。サヴォアの郷士コンジエ氏は、當時まだ若く、愛すべき人だつたが、音楽を習おう、というよりむしろ、音楽を教える人と知合いにならうという氣を起した。才知もあり、藝術に對する趣味もあつたコンジエ氏は、穩やかな性格の持主で、それがこの人を非常に親しみ易くしていた。そして、私自身も、さういふ穩やかな人だと思ふ相手には、非常に親しみ易かつた。關係はすぐに結ばれた。文學と哲學の芽生えは私の頭の中にそるそろろはじり、全く發育しきるためには、ただ僅かの教化と張合いと待つのみであつたが、これをコンジエ氏のうちに、見出したのであつた。コンジエ氏は音楽にはあまり向いていなかった。それが私にはやはり一つの好都合となつた。稽古の時間は、樂譜で歌を練習することより他のことで過ぎた。二人で朝食を食べ、雜談をし、何か新しいものを讀んだが、音楽のことには一言も觸れなかつた。當時、プロシヤ皇太子とヴォルテールの間の書簡が評判になつて、われわれはこれら二人の有名な人物について、屢々話を交した。その一人は數年後に帝位についた人であつて、すでにその頃から將來の鋒芒を現わしていたし、他の一人は、現在の名聲に引きかえて當時大變な不評であつたから、われわれはヴォルテールにつきまといつて思われたその不運に心から同情した。こゝろい不運が大人物にはつきものであるこ

とは、屢々人の見る通りである。プロシヤ皇太子は若年の頃はあまり恵まれていなかった。そして、ヴォルテールも決して幸福になれないように生れつゝいていたように思われた。この兩者に對してわれわれの抱いた興味は、この二人に關係したあらゆることに擴がつて行つた。ヴォルテールの書いたものは一つとして見逃さなかつた。さういふものを好んで讀んでいるうちに、優雅な文章の書き方を覺えたい、すつかり魅せられてしまったこの作家の美しい色彩を努めて模倣したいという氣が起つた。それからしばらく後で、ヴォルテールの「哲學的書簡」が現われた。これは確かにヴォルテールの最良の作ではないけれども、私の心を最も多く學問の方面へ誘つた作であつて、その時以後、學問への興味が生れてからは、もはや消えることはなくなつたのである。

とは言へ、この方面に全く没頭する時期はまだ來ていなかった。私にはまだ移り氣な氣質、放浪の慾念が残つていた。この氣持は全く消滅していたわけではなく、抑えつけられていたのであつて、これが私の孤獨な性質には餘りに賑やかすぎるヴァラン夫人の家の空氣によつて助長されてきた。毎日のように夫人の家へ、各方面から押しよせて來る澤山の見も知らぬ男たち、その連中がでんでん夫人を騙すことしか考へていないという確信、さうしたものは私の安居を非常な苦痛にした。クロード・アネに代つて、女主人から何事も打明けられるようになっていた私は、夫人の事業の状態を前よりも詳しく知ることができ、それがぐんぐん悪くなつていくの氣がついて慄然とした。私は何度となく諫言したり、頼んだり、急ぎ立てたり、懇願したりしたけれども、いずれも徒勞であつた。夫人の足元に身を投げたり、迫り來る危機を強く説き聞かしたりした。出費を節するようになり、それにはまず私に關する出費からはじめようになり、借金と債權者をいつまでも増やしてばかりいて、年を取つてから苦しい目を見たり貧窮に落ちたりする危険を冒すより、むしろまだ若いうちに少し我慢をするように、こんなことを、私は熱心に忠言した。夫人は心からの熱意に動かされて、私を可哀そうに思ひ、この上もなく立派なことを約束してくれた。ところが、誰か土百姓の一人でもやつて來ると、忽ち何もかも忘れてしまつた。いくら諫めても利き目のないことを千萬遍も身に沁みて經驗してからは、もう自分には防ぐことのできない不幸から

*1 マルセイユから三十キロばかりの所にあり、湯治場として古來有名である。シャンペリーからは一五〇キロ以上距つてゐる。

*2 ヴォルテールは當代の大家作家として誰知らぬものはない。後にルソオとも關係が生ずる。プロシヤ皇太子といふのは後のフレデリック二世で、ヴォルテールとこの國王との交友關係もまた有名である。尙、卷末の註38參照。

こちらで眼を外らずより他に何が残されていたらうか。私は門を守ることでできなかったその家を遠ざかった。ニヨンへ、ジュネーヴへ、リヨンへ、何度か小旅行をした。これは私の秘かな悩みを紛らしてはくれたが、同時にその出費のために悩みは増加した。節約した金をママさんが本當に役立ててくれるようだったら、私はどんな不自由もよるこんで忍んだであろうことは、ここに暫って言える。ところが、自分が節約しただけのものは、みんな悪人たちの手に渡ってしまふにきまっていたから、私は、ママさんの大まかなのにつけこんで、悪人どもとのお金の分け取りをやったわけだった。そして、屠殺場から歸つて来る犬のように、自分が助けることのできなかつた肉片から、自分の食い分だけを奪い取るのであつた。

このような旅行の口實は私にはいくらでもあつたし、また、ママさんだけでも口實を作ろうと思えば、いくらでもあつた。ママさんには到る處に關係者や相談事や用件や、誰か間違いのない人に委せるべき用向きがあつたからである。ママさんは私を使いに出したが、私の方も行きたがつた。このために、自然と旅行がちの生活を送るようになった。こういう旅行は、私に幾人かの善い知人を作らせてくれ、そのために、後に、愉快と利益とを得たのであつた。とりわけ、リヨンで、ペリション氏と知合つたこと。この人は私にずいぶん好意を持っていてくれたのに、こちらから十分にその友情を開拓しなかつたのを残念に思つている。また、あの善良なパリゾと知合つたこと。これは後に話す。グルノーブルでは、デイバン夫人と、バルドナンシュ裁判所長夫人と知合つたこと。バルドナンシュ夫人は非常に才知のすぐれた女性で、若しもつと度々會うことができたなら、きっと私を可愛がつてくれたらうと思われる。また、ジュネーヴでは、フランス辨理公使ラ・クロジュール氏と知つたこと。この人は度々私の母の話をしたが、母が死んで年月も経つていたのに、この人の心からは母のことが忘れられなかつたのである。また、バリオ父子と知つたこと。父の方は、私のことを自分の孫と呼んでいたが、非常に楽しい附合いのできた人で、私の識つていたうちの最も尊敬すべき人の一八であつた。共和國の騒亂の折には、この父子の市民は別れ別れに反對黨に身を投じた。息子は市民黨、父親は政府黨だつた。そして、一七三七年に、いよいよ武器を取るようになった時に、私はジュネーヴにいて、父と子が同じ家から、一人は市廳舎へ行くために、一人は自分の屯營へ向うために、出かけて行く姿を見た。二時間後には互に死闘を交える戰場に相見えることを覺悟していながら。この凄烈な光景は私に非常に強い印象を與えたので、たとえ自分がいつか公民權を再び恢復することがあ

つても、この身をもつて、或いは自分の意見によつても、いかなる内亂にも加擔しない、國內に於て、武器によつて自由を護るようなことはしない、と心に誓つた程であつた。そして、或る微妙な場合に際してこの誓いを保ち得たことを、私は自ら立證できるのである。この節度にいくらかの價値があつたことは人々も認めるであらう。少くも私はそう思つてゐる。

しかし、當時の私は、武器を採つたジュネーヴが私の心に刺戟したあの愛國心の、最初の醗酵といふところまでは行つていながつた。人々は、私に取つて非常に重要な重荷となつてゐる或る事實によつて、私が如何にそつした愛國心から遠かつたかを判断できると思ふ。この事實は、適當な折に述べるのを忘れたが、省略することができないものである。

叔父のベルナルは、數年前から、カロライナ州へ行き、そこで、自分の設計したチャースルタウンの市街の建設に當つてゐた。そして、間もなくその地で死んだのである。私の可哀そうな従兄も、プロシヤ王に仕えて、やはり死んだから、叔母はつまりほとんど同時に息子と夫を失つたわけだつた。この損失は、叔母に残された最も近い血縁、つまり私への愛情を少し温めることになつた。私は、ジュネーヴへ行つた時は、いつも叔母の家へ泊つた。そして、伯父の遺した本や書類を捜し出したり、めくつて見たりした。そこには珍らしいものや、誰も氣づいていながつたらしい手紙等が澤山見出された。そういう紙屑なぞ少しも大事に思つていながつた叔母は、ほしいと言えばみんなくれたかも知れなかつた。しかし、私は、新教宣教師だつた祖父ベルナルが自ら書きこみをしている二三冊の本だけで満足した。その中には、四折版のロオの遺作集があつて、餘白には立派な評註がいっぱい書き込んであつた。私はこれを見て數學を好むよつになつた。この本はヴァラン夫人の藏書の中に残つてゐる。自分のものとしてとつておかなかつたことを、いつも残念に思つてゐる次第である。この本の他に、草稿の儘の覺書を五つ六つ貰ひ足した。一つだけ印刷した覺書があつたが、それは有名なミシュリ・デュクレの書いたものだつた。デュクレは非常に才能があり、學者で見識の高い人だつたが、餘りに活動的

*1 本書四頁参照。

*2 アブラハム・ベルナルのこと。少年時代の交情のことは既に出た。

*3 ジャック・ロオといつて、デカルトの弟子の物理學者（一六二〇—一六七五年）。

*4 革命黨員で非常な學者として知られてゐる。一七六〇年アルベルで獄死した。

に過ぎて、ジュネーヴの官憲にひどい虐待を受け、ベルヌの叛亂に加擔したとかいうことで、永年アルベールの城砦に拘禁されていたが、最近そこで死んだ人である。

その覺書は、ジュネーヴで一部實施に移されたあの馬鹿々々しく大げさな築城計畫に對する相當に明敏な批評であつたが、この雄大な企圖の實行に當つて議會が抱いた祕密の目的のことを知らない専門家たちからは、大いに冷笑されたものであつた。ミシュリ氏はこの計畫を攻撃したといふことで、築城委員會から除名されたけれど、二百名の議員の一員として、また公民の一人として、これについての自分の意見を率直に述べることができると信じた。そして、この覺書によつて、それを行つたわけであるが、不注意にもこれを印刷に付したのであつた。印刷に付したと言つても、公にしたのではなかつた。というのは、デュクレはこれを二百名の議員に送付するために、その部數だけしか印刷しなかつたのであるが、それも、小議會の命によつてすべて郵便局で押收されたのであつた。私はこの覺書を叔父の書類の中から見出したが、これには叔父が委任されて書いたその辯駁書もついていた。そして、私はこの兩方とも貰つて歸つた。この時の旅行は、土地調査局をやめて間もなくのことので、局長のコツチュエルリ辯護士とはまだいくらか關係があつた。それからしばらくして、税關長が、私を自分の子の代父に頼もうと思ひつき、代母にはコツチュエルリ夫人を配した。私はこの名譽にすっかり有頂天になつた。そして、辯護士のコツチュエルリ氏と、このように近しく交われることを誇りとして、この榮譽に相應しい貫祿を見せるために、さも偉そうな振舞いをしようと思ひかけた。

そういう考えから、例のミシュリ氏の印刷した覺書をコツチュエルリ氏の二見に供するよりほかに良いことはあるまいと思つた。まったく、その覺書は珍らしいものであつたから、自分が國家の機密を知つてゐるジュネーヴの著名人のうちの一人だといふ證據になるものだつた。ところで、自分でもそのわけが分らないのだが、ただ一寸した遠慮じみた氣持から、この覺書に對する叔父の辯駁書はコツチュエルリ氏に見せなかつた。多分、それが草稿のままであつて、同氏には印刷したものしか必要がなかつたからだつたためと思はれる。ところが、相手は、私が愚にも渡してしまつたこの書き物の値打を十分に察してゐたから、私はその後再びこれを取り戻すことも、見ることもできなかつた。そして、いくら骨を折つても無駄なことが分つたので、今度はこの事を自慢にして、盗まれたものを向うへの贈り物に變形した。しかし、役に立つといふよりむしろ珍らしいと言ふべきこの書き物を、コツチュエルリ氏がトリノの宮廷へ持ちこんで見せびらかし、これ

を手に入れるために要した費用を、何等かの方法で拂い戻して貰おうと大變な苦心をしたことは、私の一瞬も疑わないうところである。幸いに、將來どのような不慮なことがあつても、サルジニヤ王がジュネーヴを攻圍するなぞといふことは最もありそうでないことの一つである。しかし、このことが絶対に有り得ないとは言えないから、私としては、ジュネーヴの最大の缺點をその最も舊い仇敵に教えた自分の愚な虚榮心を常に自ら咎めていなければならぬであらう。

私はこのようにして、音楽と妙薬と計畫と旅行との間に二三年の年月を過ごした。たえずあちらこちらと移り行き、何の目あても分らず落着こうと求めていたが、文學者に會つたり、文學談を耳にしたり、時には自分でもその仲間へ入つたり、また、書物の内容の知識よりもその氣取つた言葉使いを身につけたりしながら、次第々々に學問の方へ惹かれて行つた。何度かジュネーヴへ旅行したが、そのついでに、時々、舊友のシモン氏に會に行つた。この人はバイエヤ^{*1}やコロミエ^{*2}から引いて來た文學界の新しい消息をもつて、萌しかけた私の向上心を非常に煽つてくれた。また、シャンベリーでは、或るドミニク派の僧と度々會つた。この人の名は忘れたが、ごく人の好い修道僧で、物理學の先生をしてゐた。よく小さい實驗をやつて見せて、私を極度に楽しませた。私は、この人に倣つて、魔法インキを拵えてみようと思つた。そこで、まず瓶の半分以上に生石灰と石黄と水とを入れ、それから、よく瓶の栓をした。すると、忽ち烈しい沸騰がはじまつた。瓶の栓を抜こうと驅け寄つたが、もう間に合わなかつた。瓶はまるで爆彈のように私の顔へ破裂した。石黄と石灰とをたたかき呑んだ。今にも死にそうになつた。六週間以上といふもの眼が見えなかつた。こうして、原理も知らずに實驗物

理學に手を出すものではないことを知つたのである。

この出來事は、しばらく前から目立つて悪くなつてゐた私の健康にとつて、折悪しく起つたのであつた。胃も肺も丈夫であつたし、どんな種類の不攝生もしなかつた自分が、どうしてそのように目立つて衰弱したのかは分らない。肩幅も相當に大きく、胸部も廣かつたから、肺は十分に働けた筈だつた。それなのに、息切れがする、壓迫感がする、思はず溜息が出る、動悸もする、血も吐いた。弛張熱が不意に出て、その後はこれがどうしても去らなかつた。少しも内臓に悪いと

*1 アドリアン・バイエ。フランスの學者で、多くの作家論、作品論を書いたが「デカルトの生涯」は最も有益な書とされている(一六四九年—一七〇六年)。

*2 ポール・コロミエ。同じくフランスの學者で、オランダ、イギリス等に行き、後にイギリスのカンタベリー司教區の圖書館長となつた。

ころがなく、健康を害するようなことは何一つしないのに、どうして血氣旺んな若者がそんな状態に陥るのであるか。「剣は鞘を損ずる」ということが時々言われる。私の場合がこれであった。私の熱情は私を生かした。そして、私の熱情は私を殺したのである。どんな熱情か、と人は言うかも知れない。詰らないもの、この上もなく幼稚な世界のものに對する熱情である。しかし、そういう詰らないものが、まるでヘレーナ^{*2}をわが物とするか、世界の王座につくか、という問題のように、私の心を動かすのであった。まず、女のこと。女は一人あれば、それで官能の方は静かにしているが、心は決してそうではなかった。歡樂のさ中にも、戀を求め、氣持が私の胸に食い入っていた。私には優しいママさん、親しい女の友はあった。しかし、戀人が必要だった。私はママさんをその代りに心に描いた。自分自身を騙すために、それを色々な姿に創り直してみた。自分がママさんを抱いている時に、腕に抱いているのはママさんだと思つたとしたら、そのために抱擁の力は弱まらないとしても、情慾は一切消滅してしまつたであらう。愛情のために、啜り泣いたかも知れないけれど、歡樂は得られなかったであらう。歡樂！これは人間のために作られた運命であらうか？ あゝ、若し、私が生涯にただ一度でも、戀のあらゆる歡喜を十二分に味わつたとしたら、私の弱い生命がよくこれに應じ得たとは思えない。その場で死んでしまつたであらう。

このように、私は目的のない戀に燃えていた。戀が最も人の身を消耗するのは恐らくこうしたものであらう。氣の毒なママさんの事業が旨く行かないことや、近いうちに完全な破滅を齎らさずにはおかないママさんの不謹慎な行動なぞについて、私は思い悩んだ。いつも不幸の先廻りをする私の残酷な想像力は、ママさんの不幸をいつも極端に、しかも色々な結果を伴つて、自分の眼に見せたのであった。私は自分の生命を捧げた人と、その人なくしては生命のよろこびを味わうことのできない人と、貧困のために餘儀なく別れなければならなくなるのを、前から眼に見たのであった。私の心が常に落著ぎを失つていたのは、このためだった。慾情と危懼とが代る代る心の中に食い入った。

音樂もまた私に取つて、も一つ別の熱情だった。その激しさは、さほど狂熱ではなかったが、しかし、身體を消耗させることは勝るとも劣らなかつた。音樂に全身を打ちこんだ熱意、ラモールの晦澁な本についての執拗な研究、どうしても覺えられないのを無理にも詰め込もうとする不屈な片意地、絶えることのない出稽古、それに、莫大な樂譜を積み上げて、度々幾晩も徹夜してこれを筆寫したことなど、これらが私の身體を消耗したのであった。また、このような日常不斷のもの

のだけには限らなかつた。氣まぐれな私の頭の中に浮ぶあらゆる愚な思いつき、ただ一日だけで直ぐに飽きてしまふ好きな事、旅行とか、音樂會とか、晚餐會とか、また、散歩をしたり、小説を讀んだり、芝居を見たりすること、そう言つた自分の樂しみにも仕事にも全く豫想をしていなかった色々なことが、すべて同じように烈しい熱情となつて、おかしい程の性急さで私を本當に苦しめるのだった。本に書かれたクリヴランド^{*3}の想像の上の色々な不幸を、度々妨げられながらも感激して讀んだが、それは、自分自身の不幸よりも多く私を心配させたように思っている。

ジュネーヴの人で、バグレ氏という男があつた。かつてロシア宮廷のペテロ大帝の下に仕えていたことのある男で、今まで見たこともないほどの最も野卑な最も愚劣な人間の一人であつた。いつも御本尊同様の愚劣な計畫で頭を一杯にしては、何百萬の金を雨のように降らし、五桁や六桁の勘定は屁とも思わなかつた。何か上院へ請願の趣があつて、この男はシャンペリーへ來たのであつたが、例によつてママさんはこの男の虜となつた。バグレはママさんに空の大風呂敷をさんざんに擴げて見せ、ママさんから、なけなしの金をちびちびと搾り取つた。私はバグレが嫌いだった。向うはそれを見て取つた。私を相手のことだから、見て取るのは難かしいことではなかつた。そこでバグレは私の御機嫌を取るために、ありとあらゆる卑劣な手段を用いた。將棋が少しできるので、私に教えてやろうと言ひ出した。私は厭々ながらやってみしたが、どうやら駒の動き方が分るようになると、それからの進歩は實に速くて、第一回の手合せの終り頃には、初め向うが落してくれた香車を此方が落してやるようになった。もうそれだけで十分だった。こちらはすっかり將棋に熱中してしまつたのである。將棋盤を買いこむ。カラブリア産の駒を買いこむ。部屋にとじこもる。あらゆる手を譜記し、がむしゃらに頭に詰めこみ、倦まずたゆまず一人將棋を指して、晝も夜も過ごす。二三月の間、こういふ立派な勉強と、想像もできなほどの努力をした後で、すっかり瘦せこけ、黄色い顔になり、ほとんど阿呆のようになって、珈琲店へ出かけて行く。力だめしをやる。バグレ氏と指す。一度、二度、二十度も敗ける。あの手この手がごちゃごちゃして、頭の中はわけ

*1 精神を勞すれば肉體が損ずる、という意味。

*2 ギリシヤ傳説によると、トロヤ戰爭の原因となつた絶世の美人。

*3 アベ・プレヴォの小説「クリヴランド氏の物語」の主人公で、ルソオはこの冗長な小説の愛讀者であつた。

*4 異本。「美しい顔つきはしてはいたが、今まで見たこともないほどの……」

が分らなくなっている。考えがすっかり鈍っているから、目の前には雲がかかったようだった。フィリドール[★]やスタンマの本によつて、手の研究の稽古をするたびに、やはり同じようなことが起つた。そして、すっかり疲れきってしまった後では、以前よりよほど身體が弱つていた。それに、將棋を廢してしまつても、將棋をやるのが馴れっこになつても、あの最初の手合せ以來は一段も手は上らなかつた。そして、いつまでも最初の手合せを濟ました時分と同じ力のままにとどまっていた。何百萬年稽古を積もうと、せいぜいバグレに香車を落すぐらいが山で、それ以上には出られなかつたろう。まったく好い暇つぶしだ、と諸君は言うかも知れない。實際に少からぬ暇がつぶれた。私はこの初めての試みを、もう續ける氣力のなくなる時までには止めなかつたのである。自分の部屋から出た時の私の様子は、まるで墓から出て來た人間のような顔をしてしたが、この調子を續けていけば、間もなくまた墓の中へ歸つて行くに違ひなかつたのである。このような頭が、まして血氣旺んな若者にあつては、いつまでも肉體を健康に保っているものでないことは誰にも分る通りである。

健康の變化が氣質に影響して、妄想の熱を和らげた。身體に元氣がないので、前よりおとなしくなり、旅行熱も少しさめた。一層出無精になつて、倦怠ではなく憂鬱にとりつかれた。熱情に續いて氣鬱症が代つた。無氣力は哀愁になつた。何でもないことに泣いたり溜息をついたりした。まだ生命のよろこびを味わわないうちに、生命が逃げて行くような氣がした。自分の亡き後、可哀そうなママさんがどんな境遇になるか、ママさんが今にも落ちようとして居る境遇がどんなものか、それを思つて私は悩んだ。ママさんと別れること、ママさんを可哀そうな人のままにしておくこと、これが私の唯一つの心残りであつたと言へる。やがて私は全く病氣になつた。ママさんの看護ぶりは、子を看病するどんな母親も及ばないほどのものだった。そして、このことはまたママさんのためにもなつた。ママさんの看護ぶりは、子を看病するどんな母親も及ばないほどのものだった。そして、このことはまたママさんのためにもなつた。色々な計畫から氣が紛れ、山師たちを近づけなくしたからである。その頃、若し死が私を見舞つたら、何という甘い死だつたらうか。人生のよろこびを殆んど味わつてはゐなかつたとしても、人生の不幸をそれほど感ぜずに濟んだであらう。平和な私の魂は、生をも死をも毒する人間の不正を痛ましく感ずることなく、昇天できたであらう。私は自分のより良き半身のうちに生き永らえているという慰めを持つていた。だから死ぬとは言へなかつた。ママさんの運命について私の抱いていた不安さなかつたならば、私は眠るが如く死んだであらう。しかも、そういう不安自身も、優しく情愛深い對象を持ち、そのために不安の苦味は和らげられていたのだった。私はママさんに向つて、「ママさんには僕の身體をすっかり預けましたよ。仕合せになるようにして

やつて下さい」と、言つていた。二三度、ひどく病狀が重かつた時、夜中に起き上つて、ママさんの部屋まで過つて行き、ママさんの行狀について色々と言つたことがあつた。この忠言は正しさと條理に満ちたものであつた、と私は敢て言うが、しかし、ママさんの運命について私の抱いていた關心が、何よりもそこには強く表わされていた。まるで涙が私の榮養となり薬となつたかのやうに、ママさんと並んで、一緒に寢臺の上に坐り、兩手をしっかりと握りしめながら流した涙で、私は力づいた。このような夜語りのうちに時間は流れた。そして、私は來たときよりもずっと元氣になつて歸つて行つた。ママさんがしてくれた色々な約束や、ママさんから與えられた色々な希望で満足し安心して、心の平和と神への忍従のうちに眠つた。神よ、人生を憎む理由がこれほど澤山あり、私の生涯をこれほどに惱ませ、私にとって生を重荷にすぎぬものとしたあれほど多くの暴風雨のあつた後で、この生を終らせるべき死が、あの頃と同じく、願わくば、餘りに痛ましくないものであるやうに。

看護と、注意と、信じられないほどの勞苦によつて、ママさんは私を救つてくれた。そして、ママさんだけが私を救ひ得たことは確かである。私は醫者の薬はあまり信用しないが、本當の友人の薬を非常に信頼する。われわれの幸福が掛つているものが、他の何よりも利目があるのである。この世に甘美な感情というものがあるとすれば、それはわれわれが互に相手に打込んでいると感ずる時の感情である。ママさんと私の互の愛情はそのために増大しはしなかつた。増大の餘地がなかつたのである。しかし、ごく單純なわれわれの愛著は、その單純さのうちに何となく一層親密なもの、一層感動的なものを帯びて來た。私は全くママさんの作物となつた、全くその子となつた、本當の母親に對する以上のものとなつた。二人は、知らず識らずのうちに、互に離れないやうに、言わば二人の存在を共通のものにするやうに、しようとしてはじめていた。そして、互を必要として居るばかりでなく、二人だけで十分であることを感じていたから、自分たちに無關係なことはもう何も考えない、二人の幸福とすべての慾望を、恐らく人間の中では他に類例のないこうした相互の所有だけに絶對的に限る、という習慣がついてしまつた。このやうに相互に相手を所有し合うといふことは、前にも言つたやうに、戀による所有ではなくて、それよりもっと本質的な所有であつて、官能とか、性とか、年齢とか、容貌とかにはかか

*1 ダニカン・フィリドールと言つて當時の有名な音楽の名家に生れ、多くの作曲を遺している。餘技としての將棋は當代その右に出るものが無かつた程の名人であつた(一七二六—一七九五年)。

わりなく、人間の本体にかかって、生存をやめる時でなければ失うことのないものである。

このような貴重な激變が、ママさんや私の餘生に幸福を齎さなかったのはなぜだったろうか。それは私のせいではなかった。そのことは自分の心に照らして言明できる。と言って、それはママさんのせいでもない。少くもママさんの意志の罪ではなかった。やがて打ち克ち難い天性が再び勢力を取り戻す運命になっていた。しかし、この宿命的な後退は一舉には行われなかった。そこには、天の恵みか、一寸した合間があった。短く貴重な合間だった。それは私の過失によって終りを告げたものではなかった。そして、私はこの合間を十分に利用しなかったと後悔することはなからうと思う。

重い病氣は治ったけれど、氣力は恢復していなかった。胸も元通りではなかった。熱もまだ残って、いつまでも續いた。そのために身體がだるかった。親しいこの女性の傍で生命を終りたい、いつまでもその立派な決心を持ち續けさせていたい、幸福な生活の本當の魅力が何から成り立っているかを悟らせて上げたい、それが私にかかっているだけに、ママさんの生活もそのようにして上げたい、このようなことより他には何の望みも持っていなかった。しかし、暗い陰鬱な家の中で、絶えず二人だけが寂しく顔を合せていれば、最後には、それもまた陰鬱なものとなってしまふだろうことが眼に見えたし、また感じられもした。これを救う方法が自然に到來した。ママさんは前から私に牛乳を勧めていたが、田舎の方へそれを飲みに行きなさいと言った。私はママさんが一緒に来てくれれば、と言って承諾した。ママさんを決心させるには、これ以上を言う必要がなかった。あとはただ場所を選ぶだけが問題だった。郊外の例の庭園は、本當は田舎にあるとは言えなかった。家や他の庭園がまわりにあって、田舎の隠れ家という趣はなかった。それに、アネが死んでから、植物の世話をする氣もなかったから、無駄だったし、また他にも考えがあって、この隠れ場所が別に惜しくなくなったから、その庭園はもう手離していたのであった。

丁度ママさんも市内を厭がっていた矢先だったから、私はこれに乗じて、ママさんに、もう市内を斷然見限って、煩い人たちが道に迷って來られないほど遠くの何處かの小さい家に住み、楽しく寂しく暮そうと提案した。ママさんは、そうしただろうと思う。また、ママさんと私の守護天使のお告げでもあったこの決心は、死がわれわれ二人を引離すまで、われわれに幸福で靜穩な日目を必ず保證してくれたであろう。ところが、そういう境涯は二人の身に定められた境涯ではなかったのである。ママさんは満ち足りた生活の後に、貧困と不如意のあらゆる苦難を受け、そのためにこの世を去るに當

っては、さほどの未練を持たないような境涯に落ちるべき人だった。そして、私は、あらゆる種類の災厄を一身に集めて、ひたすら公益と正義の愛に燃え、己れの潔白のみをただ一つの力とし、己れを護るべき徒黨を待たず黨派に與せず、公然と人々に眞理を敢て説くほどの人に對して、他日その籠を垂れるべき人間であった。

一つの不幸な危懼がママさんの心を引止めた。家主を怒らせることが心配で、この厭な家を思いきって棄てることのできなかったのである。

「田舎へ引込むという考えは、とても楽しいし、私もそれは大好きよ。でも、田舎へ引込んででもやはり食べて行かなければならないわ。この牢屋みたいな家を出ると、パンをなくする心配があるの。森の中においてパンがなくなれば、やはり町へ歸って來て探すことになるんじゃない？ それぐらいなら、いっそ町をすっかり棄ててしまわない方がいいでしょう。私の年金を失わないために、サン・ローラン伯爵へ少しばかりのお家賃を拂いましょうよ。靜かに暮らせるほど市内から離れていて、必要な時にはいつでも歸れるぐらいの所へ隠れ家を探してみましようよ」と、ママさんは私に言った。

この通りになった。少し探してから、シャルメットというところにきめた。ここはモンジエ氏の所有地で、シャンベールの入口にあったが、百里も離れているように、人目につかない淋しい場所だった。かなり高い二つの丘陵の間に隘い谷間が南北に續き、その底の砂利と樹木の間にに小さい流れがあった。この谷間に沿って、丘の中腹に、ちらほらと何軒かの家があった。少し荒涼とはしているが、人目につかない隠れ家の好きな人なら、誰でも非常に好ましく思う家だった。それらを二三軒あたってみてから、最後に一番綺麗な家を選んだ。ノアレ氏という現役の郷士の持家だった。非常に住み心地のよさそうな家だった。前面に小高く花園があり、その上が葡萄畑、下の方が果樹園になっていた。眞正面には小さい栗林と、泉水。ずっと高いところの山合いには家畜を飼養するための牧場もあった。要するに、二人が構えようと思っていたささやかな田舎住居に必要なものはすべて揃っていたのである。私の憶えている限りでは、われわれがこの家を手に入れたのは、一七三六年の夏の終り頃だったと思つて居いる。初めてそこへ泊った日の私は有頂天だった。いとしい女友達を抱きしめ、感激と狂喜の涙を注ぎながら、

「あゝ、ママさん！ ここは幸福と無垢の住み家ですね。ここでその両方が見つからなければ、何處を探したってだめで

す」と、私は言った。

第六卷

(一十三六年)

Hoc erat in votis : modus agri non ita magnus,

Hortus ubi et tecto vicinus jugis aquae fons,

Et paulum sylvae super his foret.....^{*1}

私はこれに、

Auctius atque

Di melius fecere;^{*2}

と、つけ加えることはできない。しかし、それで構わない。それ以上は私には必要でなかった。その所有権ですら必要でなかった。私にはこれを享有するだけで十分だったのである。所有権者と所有者は、良人と情夫の場合は姑くおくとすも、屢々全く別の人間であるということは、私がずい分前に話したことであり、また感じたことであつた。

茲に私の生涯の短い幸福がはじまる。茲に、自分は生きた、と人に言えるだけの権利を私に與えてくれる平和な、しかし、須臾の時期が来る。貴くまた名残おしい時期よ！ あゝ、私のために、お前の愛すべき流れをもう一度はじめてはくれまいか。実際には束の間に流れ去つたけれど、できれば、私の記憶の中では、もっと緩やかに流れてはくれまいか。これほど心に觸れ、またこれほど単純な物語を、自分の思うままに引きのばすためには、どうしたらいいだろうか。いつも同じことばかりを繰返すためには、またそれを何度となく自分に話してみても退屈しない以上に、讀者諸君に繰りごとを述べて退屈させないためには、どうすればいいだろう。それも、その繰りごとが、事實や行爲や言葉から成っているのなら、まだしも描き出したり、どうにか納得して貰うこともできようが、言ひもしない、しもしない、まして考えさえもしない、ただ味わつただけ、感じただけのことを、どう言ひ表わしたらよからうか。しかも、その情緒そのもの以外には生の幸福の對象を表現できないのである。私は太陽と共に起きた。そして仕合せだつた。私は散歩した。そして仕合せだつた。

私はママさんと顔を合せた。そして仕合せだつた。私はママさんと離れた。そして仕合せだつた。森を、丘を歩き廻つた。谷間をあてどなくさまよつた。本を讀んだ。退屈した。庭で働いた。果實の收穫をした。家事の手傳いをした。そして、仕合せは到る處につきまといつた。仕合せは、これときまつたものの中にあるわけではなかつた。すべて私自身のうちにあつた。一瞬間も私のもとから去ることはなかつた。

このなつかしい時期の間、私の身の上で起つたこと、また、それが續いた間、私のしたこと、言つたこと、考えたこと、それはどれ一つとして記憶から失せていない。それより前や後の頃のこととは、切れぎれにしか甦つて來ない。それらはちくはく曖昧に覺えているのだが、あの頃のこととは、今もまだ續いているかのようにすべてをよく覺えている。若い時分には常に前へ前へと進み、今は後戻りばかりしている私の想像力は、あの頃の甘美な追想によって、永遠に失つた希望を償うのである。私はもはや未來に心を惹かれる何物も見ない。過去へ遡ることのみが心をよるこぼせ得るだけであり、今、私の話している時期に生々と眞實に遡ることは、今の不幸な身の上にも拘らず、私を幸福に生きさせてくれるのである。

私はこれらの思い出のうち、その強さと眞實さを判断して貰えるただ一つの例だけを話して見よう。われわれがシャルメットへ初めて泊りに行く日、ママさんは駕籠で、私は歩いてそのあとをついて行つた。道は登り坂になる。ママさんは相當に重いので、駕籠昇をあまり疲らせないようにと、途中で駕籠を降りて、あとは歩いた。歩いて行くうちに、ママさんは生垣の間に何か青いものを見つけて、

「まあ、雁來紅がまだ咲いてるわ」と、私に言った。

私はまだ雁來紅というものを見たことがなかつたが、脚をかがめてそれをよく見ようとしなかつた。ひどい近眼だつたので、立つたままでは、地面の草を見分けることができなかつた。私はただ通りすがりにその草の方に一寸眼をやつた

*1 「適當な置き土地。庭園。家の前の泉水。これに加えて小さい林。以上が私の望んでいたすべてであつた」の意。ホラティウスの「諷詩」第二卷、第六諷詩にある。

*2 「神々は私の願望以上であつた」の意。出典は右と同じ。

*3 二五〇頁までのことは一七三八年の出來事の箇である。

だけだった。その後、雁来紅を見もせず、またこれに別に注意を拂わずに、三十年近くが過ぎた。一七六四年、友人のデユ・ペイルー氏と一緒にクレシエ^{クレシエ}にいた時、二人で小さい山に登ったことがあった。その頂上には、デユ・ペイルー氏の綺麗な社交室^{社交室}ができていて、「美観亭」と名づけられていたが、なる程その名に恥じない場所だった。その頃、私は少しばかり植物採集をはじめたばかりのところだった。山に登りながら、草むらの中を見て行くと、私は思わずよろこびの聲を上げた。

「おや！ あそこに雁来紅が！」

正に雁来紅だった。デユ・ペイルーは私の狂喜に気づいたが、その理由は知らなかった。いつかこの文章を読んでくれる時があればいいと思っているが、その時には、あの時の私の狂喜の原因が理解できると思う。讀者は、このように取るに足らぬ物からでも強い感銘を受けたということから、あの頃に關係のあるあらゆるものが私に與えた強い印象がどんなものであるかを察することができるのである。

さて、田舎の空氣は私の初めの健康を少しも恢復させてくれなかった。私は瘦せ衰えた。そして、益々瘦せ衰えて行つた。牛乳ももう受けつけなくなった。やめなくてはならなかった。その頃、萬病の薬に水が流行っていた。そこで私も水をはじめた。ところが餘り向うみずにやったもので、病氣を治すどころか、危く生命を取られそうになった。毎朝、起き抜けに、大きな水香を持って泉水へ出かけて行き、ビール瓶に二本ぐらいの量の水を、散歩しながら、立て続けに飲んだ。食事の時の葡萄酒はすっかりやめてしまった。私の飲んでいた水は、大ていの山の水がそうであるように、少し硬くて消化も悪かった。要するに、こんなことをやっていると、二カ月も経たないのに、それまで非常に丈夫だった胃がすっかり駄目にしてしまった。消化ができなくなったので、もう治る見込はないと観念した。丁度その頃、或る出来事が起つた。その事自身も實に奇妙だが、その結果もまた奇妙であった。そして、これは、私が死ななければ止まないだろうと思つてゐる。

或る朝、別に普段より容態が悪くはなかったが、小さい卓子の脚を伸ばして立てていると、身體中に急にわけの分らない激動を感じた。それは、何か暴風雨のようなものが血の中に起つて、忽ち四肢に傳わたつたとも言ふよりほかに喩えようがない。動脈はひどい勢で打ちはじめ、その鼓動が感じられたばかりでなく、その音さえ聞えた。殊に頸動脈のそれが

ひどかった。烈しい耳鳴りが加わり、その音は三重、四重となった。つまり、重く鈍い、蟲の羽音のような音と、もっと澄んだ、水の流れるような音と、非常に鋭い口笛のような音と、前に言つた鼓動の音の四つである。そして、その鼓動は脈にさわらなくても、手で身體に觸れなくても、一容易に數えられるのであった。この體内の音がひどいために、前には鋭敏だった耳の力は全く失われ、かな聲ではないまでも、ずいぶん耳が遠くなつてしまつた。その時以後、ずっとそうなのである。

私の驚きと恐れはお察しの通りである。もう死ぬのだと思つて、床に入つた。醫者が呼ばれた。私は頼みながら醫者に容態を話した。醫者は匙を投げるだろうと思つた。實際、醫者は匙を投げて私には思つてゐる。しかし、餅は餅屋といふこともある。醫者はわけの分らない長たらしい理窟を述べ立てた。それから、その高遠な學理の結果に基いて、試験的に實驗治療を *in anima vili* やりはじめた。それは苦しくて、氣持が悪くて、あまり利目もなかった。間もなく厭になつた。そして、數週間後には、もうこれ以上良くも悪くもならないのが分つたので、床を離れ、動悸も耳鳴りもそのままに、普段の生活に還つた。この耳鳴りはその時以來、つまり三十年以來、片時も私を離れないのである。

それまでの私は非常な寢坊だった。ところが、前に言つたような症状に加えて、その後は今日まで終始つきまとうことになつた不眠症のために、私は自分には餘命がいくばくもないと思ひこんでしまつた。こう思ひこんでしまつと、しばらくの間は、もう治らうと氣を揉まず、心は靜かにしていられた。生命を延ばすことができないとなれば、残つたわずかの生命をできる限り利用しなければならぬと思つた。そして、このことは、このようなおぞましい状態にあつて、當然私を煮きつける筈だった苦惱から却つて私を免れさせてくれたという自然の不思議な恵みによつて、爲しとげられたのであつた。私はこの耳鳴りに悩まされはしたが、苦痛は感じなかつた。それには、夜毎の不眠と、四六時中の息切れとより他の習慣的な不自由は伴わなかつたからである。そして、この息切れも、喘息とまでは行かず、走るとか、少しひどく身體を動かすとか、いふ時のほかは感じられなかつた。

*1 ピエール・アレクサンドル・デユ・ペイルー(一七二九年—一七九四年)はルソオの重要な友人の一人。

*2 ヌシャテルとピエンヌ湖の間にある小村。

*3 「動物試験として」

私の肉體を殺すべきこの出来事は、私の熱情しか殺さなかった。そして、この出来事のために自分の精神上には悦ばしい結果が齎らされたので、私は毎日のようにこれを神に感謝しているのである。自分を死んだ者として見た時に、はじめて生きはじめたのだ、と公言することができる。この世を去るに臨んで、見棄てて行かなければならない色々なものの眞價が分つて来たので、それからは一層高尚なことに専ら心を使いはじめた。それは丁度、それまで非常に怠つて、これから間もなく果さなければならなくなる仕事を、前もってしておくようなつもりであった。私は今まで度々宗教を自分流儀に曲解していたが、そうかと言って、全く無宗教ではなかった。それで、この問題に再び立戻るのはさほど困難ではなかった。多くの人々には非常に厭な問題であるが、それを慰藉と希望の對象としている者にとっては極めて甘美な問題だからである。この場合、ママさんはどんな神學者よりも私には役に立ったのであった。

何事にも主義を立てたがるママさんは、宗教にもまた主義を立てることを忘れなかった。そして、その主義は、或るものは非常に健康な、他のものは甚だ愚な、極めて調和を缺いたものもろの思想と、自分の性格に關する考え方と、教育から来る偏見とから成り立っていた。一般に、神を信ずるものは己れに似せて神を作る。善人は善神を作り、悪人は悪神を作る。人を憎み、激し易い頑信者は、あらゆるものを地獄に落そうと思うから、地獄しか見ない。人を愛する柔和な人々は、地獄をほとんど信じない。そして、私が不思議にたえないことの一つは、あの善良なフェヌロンがその著「テレマアク」の中で、まるで心から地獄の存在を信じているかの如き言辭を弄しているのが見られることである。しかし、私は、この場合、フェヌロンが嘘をついていると信じた。というのは、人は司教ともなれば、どんなに誠實であっても、時には嘘をつくことも必要であるからである。ママさんは私に對しては嘘をつかなかつた。そして、報復的で常に怒っている神を想像できないママさんの穏やかな魂は、頑信者たちが審判と天罰しか見ない處に仁慈と憐憫のみを見ていた。ママさんは屢々こんなことを言っていた。神様がわれわれに對して正しくあるならば、神様の審判というものは有り得ない。なぜなら、神様はわれわれに正しくあるために必要なものをお與えになっていないのだから、審判をするということとは、神様が與えた以上のものを要求することになるからである、と。面白いことには、ママさんは地獄を信じていないのに、煉獄の方は信じていた。これは、悪人の魂を地獄に落すことはできないし、そうかと言って、善人になるまでは善人と同居させるわけにもいかず、處置に困って煉獄を信じるようになったわけである。まったくのところ、この世でもあの世でも、悪人という奴はいつも厄介なものだ、と言わなければならぬ。

もう一つ面白いことがある。右のような考え方によると、原罪とか贖罪の説は破壊されてしまい、そのために凡俗のキリスト教の基礎は動搖させられ、少くもカトリック教は存在できなくなることは明かである。ところが、ママさんは善良なカトリック教徒であった。或いはそう自ら稱していた。しかも、本當に心の底からそう自任していたことは確かである。ママさんの考えでは、聖書を、餘り文字通りに、また餘り厳しく解釋しすぎているというのであった。そこに書いてある永劫の責苦に關することにしても、ママさんには、すべて脅かしか形容に思われていた。イエス・キリストの死は、人人に神を愛し、また互に愛し合うことを教えるための、眞の神の慈悲の一例のように考えられていた。一言で言えば、自分の信教に忠實なママさんは、その信仰宣言の一切を眞面目に受入れてはいたが、しかし、一つ一つの信仰箇條の論議となると、常に教會に服従しながら、それと全く異った信仰を持っていることになつたのである。その上、ママさんは單純な心と、詰らない議論より、一層雄辯な淡白さを持っていて、これが度々ママさんの懺悔聽問僧さえ當惑させることがあつた。ママさんが何も隠さなかつたからである。

「私は立派なカトリック信者です。いつもその心掛でいます」と、懺悔聽問僧に向つて言うのであつた。「神聖な教會の掟でしたら、心のかぎりお守りしています。しかし、私は自分の信仰の主ではありません。自分の意志の主なのです。私は自分の意志を何處までも従わせます。そして、すべてを信じようと思ひます。あなたはそれ以上の何を私にお求めになりますか」

キリスト教的な道徳はママさんの性格に非常に適合していたから、萬一そういうものが存在しなかつたとしても、ママさんはきつとそれを實踐したことだろうと思う。命ぜられた事はすべてを行つたが、命ぜられなかつたとしても、やはり同様に行つたであらう。どちらでもいいような事柄には、好んで服従した。だから、肉食することの許可或いは命令がなければ、ただ神様との間で肉斷ちをするだけのことと、そういう詰らないことをわざわざ賢徳呼ばわりする必要はなかつた。しかし、このような道徳はタヴェル氏の主義に準じたものであつた。というよりむしろ、ママさんはその主義に反するもの一つも見ないと思ひこんでいた。ママさんは平靜な良心をもつて、毎日二十人の男と同衾し、しかもそれに

ついで劣情は勿論、懸念さえも持たなかったであろう。こういう點では、多くの信心家ぶった女たちも、ママさん以上に懸念を持っていないことは、私も知っている。しかし、兩者の差異は、その女たちは劣情に驅られていたのであり、ママさんは自分の僻論にしか驅られていないところにある。この上もなく感激的な、敢て言えばこの上もなく啓發的な談話をしている時に、思わず右のような話が出て来たとしても、ママさんは顔つきも聲つきも少しも變えないだろうし、矛盾しているとは少しも思わなかったであろう。また何かの都合でその話を中断することがあっても、また後になって、前と同じ明朗さでそれを續けたであろう。それというのも、そうしたことは、すべて社會を取締る上の方針にすぎないのであって、良識ある人でさえあれば、この方針の精神に則って、これを解釋し、適用し、例外を設けても、些も神を瀆す危険はない、とママさんは心の底で確信していたからである。この點に關しては、私はママさんと明かに同意見ではなかったが、それでも、實を言うと、ママさんと言ひ争うためにはどうしてもあまり好かれぬ役割に廻らなければならなかったもので、それが恥かしさに、敢て言ひ争おうとしなかつたわけであつた。私は自分だけを何とか除外しておいて、他人のためにこの規定を作りたいと思つた。しかし、ママさんの氣質から言つて、このような主義を濫用する恐れはなかつたし、その上、ママさんは男に騙されるような人でないこと、また、自分のために除外例を要求するのはつまりママさんの好きな人々全部のためにママさんに除外例を與えることになるということ、私は知つてゐる。それに、今、たまたま他人に對するママさんの無分別のことを問題にしたが、この無分別は常にほとんどママさんの行爲の上には影響を與えなかつたものであり、當時は全然それがなかつたのである。しかし、私はママさんの主義を忠實に述べる約束をしたから、その約束を守りたいと思ふ。さて話はまた私のことに戻る。

死とその後のことについての恐怖から、自分の魂を守るために私が必要としていたあらゆる教訓を、ママさんのうちに見出した私は、安心してその信頼の泉を汲み取つた。私は今まで以上にママさんに愛著した。自分の生命は今にも失われ、てしまふやうに感じていたから、その生命をすべてママさんのうちに移してしまふかと思つたほどだつた。このような愛著の増大と、自分には餘命がいくらもないという確信と、来るべき自分の運命についての深い安心とから、この上もなく靜かな、また官能的でさえもある習慣的な状態が生れて来た。この状態に在ると、恐怖や希望を募らせるあらゆる熱情は和らげられて、自分に殘された僅かの日月を不安や懊惱なく樂しめた。さらに、一つの事が加わつて、その日月を益々快いものにしてくれた。それは、できるだけだけの樂しみをそこに集めて、ママさんの田園趣味を養成しようという心づかいであつた。ママさんに、花園や、養鶏場や、鳩、牝牛などを好きにならせながら、私もまたかういふものがすっかり好きになつてしまつた。そして、このような細々とした仕事は、自分の平穩を擾さずに、一日を充實させてくれるものだつたら、私のなさけない肉體を守つて、これをできるだけ恢復させるための色々な藥や牛乳なぞよりも、ずっと利目があつた。

葡萄の收穫、果實のとり入れなぞが、その年の残りを樂しませてくれ、われわれを取巻いてゐる善良な人々の間にあつて、益々田園生活に親しませてくれた。冬の來るのが非常に殘念だつた。そして、われわれはまるで追放でもされるやうな氣持で、市内へ歸つた。とりわけ、再び春は見られまいと思つてゐた私は、シャルメットに永別を告げる心持だつた。私は地面や樹木に接吻せずにこの地を去らなかつた。遠ざかりながら、何度も何度も振り返らずにはいらなかつた。女弟子たちとはずつと前から別れてゐたし、町の樂しみや付き合いにも興味を失つてゐた私は、もう外出もしなかつたし、誰とも會わなかつた。尤も、サロモン先生は別である。この人はしばらく前からママさんと私とのかきつけの醫者になつていて、正直な、才氣のある、なかなかのデカルト學者であつた。宇宙の組成のことなども立派に説明して、その有益な愉快な話は先生の處方よりも利目があつた。私は普通の談話の愚な下らない時間つぶしはとても辛抱できなかった。しかし、有益な實のある談話はいつても非常に樂しく、決して厭だと思つたことはなかつた。だからサロモン先生との話が大幅に好きになつた。自分の魂が束縛を失う時に初めて獲得のできる高遠な知識を、先生と二人で先取りするやうな氣がした。先生に對する興味は先生の取扱う問題にまで擴がって行つた。そして、その問題を理解する助けとなる本を探しはじめた。科學に信仰を交ぜたやうな本が私には一番適當してゐた。オラトワールやポール・ロワイヤルの本が特にそれだつた。私はそういう書物を読みはじめた。むしろ、貪り読みはじめた、と言つた方がいい。たまたま神父ラミの「科學講話」という表題の本が手に入った。それは科學を取扱う書物についての知識の手引ともなるものだつた。私はこれを何

*1 カトリックの高僧の教社であつて、この派からは多くの學者、説教者等が出てゐる。

*2 パリの附近にあるカトリックの僧院で、一七〇一年に廢されたが、此處からはパスカルなどを初め多くの學者、神學者が出た。また多くの學問的な書物が此處で編纂されてゐる。

*3 ベルナール・ラミ(一六四五年—一七一五年)はオラトワール派の神父で、デカルト哲學者。「科學講話」はその代表的著作。

度となく繰返し繰返し讀んだ。これを自分の指導書にしようと思った。要するに、私は自分の病狀にも拘らず、否、そういう状態だったればこそ、次第に、抵抗できない力で、學問の方へ惹かれて行く自分を感じたのである。そして、毎日を自分の最後の日と目しながらも、非常な熱心さで勉強したので、まるでいつまでも生きているにきまっていると思つていくかのようであった。そんなにしては身體に悪いと人から言われたけれど、そうしたればこそ、精神の上ばかりでなく肉體の上にもよかった、と私は思っている。というのは、私の熱中したこの勉強が、非常に楽しくなつて來たために、病氣のことは考えなくなつて、自然にあまり前ほど氣にならなくなつたからである。尤も、實際には少しも病氣が快癒したわけではなかつたことは言うまでもないが、それでも烈しい苦痛がなかつたので、ぶらぶらしたり、眠らなかつたり、動く代りに考えたり、また、後には自分の肉體が徐々に衰弱して行くのを、死のみが止め得る避け難い経過と見ることに慣れてしまつたのである。

こういう考え方が、生命についての徒な心配をすべて私から取り去つてくれたばかりでなく、また、それまで厭々ながら従わされていた煩わしい服藥からも私を救つてくれた。サロモン先生は、自分の藥では私を救えないことが分つたので、私に苦い思いをかけるのを許してくれて、ただ患者の希望を繋ぎ、醫師の信用を維持する當りさわりのない處方をして、氣の毒なママさんの心配を和らげるだけで満足した。私は嚴しい攝生をやめた。葡萄酒の常用もまたはじめた。自分の體力の程度に従つて、あらゆることに節制は保つたが、何一つ斷ちものなぞはすることなく、普通の健康人の生活をはじめた。外出さえもするようになった。そして、知人たちにも會に行きはじめた。その中では、コンジエ氏との交遊が非常に楽しかった。要するに、最後の時が來るまで勉強するのが自分には立派なことと思われたのか、或いは、私の心底にまだ生きる望みが残つて隠れていたのか、とにかく、死の期待が學問への興味を緩めるどころか、益々これに火を注ぐように思われたのである。そして、あの世には自分が持つて行く知識より他のものは持てないと思つていたかのようによせつせと少しばかりの知識を積み上げたわけだった。私はプーシャル*1という本屋の店を眞眞にした。そこには何人かの文學者の定連があつた。また、二度と見ることがあるまいと思つていた春が近づいていたので、幸いにシャルメットへ再び歸れたときの用意にと、幾冊かの本を揃えておいた。私はその幸いを得た。そして、これをできるだけよく利用した。草木の芽のふくのを見た時のよるこびは言い表わしよ

うがない。再び春にめぐり逢うのは、私にとっては天國に復活することだった。雪が溶けはじめるかほじめないかのうちに、われわれは土牢のような家を去つた。そして、鶯の初音に間にあうように早くシャルメットへ行つた。その頃から、私はもう死ぬとは思わなくなつた。そして、實際に、田舎へ行ってから決して大病をすることがなかつたのは、不思議なことである。ずいぶん病疾には悩まされたが、床につくことは一度もなかつた。ふだんより工合が悪いような心持がすると、私は度々こう言つた。

「若し僕が死にそうになったら、櫛の樹蔭に連れて行って下さい。きつとよくなつてみせますよ」

身體は弱つていたが、前のように畑の仕事をやつた。尤も、體力相當なやり方をしたのである。自分一人で庭仕事でできないのが、本當になさげなかつた。鋤を六回も振り上げると、息が切れ、汗が流れて、どうにもならなかつた。腰をかめると動悸が倍になつて、ひどい勢で血が頭へ上るので、急いで直立しなければならぬくらいだった。もっと身體の疲れない仕事をせざるを得ないことになつて、主に鳩小屋の世話を焼いた。そして、この仕事がひどく好きになつて、度々何時間か續けて鳩小屋に居ることがあつたが、少しも退屈することがなかつた。鳩は非常に臆病で、馴らすのが難かしいものである。ところが、私の鳩どもは、とうとう私を信用するようになって、何處へ行つてもあとをついて來るし、捕まえようと思えば、いつでも捕まるようになった。庭園や中庭に一寸顔を出すと、すぐに二三羽の鳩が腕や頭に必ずとまるのであつた。そして、このお伴さんたちは、私にはうれしきことはうれしかつたが、おしまいには少々煩さくなつて、あまり馴々しくして貰わないようにしなければならなくなつた。私は動物たち、とりわけ、小心で人馴れない動物を馴らすことに、いつも奇妙な楽しみを抱いている。自分が決して裏切つたことのない信頼の情を、こちらから動物たちの心に自然と抱かせるのは、まことに面白いことのように思われた。動物たちが私を自由に愛してくれるように望んでいただけである。

何冊かの本を持つて來たことは前に言つた通りである。私はこれを役に立てたが、自分の勉強になるといふより、自分の身體をいためるような役の立て方をした。私は何事につけても誤つた考えを持つていたために、書物を有効に讀むには、その書物が必要とするあらゆる豫備知識を持つていなければならぬ、と思ひこんでいて、著者自身ですらそんな知識

*1 ジヤン・バティスト・プーシャルはドーフィネの人で、シャンベリーのグランド・リュールに居住していた。

を持つていないことが屢々あるということ、また、著者は必要に応じて他の書物から必要な知識を汲んで来るものだ、ということなどは全く考え及ばなかった。このような愚な考えから、本を讀んでも直ぐに行き當ってしまって、たえずあの本のたと、あさり歩いてばかりいなければならなかった。そして、時には、勉強しようと思う本を十頁も讀まないうちに、幾つかの書庫をあさり盡さなければならなかった。それにも拘らず、私は頑固にこの突飛な方法に執著していたから、そのために際限もなく時間を空費し、何を見ることも何を知ることでもできなくなるほど自分の頭を混亂させてしまひそうになった。幸いにして、自分が間違つた道を踏んで、とんでもない迷宮の中へ迷ひ入りそうになつてゐることに気がつき、すっかり道を失わないうちに出て來ることができた。

學問に對して本當の興味を少しでも持つ人が、研究をはじめに感ずるのは、その學問相互の關係である。この關係が、諸學を互に引き合せ、助け合せ、理解させ合うのであつて、他の學問なしで濟ませる學問というものはない。人間の知能はすべての學問に通じることではできず、常に主なもの一つだけ選ぶことが必要ではあるけれど、他の學問についての若干の概念を持つていなければ、自分の學問にも屢々不明な点が出て來るものである。私の企てたことはそれ自身に於ては良くもあり有用でもあつて、變更しなければならぬのはその方法だけである、と私は感じた。私はまず百科辭典を取り、それを各料に分類しようとした。ところが、それと全く反對のことをしなければならぬ、つまり、各料を個々に取り上げて、それらが互に結合するところまで別々に追窮して行くべきである、ということに気がついた。こうして私は通常の綜合法に戻つたわけだが、自分の爲すことを知つてゐる人間として戻つたのである。この綜合法にあつて、瞑想が知識の不足を補ひ、非常に自然的な反省は私を助けて迷わずに目的へ進ませてくれた。生きるにせよ、死ぬにせよ、私には空費する時間はなかつた。二十五歳近くにもなつて、何も知らず、これから何もかも學びたいと思ふのだから、十分に時間を有効に使うことを考えなければならなかつた。運命或いは死が自分の熱意をどの邊まで打切りにしてしまふか分らなかつた私は、どんなことが起つても、あらゆる事柄についての觀念を得たいと思つた。それは、自分の天賦の傾向を測るためであると同時に、自分自身で、最も研究の價値あるものは何であるかを判断するためでもあつた。この計畫を實行するに當つて、思いがけないもう一つの利益を得た。それは多くの時間を有効に使うという利益だつた。私はどうも學問をするようには生れつゝいて來ていないようである。というのは、一寸でも長く勉強していると、すぐ

疲れてしまふから、同じ問題を三十分間も一生懸命にやつてゐることがどうしてもできない。とりわけ他人の思想について行く場合にそうである。尤も、自分の思想をたどる場合には、時として三十分以上も熱心にやつてゐることもあつたし、またそれが旨くも行った。ところが、身を入れて讀む必要のある著者の書物を數頁もたどつて行くと、心はそこを離れて、雲の中へ迷ひこんでしまふ。無理にやろうとしても、徒に心身を疲らせるばかりで、目まいがして何も見えなくなる。ところが、異つた問題であれば、いくら間斷なく次から次へと現われて來ても、一が他の疲れを休めてくれるから、休息の必要はなく、ずっと樂について行けるのである。私はこの觀察を自分の學習計畫に適用して、色々な勉強を混ぜ合せたために、一日中それに熱中していても、決して疲れることがなくなつた。畑の仕事や家事が有効な氣晴らしとなつたのは事實だが、段々と自分の學習熱が昂じるうちに、やがてそういう時間の中から勉強のための時間を節約し、同時に二つのことにたゞさわる方法を見出した。このために兩方とも前ほど旨くはかどらなくなつたことには思い及ばなかつた。私にとつてはこの上もなく樂しいが、讀者にとつては度々面白くもないと思われ、實は私としては遠慮してゐるのである。例へば、此處で私がわざわざそう言わなければ讀者にも氣づかれないと思うが、實は私としては遠慮してゐるのである。例へば、此處で、私は自分がその頃色々な試みをやつたことを樂しく思ひ出すのである。それは、自分の時間を旨く割振つて、そこに行けるだけ樂しみと利益を同時に得ようとした試みである。そんなわけで、いつも病氣をしていて、引きこもつた生活を送つたその頃が、私の生涯では、最も暇がなく、最も退屈しなかつた時期であつた、と言へる。このように、自分の精神の傾向を探つたり、一年中で最も美しい季節に、その季節のために非常に楽しくされた土地で、人生の魅力を味わつたりすることに、二三月は過ぎてしまつた。この人生の魅力は、私がよくその價値を感じてゐたものであつた。また、私は、このように完全無缺な結合をも社交と呼び得るならば、その社交の魅力を、そして、自分が獲得しようと思つてゐた學藝の魅力を、味わつたのであつた。私からすれば、その學藝は既に自分のものとなつてゐたように、或いはむしろそれ以上のようになつてゐた。なぜなら、私の幸福の中には、學問の樂しみが多く含まれてゐたからである。このような試みは、私にとつてはすべて享樂ではあつたが、説明するまでもないほど單純なものであるから、此處では

*1 「別々に」の代りに、原本には「そのように」とある。すぐ前のところに「個々に」という言葉が使つてゐるから、「そのように」の方が適當である、という説がある。

省略しなければならぬ。更に言えば、眞の幸福は筆をもって描き得るものではない。ただ感ぜられるだけである。しかも、筆によって描くことができなければいけないほど、よく感ぜられるものである。なぜなら、眞の幸福は事實の集積から結果するものではなくて、一つの永續的狀態であるからである。私は度々、物を繰返して言う。しかし、同じ事が心に浮ぶたびにこれを口に出すとすれば、もっと度々繰返すことになったであろう。さて、私の生活様式は度々の變更を受けた擧句、終に一定の過程を取るようになったが、その割振りは大體次のようなものであった。

毎朝、日の出前に起きた。隣の果樹園を通って、綺麗な道に出た。この道は葡萄畑を見下ろし、山腹を縫ってシャンペリーまで續いていた。その邊を散歩しながら、祈禱をした。この祈禱は徒に口先だけで何か呟くのではなく、眼下に展けた愛すべき自然の美の造り主に対する眞摯な心の高鳴りであった。私は室内で祈ることよりも好まなかった。壁だとか、人間の作った色々な小道具だとか、神と私の間にへだてを作るような氣がするのである。自分の心が神に向って高まり行く時に、神の造り給うたものの中にあって神を默念するのが好きである。私の祈禱は純粹であった、と言いつてもできる。そして、その故に、私の祈禱は神により嘉納せられる價値があった。自分のために、また誓願の時はいつも心から離れたことのない女性のために、私の求めるところは、ただ、悪徳と悲哀と窮乏のない潔白で靜穩な生活のみであった。正しき者としての死と、來世に於ける正しき者としての運命のみであった。しかも、この行爲は、求めることよりも、むしろ讚美すること、默念することに多く現われた。そして、眞の幸福を施與する神を相手にして、われわれに必要なる幸福を得る最良の手段は、それを求めるよりも、それに値する者となることである、と私は知っていた。相當な廻り道をして、ぶらぶら歩きながら歸って來る時の私は、まわりにある田園の風物を興味深く、また貪るように眺めた。そういうものだけは決して眼や心を倦ましめることがなかった。私は遠方から、ママさんの部屋はもう明るくなっているかどうかと眺めてみる。窓の戸が開いているのが見えると、よろこびで身ぶるいしながら、駆け寄った。若し閉まつていたら、ママさんの眼の醒めるまで庭にいて、前の日に習い覺えたことを復習したり、庭仕事をしたりして楽しんだ。窓の戸が開くと、寢床にいるママさんを接吻しに行く。まだどうしてかよくあつた。そして、この優しく、また清淨な接吻は、その潔白さそのものの中から、官能の愉悅とは全くつながらない一つの魅力を汲み出すのであつた。

朝食は普通牛乳入りのコーヒーだつた。この時は、一日中で一番落著いた、また一番心おきなく話し合える時間だつた。

た。朝食の席はいつも大抵長くなつた。このために私は朝食というものに非常な興味を持つようになった。そして、朝食が大勢の人の集る本式の食事となつていけるイギリスやスイスの習慣の方が、自室で一人で朝食を攝るか、或いは全然朝食をしないフランスの習慣などより、ずっと私には好ましいのである。一二時間雑談をしてから、晝食まで本に向つた。まず、ポール・ロワイヤルの「論理學」、ロックの「悟性論」、マルブランシュ、ライプニッツ、デカルト等の哲學書からはじめた。そのうちに、これらの著者たちが、ほとんど果しもなく相互に反對し合つていけることに氣がついた。そして、私はこれを調和させようという夢のような計畫を立てたが、これは私を非常に疲らせ、多くの時間を空費させた。頭が混亂するばかりで、少しも前へ進まなかつた。とうとうまたこの方法を諦めて、一つの非常に優れた方法を取つた。私が能力に缺けるところがあつたに拘らず、相當の進歩を遂げたのは一にこの方法の賜である。實際、私は學問をするための能力はいつも非常に乏しかつたのであるから。この方法というのは、一人の著者を讀む場合に、自分の意見や他の著者の意見を加えず、相手と論争をせず、ひたすらその思想のすべてを受入れ、これに従う、という方法であつた。私はこう考へた。「初めのうちは眞でも偽でもかまわない、とにかくはつきりした色々な思想の間屋になることだ。そのうちには、頭も充實して來て、比較したり選擇したりすることができるようになる」と。この方法にも不都合な點がないわけではないこと、私はよく知っている。しかし、學問をするという目的はこれで旨く達せられたのである。自分からは少しも物事の省察をせず、ほとんど推論さえもせず、ただ他人の意見に従つて物を考へることに數年を過ごした後に、私ははじめて、自分でも満足ができ、他人の力をたよらずに物が考へられるほど十分な知識の蓄えを持つに至つた。そうなる、旅行や用務のために書物を繙く折がなくなつても、前に讀んだことを思い出したり、比較してみたり、一つ一つの事を理性の秤にかけてみたり、時にはまた自分の先生たちの品さだめをやつてみたりして、楽しみとした。私が自分の判斷力を行使できるときになつたのは、ずいぶん遅れてはいたわけだが、それでも、このためにその鋒先の力が失われたとは思わな

*1 異本。「うれしさで身ぶるらしながら」。

*2 イギリスの哲學者(一六三二年—一七〇四年)。

*3 フランスの神祕哲學者(一六三八年—一七一五年)。

*4 ドイツの哲學者(一六四六年—一七二六年)。

った。そして、私自身の意見を公表した場合でも、人から、彼奴は他人の糟粕を舐める奴だ、in verba maestri^{*1} 偉そう
なことを言う奴だ、と悪口を言われたことはないのである。

そこから今度は幾何学の初歩に移った。初歩というのは、同じところを百度でも千度でもやり直し、たえず同じ歩みを
繰返して、頑固に自分の貧弱な記憶力に打ち克とうと努めて、少しも先へ進まなかったからである。私は觀念の聯絡より
もむしろ證明の連鎖に重きをおいているユークリッドの幾何学を好まなかった。それよりも、神父ラミの幾何学の方が好
きだった。ラミはその頃から私の愛好する著者の一人となつて、今日でもこの人の著作は楽しく読みかえている。その
次には代数学が来た。その手引きにはやはり神父ラミを選んだ。少し進んでからは、神父レイノ^{*2}の「計量学」、それか
ら、これは一寸眼を通しただけだが、同じレイノの「立證解析学」などを讀んだ。代数を幾何に應用することがよく理
解できるところまではどうしても進まなかった。どうしてやるのか分らないので、何となくそういう解法は好ましくないと
思った。そして、幾何の問題を方程式で解くのは、ハンドルを廻して音楽を奏するようなものだと思われた。二項式の
自乗が、各項の自乗と兩項の倍數から成る、ということ計算してみても初めて知った時には、自分の掛算が正しかったに
も拘らず、圖形を書いてみるまではどうしても本當と思われなかった。代數は不名量のみを扱うものと考えて、これに大
きい興味を抱かなかつたわけではなかつたが、代數を面積に適用した場合には、その解法を線の上で見つけないこと
は、ほかのことでは全く理解がいかなかつたのである。

その次にはラテン語が来た。これは一番骨の折れた勉強で、しかも、どうしても目ざましい進歩のできなかったもので
ある。私はまずポール・ロワイヤルのラテン語學習法によつたが、成果を收められなかつた。あのオストロゴ人の詩のよ
うな文章には胸が悪くなって、とても耳には入らなかつた。澤山の規則の中に踏み迷つて、最後の規則を覚えてい
るうちに、それまでの分をみんな忘れてしまつた。語學の研究は記憶力のない人間のすべきことではない。そして、私が頑固に
この勉強をやつたのは、自分の記憶力に無理強いに能力を持たせようとするために外ならなかつた。最後にはこれも諦め
なければならなくなつた。それでも、平易な書物なら、辭書の助けをかりて讀める程度には、文章の構造も分るようにな
つた。私は辭書の助けをかりてやる方法を續け、これで相當に旨く行つた。翻譯も熱心にやつたが、これは書くのでは
なく、心の中で翻譯をするのであつて、いつまでもそれ以上には出なかつた。時間もかけ、練習もしたお蔭で、ラテン作

者を相當に流暢に讀みこなせるぐらになつたが、ラテン語で話したり書いたりすることは、いつまでもできなかった。
このために、後に、どういう加減か私が文學者の仲間に入れられた時に、度々困らされたものである。かういふ勉強の仕
方から来るもう一つの不都合は、韻文法が少しも分らず、さらに悪いことは作詩法の規則が全く呑みこめなかつたこと
である。それにも拘らず、韻文や散文に於けるこの言語の諧調を感じ取ろうと思つて、それまでになろうと非常な努力をし
た。しかし、これだけは先生につかなければほとんど不可能であることが分つた。韻文の中でも最も平易な構造、即ち六
脚詩の構造が分つたので、ずいぶん辛抱してほとんどすべてのウエルギリウスの詩の格を調べ、その脚と長短とに印をつ
けた。それから、一音綴の長短が疑わしい時には、いつもこのウエルギリウスを參考にした。そういうことをしても、作
詩法の規則上で許された破格というものがあるのだから、私が多くの誤りを犯したことは言うまでもない。しかし、獨學
に利があるとしても、またそれには非常な不利もある。とりわけ、骨の折れることは大變なものだ。私は誰よりもよくそ
れを知っているのである。

晝前に書物から離れて、まだ食事の準備ができていなければ、それを待つまで、わが親友の鳩君たちを訪問に出かける
か、庭へ行って働いた。誰かが呼ぶ聲を耳にすると、私はうれしく、また、激しい食欲をもつて、駆けつけた。食欲と言
えば、ここで又ことわつておかなければならないが、私はどんなに病氣であっても、食欲がなくなることは少しもなかつ
た。ママさんが食べられるようになるまでは、てんでの仕事の話をして、愉快に晝食の食卓についていた。一週に
二三次、天氣の好い時には、家の裏手の涼しい樹蔭のある園亭へ出かけて、そこでコーヒーを飲んだ。そこは私が蔓草を
からみつけさせたところで、暑い時分にはごく氣持の好いところだった。二人はそこで小一時間も野菜や花を見廻つた
り、暮し向きに關した話をしたりしてすごした。これが二人に生活の樂しみをさらに快く味わせてくれたのである。私
にはもう一つ庭の片隅に小さい家族があつた。それは蜜蜂である。この蜜蜂を訪ねて行くことも、ほとんど缺かしたこと

*1 「先生の聲色を使つて」

*2 オラトリアル派の神父で數學者(一六五六年—一七二八年)。

*3 オストロゴ人は或る種族の名であるが、野蠻な、粗野な、というような意味に用いられた。

*4 ヴァラン夫人がなかなか食事に手をつけなことは前に述べてあつた。

はなかつたし、ママさんもよく一緒に行った。私は蜜蜂の仕事に非常な興味を持った。小さな脚に、時には歩くことも難澁なほどの荷物をつけて、花蜜蒐集の旅から歸って来る様子を見るのは、この上もなく楽しかった。初めの頃は物珍らしさの餘り、つい向う見ずなことをやって、二三度刺されたことがあった。しかし、その後は、私と蜜蜂とは大いに懇意になつて、いくらこちらの方で近くに行つても、向うからはどうもしなくなつた。今にも蜜蜂の總勢が飛び出しそうに巢の中が一杯になつていても、時には私が蜜蜂の群にとりまかれても、手や顔にいくらとまつても、一度も刺されることはない。あつた。あらゆる動物は人間を疑っている。そして、それは間違ひではない。しかし、一度人間が害を加えるものでないと安心しさえすれば、動物の信頼は非常に増大して、よほどの野蠻人でない限り相手の信頼を濫用することができなくなるものである。

私はまた書物へ戻る。しかし、午後の仕事は勉學とか研究とかよりも、慰安とか娛樂とかいう名前に相應しいものであつた。晝食後の書齋の勉強はいつでも堪えられない。そして、一體に日中の暑い時は、どんな仕事も辛いのである。それでも、研究でない讀書は、暢氣に、またほとんど手當りしだいにやつた。最も規帳面に専念したのは歴史と地理であつた。そして、これはいづれも頭を使わずに済むものだから、自分の貧弱な記憶力の許すだけの進歩は遂げることができた。私は神父ペト^{*1}を研究したいと思つて、年代學の暗闇の中へ入りこんでしまつた。しかし、歸著點のない議論の部分は好まず、正確な時間の測定や天體の運行などを特に面白く思つた。若し必要な器具さえあつたら、天文學にさえ興味を持つたであらうが、ただ書物から得た少しばかりの原理と、望遠鏡を使って天空の大體の状態を知るだけの大雑把な觀察だけで満足していなければならなかつた。私は近眼だったので、肉眼では星を明瞭に見分けることができなかつた。この事に關して一つの出來事があるが、これは時々思い出すたびにおかしくなるのである。私は星座を研究しようと星座早見表を買つたことがあつた。この平面球形圖を枠に貼つつけた。空のよく晴れた夜に、庭へ出かけて行つて、この枠を自分の身長ほどもある高い四本の支柱の上に置き、星座表を下から見上げるようにしておいた。次に、これを照らして見る灯が風に吹き消されないように、四本の支柱の間の地面に置いた桶の中に蠟燭を立てた。それから、交互に星座表を眼で見たり、星を望遠鏡でのぞいたりしながら、星の名を憶えたり、星座を識別したりする練習をした。このノアレ氏の庭が高臺になつてゐることは前に述べておいたと思ふ。だから、庭でしてゐることは、みんな道路からよく見えた。或る

晩、かなり遅く、通りがかりの土地の人が、異様な道具立ての中で、私が一心に仕事をしてゐるのを見つけた。星座表に映つてゐる微光が何處から來るのか、蠟燭は桶の縁にかくされて見えないから、その人たちには分らない。四本の支柱、變な圖の書いてある大きい紙、四角な枠と、あちこち動きまわる望遠鏡、こんなものが、その人たちには魔法の道具のように思われて、すっかり慄毛をふるわせた。私の風體も人に安心を與えるに相應しいものではなかつた。頭巾の上から、耳の垂れた帽子を被り、ママさんがどうしても着ろと言つて着せた綿入れの短い部屋着を羽織つていたから、どう見ても本物の魔法使そっくりだつた。しかも、そろそろ眞夜中にならうという時刻だったので、その人たちは、これから魔法使の饗宴でもはじまるのだと思ひこんだ。一同はそれから先を見とどけようという氣にもならず、ひどくびくりして逃げだし、近所の人々を呼び起して、今見たものを物語つた。この噂は忽ち擴がつて、あくる日になると、近所の者はみんなノアレ氏の家で魔法使の宴會があつたことを知つてしまつた。若し私の魔法の現場を見た土地の人の一人が、よく家へ來る二人のエスイタ僧のところへ、さつそくその日にこの話を持ちこまなかつたら、私にはこんな噂がどんな結果を招いたか見當がつかなかつたであらう。二人のエスイタ僧は、何の話かよくわけが分らないままに、とにかく一同をなだめておいた。僧たちからこの話を聞いた私は、そんな噂の出た原因を二人に語つたから、一同は大笑いになつた。しかし、またそういうことが起らないように、今後は灯をつけずに觀測すること、星座表は家の中で参照すること、なぞがきめられた。「山よりの書」の中の私のヴェネチヤの魔法^{*2}を読んだ人々は、私が永い間魔法使の大天才を持つていたことを見出すに違ひないと思ふ。

畑の仕事をしたくない時の、シャルメットでの私の生活状態は以上のようなものであつた。畑仕事と言へば、これはいつも私の好んでやつた仕事であつて、自分の體力に無理のいかない限りは、いつでも百姓のように働いたものである。尤も、當時は身體がひどく弱つていたので、この件については、ただ善意があつたということだけが賞められていいことである。その上、私は二つの仕事を同時にやらうと思つた。そして、このために兩方とも旨く行かなかつたのである。私は力づくで自分に記憶力をつけようと思つた。多くのことを語記しようと思つた。このために、いつも何かの

*1 ド・ペトⁱといつて、エスイタ派の神父。博學者として有名であり、年代學の著作がある(一五八三年—一六五二年)。

*2 ルソオの作「山よりの書」第一部、書簡第三。

本を手離さず持っていて、仕事をしながら、大變な苦勞をしてその本を勉強したり繰返したりした。そういう無駄な不斷の努力が、どうしておしまひには私を馬鹿にしてしまわなかったか、不思議である。ウエルギリウスの「牧歌」などは二十度も繰返し勉強したに違いないが、今ではその中の一語も知っていない。本を手離さずに、鳩小屋・庭・果樹園・葡萄畑と、何處へでも持っていく習慣のために、多くの書物が失くなったり、半端ものになったりした。他のことに氣を取られて、樹の下、生垣の上、どんなところに本を置いて、必ず置き忘れた。そして、十五日も経ってから、その本が腐ったり、蟻や蝸牛に喰いちらされたりしているのを見つけないことがよくあった。こういう勉強熱は一種の偏執狂じみたものになって、仕事をしていながらもたえず口の中でぶつぶつ何かつぶやいているといった、まったく阿呆のようになってしまった。

ポール・ロワイヤルとオラトアールの書物は、最も頻繁に讀んだものだったから、やがて半分ジャンセニスト風になった。それでも、ずいぶん自信はあったが、この一派の人々の苛酷な神學は時として私に慄毛をふるわせた。それまでは、ほとんど氣にもかけなかったことなかつた地獄の恐ろしさが、少しずつ私の安心を擾すようになった。そして、若しママさんが私の心を鎮めてくれなかつたら、あの恐ろしい教義は最後には私を全く動揺させたかも知れなかつた。私の懺悔聽問僧はママさんのと同じ人だったが、この人はこの人で私に落著きを興えるように盡してくれた。それはエスイタ僧の神父エメという、親切で聰明な老人で、この人の追想は常に尊敬のうちになされるものである。エメ師はエスイタ僧ではあつたが、小兒のように素直だつた。そして、師の倫理觀は生ぬるいというより温か味があるといふべきもので、ジャンセニストの陰慘な印象を割引くのに、丁度私には持つて來いのものであつた。この好人物のエメ師と、師の友の神父コピエ師とは、年配の人にはずいぶん遠くひどい道なのに、よくシャルメットまで訪ねて來てくれた。お二人の訪問は私には非常なためになった。神よ、願わくば兩師の靈にその善行を報い給はんことを！ その頃、お二人はよほど年を取つておられたから、今日なお生きておられるとは思われないからである。私の方でも、シャンベリーまで兩師を訪ねて行つた。そして、家への出入りも次第に親しくなつた。兩師の書庫は私の役に立つた。この仕合せな頃の思い出は、これら二人のエスイタ僧の思い出とよく結びついていて、一方の思い出によって他方がなつかしく思い出されるわけである。そして、エスイタ僧の教義は、いつも私には危険に思われているのであるが、それにも拘らず、私は心から兩師を憎む氣持を自分のうちに

見出し得ないのである。

私は、他の人々の心の中にも、私の心に時々起るような子供らしい考えが時には起るものかどうか、知りたいと思つてゐる。さまざまな勉強をやり、人間としてできる限りの清淨な生活を送つてゐる最中に、人から色々と言ひ聞かされるにも拘らず、地獄の恐怖はやはり度々私の心を不安にした。私は自ら尋ねた。

「おれはどういう状態なのだろうか。たつた今死ねば、地獄へ墮されるだろうか」と。

ジャンセニストの言うところによれば、これは疑う餘地のないことだつた。しかし、自分の良心の言に従えば、それは「否」であつた。このようなむごたらしい不安定のうちに、たえずびくびくし、たえず漂つていた私は、そこから脱しようと思つて、この上もなく笑うべき方法にたよつた。若し他の男がそんな眞似をしているのを見たら、私は用捨なくその男を監禁しただろうと思ふ。或る日、この憂鬱な問題を考えこみながら、樹の幹に向つて機械的に小石を投げつけていた。それも、例の通り器用な私のことだから、ほとんど一つも石は幹に當らなかつた。こんな詰らないことをやつてゐる最中に、私は、これで一種の占をやつて、自分の不安な氣分を鎮めようと思ひついた。

「おれの眞正面にある樹にこの石を投げつけてみよう。旨く當つたら、救われる印だ。やりそこなつたら地獄へ落ちる印だ」と、私は自分に言つた。

そう言いながら、手をぶるぶる顫わせ、胸をどきどきさせながら、石を投げたが、何と仕合せなことに、石は樹のまん中に見事に當つたのである。といつても、これはまったく大して難しいことではなかつた。前から用心してごく太いごく近い樹を選んでおいたからである。その時からは、私はもはや自分の救濟を信じて疑わなかつた。私はこの一件を思い出すにつけても、自分のことを笑うべきか、慨くべきか、自分では分らないのである。これを必ず笑うにちがいない大人物たる諸君よ、諸君は自己を祝福し給え。しかし、みじめな私を侮辱しないでほしい。そうだ、私は自分のみじめなことをよく感じてゐるのだから。

*1 これはルソオの誤りである。エメ神父は一七三八年五月二十二日に亡くなつてゐるから、ルソオがシャルメットにいた頃の懺悔聽問僧ではあり得なかつた。

*2 原文にはコピエとあるがクビエの誤りである。一六九九年グルノーブルに生れ、一七六八年にシャンベリーで歿してゐる。

その上、恐らく信仰と不則不離の關係にあるかういふ煩悶や不安は永續的な状態ではなかった。通例は私もかなり落著いていたし、近いうちに死ぬという考えが自分の魂に與える印象も、悲しみというよりむしろ平靜な倦怠の氣味を帯びていて、これはこれとして何か甘美なものさえ持っていた。私は近頃、古い書類の中から、かつて私が自分自身のために書いた一種の臨終の誠告とでもいうようなものを見つけ出したが、その中で、死に直面するだけの勇氣をまだ十分に持っている年頃に、そして、生涯の間肉體上にも精神上にもまだ大きい不幸を體驗しないうちに死ぬる自分自身を私は祝福しているのである。何と道理になかった言葉であろう。一種の豫感があって、自分は苦難の生涯を送るのだ、ということを知らされていたのである。年老いてから自分を待っている運命を、私は豫見していたように思われる。あの仕合せな時期ほど私が靈智に近づいていたことはなかつたのである。その頃私の魂をたえず支配していた感情は、過去について大いなる悔恨を持たず、未來の心配からも解き放たれて、ただ現在を享樂しようとするだけだった。信心家と雖も普通は多少の強い慾情があるものであって、自分たちに許された無邪氣な快樂を楽しく貪ろうとする。世人はこれを罪とするが、私にはその理由が分らない。いや、むしろ私にはその理由がよく分っている、と言おう。それは、世人が、己れの興味を失った單純な快樂を、他人が享樂するのを羨むからなのである。私は、その興味を失っていなかった。そして、良心の咎めを受けることなく、その興味を満足させるのは非常に楽しいことと思っていた。まだ若々しかった私の心は子供のようによろこびをもつて、或いは、敢て言えば、むしろ天使のような歡喜をもつて、あらゆるものに溺れた。というのは、實際、そのような平穩な享樂には天國のそれのような明朗さがあつたからである。モンタニユールの草原の上で晝食、蔓草棚の下で夕食、果實の收穫、葡萄の取り入れ、作男たちと麻の皮剥きをやった夜なべ仕事、そういうものは、すべてわれわれに取ってはお祭りのような楽しみであつて、これにはママさんも私と同じよるこびを味わつたのであつた。これほど賑かではない靜かな散歩は、さらに大きい魅力を持っていた。なぜなら、そういう時には心が一層自由に打ちとけて来るからである。その中でも、ママさんの名前にゆかりのある聖ルイの祝日^{*1}に散歩した時のことは、私の記憶の中でも一つの時期を劃している。夜の明け方に、家に隣合つた禮拜堂へ、一人のカルメル派の僧が来てミサをしたが、それが濟んでから、ママさんと二人だけで、朝早く一緒に出かけた。私は自分たちの住んでいる向う側の山手はまだ行って見た事がないから、そちらを歩いてみよう^{*2}と前から言つておいた。この遠足は一日かかる筈だったので、食糧は前もって向うへ送つて

おいた。ママさんは少々肥満していたけれど、結構よく歩いた、丘から丘へ、森から森へ、時には日向を歩き、多くは樹蔭をたどりながら、時々休憩しては、時間の經つのをすっかり忘れた。自分たちのこと、二人の仲のこと、二人の楽しい境涯のことなどを語り合ひ。これがいつまでも續くようにと祈願をかけたが、この祈願は叶えられなかった。あらゆるものがその日の幸福に力を合せているように思われた。二三日前に雨が降つたばかりで、埃はなく、小川は豊に流れていた。涼しいそよ風が樹の葉をそよがせ、空氣は澄み渡り、見渡す限り雲一つなかった。大空にも二人の心のように清朗が支配していた。晝食は或る百姓の家で、その家族と一緒にした。一同は心から二人を祝福してくれた。あの貧しいサヴォアの人たちは何と善良な人々であろう！晝食後に、二人は大きい樹の蔭へ入った。そこで、私がコーヒーを沸かすための枯枝を拾っている間に、ママさんは草叢の間で植物採集をして楽しんでた。そして、私が道々ママさんのために集めた花束の花で、ママさんは花の構造について色々珍らしいことを教えてくれた。それは私を非常に面白がらせ、後に植物學へ興味を抱かせることになつたのである。尤も、その時にはまだその時機が来ていず、私は他の餘りに多くの研究に氣を取られていたのであつた。ふと或ることに思い當つて、私の氣分は花や植物から外らされた。それは、その時の私の心持、その日に二人が言つたりしたりしたこと、私の心を打つた色々な物、それらが、その時から七八年前、アマシールで私が現のうちに見た一種の夢のことを思い出させたのである。この夢のことは前に述べておいた^{*2}。この兩者の關係がまことに驚くほどだったので、その事を考え合せて、思わず感動して涙を流してしまつた。感謝で有頂天になつた私はこの親愛な女友達を抱きしめた。

「ママさん、ママさん」と、私は熱情をこめて言つた。「この日はずっと前から僕には約束されていたのです。それより先のことは何にも僕には分りません。ママさんのお蔭で、僕の幸福は絶頂です。これから先も、どうぞこのまま下り坂にならないように！僕がこれを楽しみとしている間は、どうぞいつまでも續いてくれるように！僕の生命のなくなる時まで、終らないように！」

*1 ヴァラン夫人の結婚前の姓名はルイズ・フランソワーズ・ルイズ・ド・ラ・トゥールという。従つてルイという名にはゆかりがあるわけである。聖ルイの祝日は八月二十五日。

*2 一〇六頁参照。

私の仕合せな日日はこのようにして過ぎて行った。その日日を擾す何ものも認めなかった私は、實際に自分の死ぬ時でなければその最後は来ないものと思っただけに、なお一層仕合せであった。自分の煩悶の泉がすっかり涸れてしまつたわけではなかったが、それが別の方向へ流れて行くのを見たのであった。私はこれが煩悶の治療薬になるように、その流れて行く方向をできるだけ有益な事に振り向けた。ママさんは生れつき田舎が好きだった。そしてその嗜好は私と一緒に減ずることはなかった。ママさんは次第に畑の仕事が好きになって来た。田畑を十分に活用して、利益を得ることが好きだったし、そういうことには知識もあつたので、その知識を發揮するのが楽しみだった。今住んでいる家に附屬した田畑だけでは満足できずに、畑を借りたり、牧場を借りたりした。おしまいは、家でぶらぶらしているよりも、自分の計畫好きな氣質を農事の方面に向けて、やがては大百姓にでもなろうというつもりになった。私はママさんがそのように手を擴げるのを見るのが厭だった。そして、きつとまた人に騙される、例の大まかなやりつ放しの性質だからきつと入り出る方が多くなるにきまつている、そう考えて私はできるだけ反対した。しかし一方ではまた、収入があれば少くもそれはゼロではあるまいし、そうなればいくらか生計の足しにはなる、とも考えて心を慰めた。ママさんの企てる色々な計畫の中でも、今度のは最も危険が少いように思われた。そして、私はこの計畫にママさんのように利益の目的を見ないで、ママさんを詰らない事業や詐欺師たちから守る一つの繼續的な仕事として見たのである。そう考えて、ママさんの事業を監督するために、小作人たちの取締或いは小作頭の仕事がやれるほど十分な體力と健康を恢復しようと、躍起になった。そして、このためにどうしても身體を動かすようになったから、自然に讀書から遠ざかることも度々あつたし、自分の健康状態も氣にならなくなって、次第に健康は快くなるのであつた。

(一七三七年——一七四一年)

その次の冬、イタリヤから歸つたバリヨは私のために何冊かの本を持って来てくれたが、その中には神父バンキエリの「晴れ日」と「音楽一覽」とがあつた。これは音楽史と、この藝術の理論的研究に對する興味を私に起させた。バリヨはしばらくわれわれと一緒にいた。そして、私は丁度數カ月前から成年に達していたから、春になったらジュネーヴへ行って、母の遺産を、兄の消息の分るまでせめて自分の取り分だけでも請求することに話がきまつた。これはきまつた通りに實行された。私はジュネーヴへ行った。父の方からもジュネーヴへ来た。父は裁判所の決定を覆したわけではなかつたが、別段の異議もなく、しばらく前からジュネーヴへ還つて来ていた。人々は父の勇氣を尊敬し、父の誠實に敬意を拂つていたから、例の事件は忘れてしまつたような風をしていた。また、政府の方も、間もなく突發した大事件に氣を取られていたから、以前の偏頗な處分を悪い時分に思い出させて市民を刺戟したくはないと思つたのである。

私は自分が宗教を變えたことについて何か難題でも起るのではないかと心配したが、何も起らなかつた。こういう點では、ジュネーヴの法律はベルヌの法律よりも嚴重ではない。ベルヌでは宗教を變えたものは誰でも市民権を失うばかりでなく、財産までも失うのである。従つて、私の財産については誰も異議を申立てるものはなかつたが、どういふわけか、ひどく減らされて、ごく僅かのものになつていた。兄の死亡はほとんど確實だったが、それについての法律上の證據がなかつた。だから兄の取得分を請求するに十分なほどの資格が缺けていた。そこで、この分は父の生計を助ける意味で惜氣もなく諦めてしまつた。父は死ぬまでこれを享受していたわけである。裁判所の手續が済み、自分の金を受取るや否や、その一部を書物に投じ、残りの金を持って、ママさんのもとへ飛んで歸つた。その途中、私の心はよろこびに高鳴つた。そして、その金をママさんの手に渡した時は、それが自分の手に入った時より千層倍もうれしかつた。ママさんは高潔な心の人の持つあの無造作な態度でその金を受取つた。高潔な心の人というものは、そういうことを強いてするのではないから、人がそうするのを見ても別に驚きはしないのである。この金はほとんど全部私への使途に費消された。それも同じ無造作な態度で行われた。この金が別のところから来たものだったとしても、やはり同じように費消されたであらう。その間にも私の健康は少しも恢復しなかつた。それどころか、眼に見えて衰弱して行つた。死人のような蒼い顔をして、骸骨のように痩せていた。脈搏は劇しく、動悸は益々頻繁になつた。たえず胸苦しく、やがては身動きするのも苦勞なほど弱つて来た。歩調を速めれば息がつかまつた。身を屈めれば目まいがした。どんな軽いものでも持上げることができな

*1 アドリアイノ・パンキエリという修道僧で、同時にオルガン音楽の作曲家、優れた音楽理論家として聞えていた(一五六七年——一六三四年)。
*2 一七三八年五月八日、フランス大使ロートレッツ侯とチューリヒ及びベルヌの代議員によつて、ジュネーヴの官憲と市民との間に起つた紛争を解決したことがある。ルソオは恐らくこの事件のことを言つてゐるのであらう。

かった。何もしないといけないならなかったが、これは私のようにじっとしていられないたちの者には、この上もない苦痛だった。なお、このほかに多く氣鬱症が混っていたことは確かである。氣鬱症は幸福な人々の病氣である。私の病氣がそれだった。泣くわけでもないのに流す涙、木の葉の音・小鳥の聲にも感ずる強い怯氣、この上もなく甘美な生活の静けさの中のむらな氣分、これらはすべて、安逸の倦怠を示すものであって、そのために感受性が、言わば、荒立てられるのであった。われわれはこの世では幸福になれないように生れついでいるから、精神と肉體とその兩者とも共に苦しむ場合には、そのいずれかが苦しんでいなければならぬし、一方の状態が良ければ、ほとんど常に他方に害を加えなければならぬ。楽しく生を享樂できる筈の時には、衰え切った肉體がそれを妨げた。しかも、その病根の眞のありかは誰にも分らないのである。後年になって、私の肉體は、極めて切實なまた極めて深刻な災厄と類類にも拘らず、體力を恢復したかに見えたが、それは自分の不幸を一層痛切に感ずるためかのようにだった。そして、これを書いて現在の私は、病弱であり、しかも六十歳に近く、あらゆる種類の痛恨に壓倒されているけれども、若い盛りの頃、この上もなくまことの幸福の中にあつて、享樂のため持つていたよりも一層の活力と精力とを、今は苦しむために持つてしていると感じているのである。

自分の讀書の中に少しばかり生理學も加えてから、いよいよ仕上げのつもりで今度は解剖學の研究をはじめた。そして、自分の肉體を組織している各部分の複雑さと機能とを次から次へ見て行くと、そういうものが日に二十度も調子が狂うにちがいないような氣がして来るのだった。自分が死にかかっていることには驚かないで、まだ生きていられることに驚いた。そして、或る病氣のことが書いてあると、これが自分の病氣だと思わずに讀んだことはなかった。若し病氣でなかったとしても、このような悲しむべき研究によって、必ず病氣になっただろうと今でも確信している。どんな病氣にも自分の病氣の徴候を見出したから、自分はあらゆる病氣を持つていたのだと思ひこんだ。そして、それに加えて、もう治つていふと思つていたもつと恐ろしい病氣、つまり、病氣を治したいという出來心が起つた。これは醫書を讀みはじめるとなかなか避けられない出來心である。色々と検討・反省・比較をした結果、自分の病氣の元は心臓の息肉だと想像するに至つた。この思いつきにはサロモン先生もびっくりしたらしかつた。道理から言えば、私はこの考えから出發して、以前の自分の決心を益々固めるべきだった。ところが、そうしなかつたのである。私は大いに頭を挫つて、どうすれば心臓

の息肉を治すことができるかと研究をはじめた。一つこのすばらしい治療をやつてみようと思ひこんだのである。前にアネがモンペリエ^{*1}に旅をして、植物園とその事務官ソーヴァー^{*2}氏を訪ねたとき、フーズ氏がそのような息肉を治したことがあるという話を聞いて來たことがあつた。ママさんがそのことを思ひ出して私に話した。私はこれ聞いただけで、フーズ氏の診斷を受けに行きたくてたまらなくなつた。治るかも知れないという希望が、この旅行を企てるだけの勇氣と體力を私に與えた。ジュネーヴから來たお金がその旅費にあてられた。ママさんは思ひとどませるところか、是非行つて見ると勤める。そこでいよいよモンペリエへ出發することになった。

私は自分に必要な醫者を見出すためには、それほど遠くまで行く必要がなかつた。馬では餘り疲れすぎるので、グルノーブル^{*3}では轎を備つた。モアラン^{*4}まで來ると、私の後から五六臺の轎がつながつて來た。これは正に轎の情話とも言ふべきものだった。その轎の大部分はコロンビエ夫人^{*5}という新婚夫人のお伴廻りであつた。この婦人と一緒にラルナー^{*6}夫人というもう一人の女の人^{*7}がいた。この人はコロンビエ夫人ほど若くも美しくもなかつたが、愛嬌ではなかなか劣らなかつた。コロンビエ夫人はロマン^{*8}で轎を降りることになつては、ラルナー^{*9}夫人はそこからボン・サン・テスプリ^{*10}の近くのサン・タンディオル村まで道を續けることになつては、御承知の通りの内氣者であつたから、私がこういう立派な婦人たちやそれを取り巻くお伴の人々と知合ひになるまでには、なかなか手取早く行かなかつたことは御想像の通りである。しかし、同じ道中をやり、同じ宿屋へ泊りながら、變屈な奴と思われるのも辛いので、同じ食卓に顔を出すと、どうしてもおしまひには知合ひにならざるを得なかつた。こうして知合ひになつたわけだが、これは思ひのほか早すぎた。というのは、こういう賑々しいことは、病人に、殊に私のような氣質の病人には不向きだつたからである。ところ

*1 南フランス、地中海沿岸寄りにある都市で、マルセーユの西方七十キロばかり。

*2 シャンペリーの南三十キロ。ルソオがこの町に一六三七年九月十一日から十四日まで滞在していたことが分つてゐる。

*3 グルノーブルから二十キロばかりの小村。

*4 ジュステイリス。アンドレ・デュ・コロンビエ氏と結婚したのである。この夫人は一七四一年にグルノーブルで死亡している。

*5 シュザンヌ・フランソワーズ。一七六一年にプロヴァンス生れの男と結婚している。一七五一年以後に死亡したものとされている。

*6 グルノーブルから四十キロばかり、イゼール河沿いの小村。

*7 グルノーブルからイゼール河に沿つて西へ六十キロ、ローヌ河を南下して八十キロばかり、ローヌ河の左岸にある小村。

が、このようないたずら女どもが、好奇心を起すと、ひどく思わせぶりの態度を取るようになって、男と知合いになるためには、まず手はじめに相手を有頂天にさせるわけだった。私の場合がそれである。コロンビエ夫人の方は、狎ころのよきな若者たちにもあまり取巻かれすぎていたから、私なぞにちよっかいを出す暇はなかった上に、やがて別れるのだからそれにも及ばなかったけれど、ラルナージュ夫人の方は、それほどちよっかいやされず、道中に何かなくさみを見つけなくてはならなかった。そこでこの夫人が私を食い物にしようとする。哀れなジャン・ジャックよ、さらば、である。いや、熱も、氣鬱症も、息肉も、さらば、である。ラルナージュ夫人のそばにいと、何もかも何處かへ行ってしまった。ただ、或る種の動悸だけはなかなか治らず、また夫人もこれを治したからなかった。健康がすぐれない、というのがわれわれが知合いになったきっかけであった。私が實際に病氣であることが分り、私がモンペリエに行くことも知れた。それに、私の風采や態度は私が女たらしであることを示してはいなかったらしい。というのは、後で明かになったのであるが、私がモンペリエに色修業に出かけるなぞとは誰も疑っていなかったからである。男が病氣だというのは女に對しては大して割のいいことではなかったが、それでも女たちは私に同情を持ってくれた。朝になると、容態を尋ね、一緒にチョココレートを飲まないかと誘ってくれた。昨夜はどうだったかと訊いたりした。一度なぞは、無考えに物を言う例の悪い癖で、どうだか知りません、なぞと答えたことがあった。こんな返事のために、女たちは私が少し氣がふれているのだろうと思つた。みんなは前よりも私に注意するようになった。そして、この注意は私の不利にはならなかった。或る時、コロンビエ夫人がその女達に向つて、

「あの人は世馴れないのよ。でも可愛いわ」と言っているのを耳にしたことがあった。この言葉はひどく私の自信をつけた。そして本當に私は可愛くなったのである。

親しくなるに従つて、自分のこと、何處から来て、どういふ者であるかを話さなければならなかった。これは私の困ることだった。というのは、上流の社會で、伊達な御婦人たちを相手にして、自分は新たに改宗した者だ、と言え、その一語だけで破滅してしまふだろうことは、よく分つていたのである。そこで、どういふ氣まぐれだったか分らないが、一つイギリス人に成りすましてやろうという氣になった。私は自分がジャコビット^{*1}ということにした。一同はそうだと思つた。名前はダディン^{*2}と云つた。一同は私をダディン^{*2}さんと呼んだ。そこに丁度トリニヤン侯爵^{*3}といふいやな

男がいた。私と同じように病弱で、ずいぶんの老人で、相當に意地の悪そうな男だったが、それがダディン^{*2}さんと會話を交えようと思つた。ジャック王や僧王やサン・ジェルマンの元の宮廷のことなぞをこちらに話しかけて来た。私はいばらの上に坐つたようなものだった。そういうことについては、アミルトン伯爵^{*4}の著書や新聞の中で讀んだ少しの知識しか持つていなかったのである。しかし、私はその僅かの知識を旨く振りまわして、難場をどうやら切り抜けた。英語のことを訊こうと相手がいづかなくなつたのは何より仕合せだった。英語は一語も知らなかつたのである。

一同は意氣投合していたから、別れる時の來るのを残念に思つた。蝸牛のようにゆっくりと道中を進んだ。或る日曜日、サン・マルセル^{*5}にいた。ラルナージュ夫人はミサに行きたがつた。私が一緒に行った。これが危く私の立場を臺なしにしてしまふところだった。私はいつもするように身を處した。その慎ましく一心な様子を見て、夫人は私をひどく信心深い男だと思つた。

そして、それから二日後に夫人が打明けたところによると、その時私についてこの上もなくひどい誤解をしたのであつた。この悪印象を消すためには、その後色々御機嫌取りをしなければならなかつた。というより、ラルナージュ夫人は、世馴れた女として、容易には物事に厭氣を出さない人だつたから、思ひきつて自分の方から仕掛けてみて、私の方がそれをどう切り抜けるかを見てみたいと思つた。そこで夫人はこちらに色々仕掛けた。あまりそれがひどいので、私は自分の顔に自信を持つどころか、却つて向うから揶揄われているのだろうと思つた。この考えちがひから、私はありとあらゆる馬鹿げたことをやつた。「遺産」^{*6}の侯爵よりもひどかつた。ラルナージュ夫人の方はしっかりしたもので、こちら

*1 イギリス王ジャック二世の徒黨という意。ジャック二世が一六八八年王位を退かれてから、その王子及び王孫はフランス王ルイ十四世の後援を得て叛を謀つていた。僭王はパリ近郊のサン・ジェルマンに匿まれていたことがある。

*2 本名はトリニヤン侯爵。一六七六年生れ。

*3 前の註參照。

*4 アイルランド生れのフランス文學者。ジャック二世が追放された時、これに従つてパリに定住した。「グラモン伯爵書」を書いた。

*5 グルノーブルから二十キロあまり。

*6 フランスの劇作家マリヴォー（一六八八年—一七六三年）の喜劇。侯爵はその中に出て來る人物で、二人の女から手玉に取られてきんぎんな馬鹿を見る。

にさんざんちよっかいをかけたたり、ひどく優しいことを言いかけたりしたから、私よりずっと阿呆でない男でもこれを眞面目に取るにはなかなか骨が折れたであろう。夫人がそんなことをすればするほど、私は前の考えを固めた。そして、これ以上に辛いと思ったのは、こちらが本氣に相手を好きになつてしまつたからである。私は自分にも言い、また溜息をつきながら夫人にも言った。

「あゝ、これが本當であつてくれれば！ 僕は男の中でも一番幸福な男になれるのだが」

私の初心な氣分が相手の氣まぐれを益々刺戟したのだと思う。夫人は、やりそこなつて恥をかきたくない、と思つた。ロマンでコロンビエ夫人とその伴廻りとに別れた。ラルナージュ夫人、トリニャン侯爵、それから私の三人はこの上もなくゆつくりと、この上もなく愉快に、道中を續けた。病弱で氣むずかしい侯爵は、それでも割合に善い人だったが、焼肉の匂いだけをかきながら、パンを噛んでいることは好きでなかった。つまり、ラルナージュ夫人が私に興味を抱いていることをあまり隠さなかつたので、侯爵は私よりも早くそのことに氣づいていたのであつた。そして若し私が例の持ち前のひねくれ根性から、夫人と侯爵が腹を合せて自分を擲擲しているのだと邪推しなかつたならば、侯爵から意地悪く當てこすられれば、少くも今まで夫人の好意に對し敢て抱こつたしなかつた信頼を、持つようになつて来る筈であつた。この愚な邪推は、とうとう私の頭を狂わせてしまつた。そして、心は實際に夫人に參つてゐるのだから、本來ならば相當見事な役割が演じられるべき場面にも、この上もなく詰らない人物の役しかできなかったのか、私には見當がつかない。しかし、夫人はなかなかの才女で、人間の見分けのつく人だつたから、私の態度のにえきらないのは私が融通の利かない男だからだと見て取つていたのである。

それでも夫人はとうとうこちらに氣持を悟らせることができた。それはなかなか容易なことではなかつた。ヴァランス^{*1}でわれわれは晝食のために輻を降りた。そして、例の天晴れな習慣に従つて、残りの一日をそこで過ごした。われわれは市外のサン・ジャックに宿を取つた。この宿屋のことや、ラルナージュ夫人の占めた部屋のことなど、いつまでも忘れないうだらうと思う。晝食後に夫人は散歩したいと言つた。侯爵が散歩に行けないことは承知の上だつた。私と二人だけになるように手筈を調べて、早く何とかしようという吐だつた。というのは、もう大して時日が残つていないので、好機を逸

する恐れがあつたからである。二人は濠に沿つて、市の周圍を散歩した。私は散歩しながら、また長々と自分の病苦の話をした。夫人は私の手を握つて、時々胸のところを押しつけながら、ひどく情のこもつた調子で受け答へをした。それで、夫人が眞面目に口を利いてゐるのかどうかを確かめないでゐるためには、私ぐらいの阿呆さ加減が必要だつたわけである。この時、おかしいことには、私自身がひどく感動してしまつた。夫人が愛嬌のある女だということは前にも言つた。ところが、戀のために夫人は魅力的になつた。戀は夫人に輝かしい青春を取り戻させていた。その上、夫人はいかにも技巧たつぷりな媚態を示したから、どんな難攻不落の男でも誘惑されたかも知れない程だつた。そこで、私はひどくどきまぎして、今にも思わず怪しからん振舞に及びそうな氣がしてならなかつた。だが、相手を怒らせるのではないか、反感を起させるのではないかと、いふ心配と、それにもまして、聲でも立てられたら、食卓談話の種にでもなつたら、無慈悲な侯爵から自分の企みをひやかす半分にほめられたりしたらなぞという恐れもあつて、私の氣持は引きとめられたが、おしまいは、自分の愚な羞恥と、自分を叱りつけながらもどうしてもその羞恥に打ち克てないことが、われながら腹立たしくなつた。どうももどかしくてたまらなかつた。もうセラドン^{*2}のような臺辭はやめてしまつた。事が順調に運んでいる時に、そんな臺辭は馬鹿げているような氣がしたからだつた。どういふ顔つきをしていなければならないのか、どういふことを言えばいいのか分らないので黙つていた。不平らしい風をしてゐた。要するに、私は、かねて恐れていた待遇を相手から受けるようなことばかりをしてゐたわけだつた。幸いにもラルナージュ夫人はもっと人間味のある仕草に出た。不意にその沈黙を破つて、私の頸のまわりに腕を廻すと、咄嗟にこちらの唇の上にはっきりと自分の氣持を打明けた。私の思いがいはそれで解消した。急場がこんなに旨く救われたことはない。私は急に愛想がよくなつた。そろそろ愛想をよくしてもいい時分だつた。今までの私はいつでも自信がなかつたから、自己を見失つてばかりいたわけだつたが、相手が自信を與えてくれたのである。だから、私は自己を見失わなかつた。その時ほど私の眼・官覺・心・口などが雄辯になつたことはなかつた。その時ほど自分の誤解を十分に償つたことはなかつた。そして、この小さな證明をするのに、ラルナージュ夫人は相當に氣を遣つた。だらうけれど、夫人がそれを後悔することはなかつたと私は信じてゐる。

*1 ロマンから十五キロ、ローヌ河沿いの小都市。

*2 前出「アストレ」の中の人物。純愛に燃える戀人の典型。

私は百年生きて、この魅力ある婦人の思い出をよろこびなしには想起することはあるまいと思う。夫人は美しくも若くもなかったが、しかし、私はここに「魅力ある」という言葉を使う。夫人は醜くも年老いてもいたわけではなかったから、その才氣と淑やかさが十分の効果を發揮するためには、容姿の上に少しも妨げとなるものはなかった。他の婦人たちと全く反対に、夫人の身體のなかで最もみずみずしくなかったところはその顔であった。紅で荒れていたのだろうと思う。夫人が男に靡きやすかったのにも理由はあったわけで、それが夫人の眞價を人に知らせる方法だったのである。夫人に會っても、好きにならないでいられることはあるかも知れないが、夫人の身體を一人知れば、無我夢中に惚れこまないでいられた。そして、この事は、夫人が私にくれたような情を、誰にでも惜氣もなく常に與えたわけではなかった、ということも證明すると思う。つまり、夫人は見境もなく性急な激しい情慾にとらわれたが、そこには少くも官能と同程度の心情が交っていたのである。そして、夫人の傍で過した甘美な短い期間の間じゅう、私に強い節慾のことを思い合せると、夫人はずいぶん肉感的で色好みではあったが、それでも自分の快樂よりは私の健康を大切にしたいと信じていると思うのである。

二人の仲は侯爵の眼をのがれなかった。そして二人のことを前よりもひやかさなくなったどころではなく、今までよりひどく、私のことをつれない女主人の殉難者、哀れな内氣な戀人のように扱った。二人のことを知られはしないかと氣になるような一語・一笑・一瞥も侯爵の眼からは決してのがれなかった。そして、私よりよく目先の利くラルナージュ夫人から、侯爵はとても人に騙されるような人ではない、ただ氣を利かしているのだ、と聞かされなかったら、私は侯爵をうまく騙した氣でいたかも知れなかった。とにかく、どんな人でも、侯爵ほど人に向って親切な心づかいをしたり、慇懃に振舞ったりすることはできなかったであろう。私に對してですらそうだった。尤も、例の冗談、殊に私が巧く成功してから後の冗談は別であった。侯爵は恐らくその成功の名譽を私に與えてくれていた。そして、私のことを見かけほどのでくの棒ではないと想像していた。それは、言うまでもなく、侯爵の思いが良かったが、なに構うことはない、私は侯爵のその思いが利用した。そして、實際、私の方が有利な立場にあつたので、侯爵の皮肉を平氣で、時には上機嫌で、風に柳と受け流した。時には、ラルナージュ夫人のお仕込みの才知を、夫人の前でひけらかすのが得意で、侯爵の皮肉に負けずにやり返した。私はまるで人がちがったような人間になつてしまつた。

われわれは御馳走の食べられる土地と季節にいた。侯爵の親切な心づかいのお蔭で、何處へ行つてもすばらしい御馳走を食べた。しかし、その親切な心づかいをわれわれの部屋のことにまで及ぼされるのは閉口だった。というのは侯爵は、部屋を取るために、いつも自分の召使を先へやつた。すると、その召使の奴、自分の獨斷か、主人の命令が分らないが、いつもラルナージュ夫人の隣へ侯爵の部屋を取つて、私は家の隅の方へ押しこんだのである。しかし、私は少しもこれにへこたれなかった、このために、二人の密會は益々刺戟の強いものになつた。この甘い生活は五六日ほど續き、この間に私は最も甘美な逸樂に酔つた。少しも苦痛のまじらない純粹の、強烈な逸樂を味わつたのだ。それは、私がそのようにして味わつた最初のそして唯一のものであつた。そして私が悅樂を識らずに死ぬことのなくなつたのは、ラルナージュ夫人のお蔭である、と言うことができる。

私が夫人に抱いた感情は正しく言つて戀愛というものではなかつたかも知れないが、しかし、それは少くも、夫人が私に示した戀愛に對する愛情深い報いだつた、と言わなければならぬ。それは、快樂の中の激しく燃える肉感であり、談話の中の甘美な親密さであつたから、そこには人を無我夢中にさせ享樂を不可能にさせる情熱の狂態はなかつたけれども、情熱の魅力はすべて具わつていた。私は生涯に眞の戀愛はただ一度だけしか感じたことがなかつた。しかも、それはラルナージュ夫人に對してではなかつた。また、私は夫人をヴァラン夫人を愛してはよりには愛さなかつた。しかし、それだからこそ、私は夫人を百層倍も強くわが物としたのであつた。ママさんと一緒の時は、何か悲しいような氣持、何か心がしめつけられるような氣分が内心にあつてそれをなかなか克服できず、そのためにいつでも私の快樂は妨げられた。ママさんをわが物にしたということがうれしいよりも、ママさんを潰したという自責を感じた。これに反して、ラルナージュ夫人と一緒にいる時は、男であることが誇らしく、よろこびと自信をもつて、自分の官能に耽ることができた。相手の官能に與えた印象を自分でも味わつた。私は我を忘れることがなかつたので、自分の勝利を快感と共に得意の氣分で眺めることができた。そのことは私の勝利を二倍にするものであつた。

私は侯爵とは何處で別れたか憶えていない。侯爵はその地方の人だったのである。しかし、とにかくわれわれはモンテラマルへ著く前には二人きりになつていた。それから後は、ラルナージュ夫人は私の轎に小間使を乗せ、私は夫人と二

*1 ヴァランスからセーヌ河沿いに南下して五十キロばかりのところにある町。ラルナージュ夫人の目的地ボン・サン・テスプリまで三十キロあまり。

人で相乗りをすることになった。こういう道中で二人が退屈しなかったことは言うまでもないし、二人が通った地方がどんな有様だったかを話すのはなかなか骨が折れる。モンテリマールでは、夫人は用件のため三日ほど滞留した。この三日の間、夫人は十五分の訪問を一回した時のほかは私のそばを離れなかったが、その訪問の結果、色々煩わしいやな事や、應ずる氣のない招待などが生じた。夫人は都合が悪いという口實を構えたけれど、都合が悪いと言っても、毎日二人だけで、この上もなく美しい土地の、この上もなく美しい空の下を散歩するには事缺かなかつた。あゝ、あの三日間！

私は時としてこの三日間のことを名残おしく思われないわけにいかない。同じような日は再び戻って来なかつたのである。旅の戀は永く續く筈のものではない。別れなければならなくなつた。そして、實を言えば、もう別れてもいい頃だつた。と言っても、飽きが来たとか、飽きそうになつたとかいふのではなく、私は日毎に情を深めていたのだが、しかし、夫人がずいぶん控え目にしていたにも拘らず、私に残されたものは、厚意よりほかのものとはほとんどなかつたからである。^{註43}二人は別れの辛さを再會の計畫でまぎらした。今までの養生法が私の身體に大變よかつたので、これを續けることにしよう、冬になったら、ラルナージュ夫人の監督の下にサン・タンディオール村へ行つて暮そう、ということに話をきめた。夫人が世間に評判を立てられないように事を運ぶまでの間、私はただ五六週間だけモンペリエにゐることになつた。夫人は私の知っていなければならぬこと、言わなければならぬこと、どういふように振舞つたらいいかということ、色々十分に知恵をつけてくれた。それまでは手紙を書き合うこともきめた。私の健康上の注意については、眞面目に多くの言葉を費した。良い醫者に診てもらふように、醫者の戒めにはよく注意するようにと勧めた。そして、醫者の命ずることがどんなに厳しくとも、夫人のそばにいさえすれば、必ず私にそれを守らせて見せると引受けた。その言葉は眞心かも出たものと思つてゐる。なぜなら、夫人は私を愛していたからである。この事については、情愛よりもなお確實な澤山の證據を夫人は私に見せてくれた。夫人は私の旅支度を見て、私が富裕な者でないことを知つてゐた。夫人自身も大して金持ではなかつたけれど、それでも二人が別れる時には、グルノーブルから相當たつぷり持つて来ていたお金を、強いて私に分け與えようとした。そして、それを斷るのに、私は非常に骨を折つた。とうとう私は夫人と別れた。私の心は夫人のことで一杯だつた。夫人の方も、私に對して本當の愛著を抱いてゐたように思われる。私は道中の思い出を何度か新たにしながら終に旅もおわりに近づいた。そして、今度は、良い轎に乗つて、今までより

思うままに、すでに味わつた快樂と、約束された快樂のことを夢想するのが何よりも満足だつた。サン・タンディオール村のことと、そこで待つてゐる魅力のある生活のことしか考へなかつた。ラルナージュ夫人とその周囲のことしか目に見えなかつた。それより他の世界中のことは、私にはもう何物でもなかつた。ママさんのことさえ忘れてしまつた。夫人の住居のこと、近所のこと、附合ひのこと、そのほか暮しむきのことなど、前もつてこちらに教えておこうと思つて話してくれた色々な細かいことを、自分の頭の中で組立ててみよう、私は一生懸命になつた。夫人には一人の娘の子があつて、その子のことを夫人は度々甘い母親らしい口振りで話して聞かせた。十五をすぎたその娘さんは活潑で愛くるしくて、優しい性質だつた。きつとこの娘さんに私は可愛がられる、という約束だつたが、私はその約束を忘れていなくなつた。そして、このラルナージュ嬢がお母さんの好きな風を待遇するかと非常な興味をもつて想像してみた。ボン・サン・テスプリからルムーラン^{註44}まで行く間の私の夢想の材料はそんなものだつた。私はガール橋を見物するように言われていた。私はこの見物をのがさなかつた。すばらしい無花果で朝食を濟ませてから、案内人を備つて、ガール橋を見に行つた。ローマ人の作つたものを見たのは、これが初めてだつた。私はこれを作つた手に相應しいような、ただのローマ人の遺物を見るつもりでいた。ところが、實物は豫想以上のものだつた。こんなことは生涯にただ一度だけだつた。こんな効果を生むのはローマ人の獨壇上であつた。この素朴で氣高い作物を見ていると、私の心は打たれた。殊に、人里離れた所にあつて、靜寂と寂寞のために一層人目を惹き、一層驚歎を強くしただけに、心の打たれた方も激しかったわけである。橋と言われているけれど實は水路橋にすぎなかつた。どういふ力で、あの巨大な石を、石坑から遠くこの場所に運んで来たものか、どういふ力で、一人住まぬこの土地に、數千人の人間を集めたものか、まことに不思議である。私はこの巨大な建造物の三層を歩き廻つたが、もつたない氣がして、土足で踏むことがほとんどできない程だつた。石橋の巨大な穹窿の下で自分の足音が鳴り響くと、これを建造した人々の力強い聲を耳にする氣持がした。私はその宏大さの中に一匹の蟲のように没してしまつた。このように私を卑小なものにしてしまふ反面に、何か魂を高めてくれるものがある心地がした。そして、私は溜息をつきながら、「おれはどうしてローマ人に生れなかつたのだらう」と、自分自身に言うのであつた。私は心を奪われ、深い沈思の中に、數時間をそこにすごした。歸つて来た時も、まだぼんやりと夢を見てい

*1 ボン・サン・テスプリから南へ四十キロあまり。ガール河畔にあり、町はずれに名勝ガール橋がある。住時のローマ水道の一部をなす舊跡。

るようだった。そして、この夢はラルナージュ夫人には好都合なものではなかった。夫人はモンペリエの娘たちには用心するよう氣を配ったが、ガール橋には氣がつかなかった。人は萬事にぬかりなく氣を配ることはできないものである。
ニームでは闘技場を見に行った。これはガール橋より遙かに壯麗な建造物だったが、印象は遙かに薄かった。私の感銘が最初に見たもので盡きてしまったのか、市街の真中にあるこの建造物の位置が、感銘を刺戟するに不適當だったのか、それは分らない。この廣々とした立派な圓形競技場は、不潔な小屋に取巻かれ、さらに不潔な一層小さい家が内部の闘技場を一杯にしていた。このために、全體が不調和な漠然とした印象しか與えず、遺憾と憤懣の念が快樂と驚歎の念を抑えつけてしまふのである。その後、私はヴェローナの圓形競技場を見たことがある。それはニームの圓形競技場と比べると、ずっと小さく、美しさも劣っていたが、できる限りの清潔と整頓をもって管理され保存されていて、その點で一層強く快い印象を受けた。フランス人は何物をも大切にしようと思せず、どんな記念物をも尊敬しない。事を計畫する場合には火のようになるが、それを完成するとか保存するとかはできないのである。^{*}

私はすっかり人が變り、修業を積んだ肉慾もいよいよ目ざめて來たので、或る日のこと、「ボン・ド・リュネル」に足をとどめ、そこに居合せた連中と一緒に御馳走を食べた。この料理屋はヨーロッパ隨一と言われていたが、當時は實際それだけの價値があった。店を經營していた人々は店の絶好の位置を旨く利用して、食糧は豊富でしかもいつも精選してあった。野原の真中のかけ離れた一軒家に、海魚・川魚・上等の鳥獸・いい葡萄酒などが出る御馳走があつて、しかも、貴人や富豪のところではなければ受けられない行き届いたサービス、その上、これが全部で三十五スーというのだから、まったく夢のような話であつた。しかし、「ボン・ド・リュネル」もこの調子を長く續けていかなかった。むやみに評判をふりまきすぎて、おしまいはとうとう評判を落してしまつた。

道中のあいだ私は病氣のことを忘れていた。モンペリエに著くと、それを思い出した。氣鬱症はすっかり治つていたが、他の病氣はみんなまだ残つていた。馴れっこになつてゐるから、あまり氣にはしなかつたが、それでも、急にこんな病氣に取りつかれた人があつたら、自分はもう死ぬと思ひこんでしまふほどの病氣だつた。實際、私の病氣は痛いとか苦しいとかいうより、氣味悪く恐ろしい病氣であつて、肉體はそのために破滅を宣告されてはいるが、その肉體よりもむしろ精神の方を一層苦しめるものだつた。従つて、激しい情熱に氣を取られていた間は、自分の病氣のことは考えなかつた。

た。ところが、病狀は決して空想のものではなかつたから、氣が鎮まるにつれてそれが感じられた。そこで、ラルナージュ夫人の勸告や自分の旅行の目的のことを眞面目に考へてみた。私は最も有名な、老練な醫師たち、殊にフィーズ先生の診察を受けに行った。それから、念入りにも、或る醫師の家に下宿をとつた。その人はフィッツ・モリスというアイルランド人で、自分の家で醫學生を大勢賄つていた。そして、病人にとつて好都合なことには、そこに下宿しても、フィッツ・モリス先生は適宜な食費を取るだけで満足して、醫師としての醫療費を下宿人から取らないことだつた。先生はフィーズ侯爵の處方の調劑と私の健康の監視を引受けてくれた。養生法に關する限りでは、この任務は大變よく遂行された。つまり、そこに下宿していれば、消化不良などは罹らなかつたからである。そして、私はもともとそういう種類の不自由にはあまり敏感ではなかつたけれども、比較する對象がごく手近なところにあつたために、時には、フィッツ・モリス先生よりトリニャン侯爵の方が旨いものを食わせる、と祕かに思わざるを得なかつた。とは言え、飢え死をするわけではなし、同宿の若者たちも非常に愉快だつたから、こういう生活法は本當に私のためになつて、例の憂鬱にまた落ちこむようなことはなくなつた。午前中は藥を飲んだり、ラルナージュ夫人に手紙を書いたりして過ごした。藥は何だか得體の知れない水で、多分ヴァルの鑛泉だ。たのらうと思う。手紙はあれからずっとやりとりしてゐて、ルソオが友人のダディングの手紙を取次ぐ役目を負つていた。お午には若い同宿人の誰かとカマルグをひとまわりしに行く。同宿人の連中はみんな非常に氣持のいい人々ばかりだつた。一同集合して、午飯を食ひに行く。食後には大部分の者は夕方まで大切な用で忙しい。大切な用というのは、郊外へ行って、打球戲を二三ゲームやつて、おやつを賭けるわけであつた。私には打球戲はできなかつた。力もないし腕もなかつた。それでも賭けることは賭けた。そして、賭につられて凸凹の石ころ道を、競技者や球を追つて歩きまわり、氣持のいい健康な運動をやつて、これがすっかり好きになつてしまつた。一同は町はずれの或る料理屋でおやつを食べた。こういうおやつが楽しかつたことは言うまでもないが、料理屋の給仕女たちが美人は

*1 ルムーランの南西二十キロにある都市。此處にはローマ時代の圓形闘技場その他の遺跡が多。
*2 舊跡に當むイタリヤの町。
*3 一八一〇年頃法令によつてニームの圓形競技場内の不潔な小屋は取除かれた。
*4 リュネルはモンペリエの手前二十五キロほどの所にある小さい町。この町にある料理屋の名。
*5 モンペリエ醫科大學教授。

かりだったのに、お行儀のいいおやつをした、ということをつけ加えておこらう。フィッツ・モリス先生は打球戯の名人だったから、われわれの會長になっていた。學生というものは評判の悪いものだが、それにも拘らず、これらの若者たちの中には、同じ数の大人たちの中に容易に見出すことのできる以上の道徳的觀念と禮節とがあった、と私は言うことができる。みんなは放逸というよりは騒々しい方であり、放縱というよりは賑やかな方だった。私は自由な生活だったから、すぐに夢中になるから、このような生活がいつまでも続くことより他の望みはなかったのである。學生の仲間には數人のアイランド人がいたから、この連中から英語を少しばかり習おうと努めた。サン・タンディオール村へ行く日も近づいていたから、その時の用心のためだった。ラルナージュ夫人は手紙をくれるたびにそれを催促し、私もそれに従うつもりでいた。醫師たちは私の病氣の正體が少しも分らないから、私を氣病みのように考えていた。そしてそのつもりで、さるさの前薬とか鑛泉とか牛乳とかでお茶を濁していた。醫者とか哲學者とかは、神學者とは全く反對で、自分たちに説明のつく事しか眞實だと認めず、自分たちの知識を可能の尺度とする。この先生方は私の病氣については何も識るところがなかった。従って、私は病氣でないということになつたわけである。博士先生方があらゆることを知っていないなど、どうして考えることができよう。先生方が私を樂しませ、私の金を費わせることしか考えないことに氣のついた私は、サン・タンディオール村のお醫者代りのあの人も、そんなことなら先生たちと同じように上手にできる、しかも、もっと樂しくしてくれるだろうと判斷して、この人の方を選ぶことに決心し、こういう立派な分別から私はモンペリエを去つたのである。

私はこの町に六週間から二カ月ぐらゐの間滞在して、十一月の末頃に出發した。この町では十二三ルイのお金を使ったけれど、健康上にも學習上にも少しの利益も得なかつた。尤も、フィッツ・モリス先生について解剖學の講義を聴きはじめたが、解剖される死體の臭氣がとても辛抱できず、やめてしまわなければならなかつた。

決心はしたけれども、心の中では何となく心配で、ボン・サン・テスプリの方へはどんどん進んで行くのだが、よく考えてみた。そこはサン・タンディオール村へ行く道であると共にまたシャンペリーへも通じたところでもあつたのである。ママさんの思い出、ラルナージュ夫人よりも頻繁ではなかつたが、ママさんからの手紙、そんなものが、心の中に、前の道中の間ずっと抑えつけていた良心の苛責を目ざませた。歸りの道中では、この苛責が非常に激しくなつて、歡樂の戀を

比べてみて、理性の聲だけを聴くような氣分に私をさせてしまつた。まず、これからまた色男役をやるわけだが、やつたところで前ほど旨くは行くまい。サン・タンディオール村に、イギリスに行つたことのある人、イギリス人を知っている人、英語の分る人などがただの一人でもいたら、私の化の皮は剥けてしまふだろう。ラルナージュ夫人の一家は私に反感を持つようになるだろう。そして、あまりいい待遇をしなくなるだろう。夫人の娘さんのことは、心にもなく必要以上に氣にかかるのだが、何だか私を不安にさせた。その娘さんが好きになつたら、と思つてと身體が顫えた。その恐れだけで、もう半分以上私の決心が固まつてしまつた。おれはラルナージュ夫人の好意に報いるために、夫人の娘さんを墮落させようとしているのだろうか。この上もなく憎むべき關係を結び、夫人の家に紛争や不名譽や醜聞や地獄を持ち込もうとしているのだろうか。そう考えると私はぞつとした。若しそのような怪しからぬ氣持が萌して來たら、自分と戦い、自分を征服しようとする決心が固く決心した。しかし、どうして態々そういう戦いに自分の身をさらす必要があるのだろうか。自分がもう堪能した母親と一緒に暮らして、娘の方には自分の意中を打明けようとする必要はないでただ心を燃やしている。何という淺ましい立場だろう。もう前からその最大の力を汲みつくしてしまつてゐる快樂を得るために、そういう立場をわざわざ求め、不幸や恥辱や苛責に身をさらす必要が何處にあるだろう。私の氣まぐれも最初ほどはもう強くなつて來ていたのである。快樂の味はまだ残っていたけれど、情熱はもうなくなつていた。これには、自分の地位、爲すべきこと、善良で寛大なママさんのことなどに關聯した色々な反省が混つていた。ママさんは前から借金を負つていた上に私の無闇な浪費のためによい借金が重なり、私のために盡してくれているのに、それを自分は不埒にも裏切つたのだ。この自責が厳しくなつて、終にはとうとう勝つてしまつた。サン・テスプリに近づくと従つて、サン・タンディオール村へは停らず、眞直ぐに通じすぎる決心を固めた。私はこの決心を敢然と實行した。實を言えば、いくらか歎息は出たけれども、しかし、「おれは立派なことをやった。おれは快樂より義務を選ぶことを知つてゐるのだ」と自分自身に言うのは、生涯に初めて味つた内心の満足であつた。これは私が學問をしたことから得た最初のそして眞の賜であつた。反省すること、比較すること、比較することを教えてくれたのが學問だったのである。しばらく前から、私は非常に純粹な主義方針を採用してゐたし、また節制と道徳の法則を自身のために設けて、これに従うことを誇りとしてゐたから、こんなに早く、こんなに大威張りで、自家

撞著をしたり自身の主義方針に背いたりする恥かしさは、肉の悦樂に打ち克つたのであった。私の決心には、道徳心も興って力があつたが、それと同程度の自尊心も恐らくあつたのである。しかし、この自尊心は道徳心そのものではなかつたとしても、非常によく似た効力を發揮するものであるから、取り違えても許さるべきである。

善行の利益の一は、精神を高揚し、さらにより善き行爲に精神を指向するところにある。人間は非常に弱いものであるから、悪事を犯そうとして思いとどまつた事でも、これを善行の中に數えなければならぬ。私は決心を固めるや否や忽ち別の人間になつた。というよりむしろ、一瞬の陶酔のために姿を没していた前のような人間に立ち戻つた、と言ふべきであらう。立派な感情と立派な決心に満ち、自分の過失を償おうという立派な意志を抱いて、道を續けた。これから先は自分の行爲を道徳の掟に律し、母親の中の最良の母親たるママさんのために全身を犠牲とし、自分の抱く愛著と同じほどの忠實をママさんに捧げ、自分の義務の愛のほかの一切の愛には耳を藉さぬ、こういうことしかもう考えなかつた。噫、私がこうして再び心から善に立ち戻つたことは、私に他の運命を約束してくれるように思われた。ところが、私の運命はもうきめられていて、既にはじまつていたのである。そして、私の心が正しくまた善良な事柄への愛に満たされ、人生の中に潔白と幸福としか見ていなかった時、私は自分の不幸の長い連鎖をその後には引きずることになつていたあの悼むべき瞬間に觸れていたのであつた。

早く歸り著きたいと思つていたので、思いのほか道がはかどつた。私はヴァランスから、ママさんへ自分の著く日と時間とを知らせておいた。豫定より半日ほど餘裕ができたので、前に知らせた時刻に丁度著くために、シャバリヤン^{*1}での時間だけ滞在していた。ママさんに再會するよろこびを十二分に味わいたいと思つていたのである。そのよろこびに、待たれる身のよろこびを添えるために、時刻を少しばかり遅らせる方がいいと思つたほどだつた。この注意は今までいつも旨く行つた。家へ歸ると一寸したお祝いのような騒ぎになるのだつた。今度もまたそういうことになるだろうと秘かに期待していた。そして、私には感激的なそのような歓迎は、苦心して取りはからうだけの價値があつた。

このようにして私は時間ぎりぎりに到着した。遠くの方から、若しやママさんが道に出ているのではないかと思つて眼を配つた。近づくにつれて心臓の鼓動は益々はげしくなつた。市内で馬車を降りたので、著いた時は息もはずんでいた。庭にも戸口にも窓にも、誰の姿も見えない。不安心になりだして、何か間違ひでもあつたのではないかと心配する。入

る。ひっそりしている。作男たちが臺所でおやつを食べていた。そのほかには何の支度もない。下女が私の姿を見て、びっくりして出て來た。私が著くことになつていたので知らなかつたのだ。二階へ上る。とうとうなつかしいママさんを見つけた。あれほど深く強く清く愛したママさんを。駆けよつて、足元へ身を投げる。

「まア！ お歸りなさい」と、ママさんは私を抱きながら、「途中はどうだつたの。身體はどうなの」と、言つた。

この應待に私は少し呆れた。手紙を受取らなかつたのですか、と訊いてみた。受取つた、と言つた。

「受取らなかつたのかと思つたところでしたよ」と、私は言つた。これで説明は濟んだわけだつた。ママさんと一緒に一人の若い男がいた。旅に出る前に家でその男に會つたことがあるので顔は見知つていた。しかし、今度はこの家に住みついていらしく見えた。實際にそうだつた。つまり私は自分の地位を取られてゐることが分つたのである。

その青年はヴォー州の者だつた。^{*2}父はヴァインツェンリードという名前で、シヨン城^{*3}の宰番、或いはその看守長と自稱してゐた。この看守長殿の御令息は鬘師^{カツシ}の徒弟で、ヴァラン夫人にお目見得したのは、この職で世間を歩いてゐた時のことだつた。夫人はどんな旅の者にも、とりわけ同じ國の者には、親切なもてなしをするのだが、この男にもそうした。金髪の、味もそつけない大男で、容姿は相當なものだが、顔つき、心ばえは平凡、二枚目のレアンドル^{*4}みたいな口を利いた。長々と惚け話をやつたが、それを聞いていると、この男の職相應の言葉つきや趣味の程度が分つた。一緒に寝た上流夫人は數知れぬほどあるから、半分ぐらいしか名前は憶えていない、と言つた。どんな別嬪の奥さんでも、私がその人の髪を結ばば、きつと旦那の鼻を明かしてやつたもんだ、なぞとも言つた。虚榮心が強くて、馬鹿で、無學で、横著。要するに浮世の申し子のような男だつた。私の留守中の後釜、歸つて來てからの相棒は、こんな男だつた。

*1 シャンペリーの手前十キロほどの小村。

*2 到著の日時は正確には不明だが、恐らく一七三八年の二月初め頃と推定されている。

*3 ジャン・サミュエル・ロドルフ・ヴァインツェンリードという。一七一六年生れであるから、ルソオより四歳年少、この時は二十二歳だつた。父はヴォー州の大官だつた。

*4 ヴァヴェーから一里半ばかり、ジュネーヴ湖上の岩礁の上に建てられた古城で、古來多くの著名な囚人が幽閉されていた。

*5 イタリヤ喜劇の典型人物で二枚目の名前。

あゝ、若しも此の世の束縛を脱した魂に、人間どものうちに起ることが、永遠の光の中から見えるものならば、親しくもまた尊い亡き人よ、私が自分の過失に對すると同様にあなたの過失に對しても假借せず、この兩者を共にわが讀者の面前に暴露するとしても、許して頂きたい。私は自分に對してと同様に、あなたに對しても眞實であらねばならないし、またそれを望むのです。それでもなお、あなたの方が私より遙かに被害は少いでしよう。あゝ、あなたの愛すべき優しい性格、汲めども盡きぬ心の暖かさ、率直さ、そのほか一切のあなたの優れた美德は、いかほどあなたの弱點を償って餘りがあるでしょう。あなたの理性のみから來た過誤を弱點という名で呼び得るものとすれば、あなたには色々な過失があった。しかし、悪徳はなかった。あなたの行爲は咎むべきであつた。しかし、あなたの心は常に純潔であつたのです。

この新來者は始終山のようにある細々した仕事については、熱心で勤勉で几帳面な風を見せた。作男たちの取締になつてた。私とまるで反對で、ひどく騒々しい男だから、畑・秣場・材木置場・厩・鶏舎などでその姿は一度に見られ、殊にその聲は何處でも一度に聞かれた。この男が手を著けないのは花園だけだつたというのも、その仕事之餘りに穏やかで、少しも音が立たないからだつた。最大の楽しみは荷積とか車ひきとか、材木を鋸で切ったり、割ったりすることだつた。いつも斧や鶴嘴を手に行っている姿が見られた。駆け廻ったり、物を叩いたり、大聲にわめいたりする聲が聞えた。何人前の仕事をしてたのか私には分らなかつたが、音だけはいつも十人前か十二人前ぐらゐは立ててた。この喧噪が可哀そうな私のママさんをすっかり威壓したわけで、ママさんはこの青年を自分の仕事の上の寶のように思ひこんだ。そして、この寶を自分の手もとから離したくないと思つて、適當と思われるあらゆる手段を用いた。そこで自分に一番自信のある例の手段を忘れなかつたのである。

私の心、少しも變ることのない最も眞實な私の心の動き、殊にこの時私をママさんのところへ連れ戻した心の動きは、讀者もすでに識つておられる筈である。私は全身全靈を何と突然にも完全に動顛させられたことだろう。私の立場になつてみれば、その氣持は分つて貰えると思う。われとわが胸に描いていた至幸至福の將來が、一瞬のうちに永遠に消え去るのを見たのである。あれほど愛情をこめて愛撫していた甘い夢は、すべて消滅してしまつた。そして、少年の頃から自分の生存をママさんのそれと共にしか見ることのできなかつた私は、初めてただ一人の自分の姿を見たのである。それは恐ろしい瞬間だつた。これに續く瞬間は常に陰慘なものとなつてしまつた。私はまだ若かつた。しかし、青春に生命を與え

るあの甘い享樂と希望の感情は、永久に私から去つたのである。それ以來、有情のものは半ば死んだ。自分の前には、もはや索然たる人生の物悲しい殘骸しか見えなくなつた。そして、たとえ時として幸福の影がなお私の欲望を掠めるようなことがあつても、その幸福はもはや私に適當した幸福ではなかつた。その幸福を手に入れても、自分は本當に幸福にはなれまい、と感じるのである。

私はひどく間が抜けてもいたし、また自信にも満ちていたから、この新來者がママさんに向つていかにも馴々しい口を利いても、ママさんの例の氣さくな性質が、どんな人でも慕い寄せるその結果だろうと思つてた。だから、若しママさん自身も口から聞かなかつたら、その馴々しさの本當の原因を怪しもうともしなかつたであらう。ところが、ママさんは、いかにも率直にそのことを臆するところなく私に打明けた。その率直さは、若し私の心が怒りに轉ずることのできる心だつたら、私を益々怒らしたかも知れなかつたほどのものだつた。ママさんはこれをごく單純なことと考えていて、家の中のことを私が怠つてたからだだと私を咎め、私が度々家を不在にしたからだと言いたつた。それは、まるでママさんが、少しの間も私の不在中の空聞を守つていられない性質の女であるような口ぶりだつた。私は悲しみに心を締めつけられて、ママさんに向つてこう言つた。

「あゝ、ママさん。ずいぶんひどいことを僕に教えて下さるものですね。それが僕の愛情への返報なのです。僕が僕を何度となく救つて下さつたのは、僕の生命を大切なものにしてくれたものを、僕から奪い取るためだつたのですか。僕は死にます。でも、あなたはきつと後になつて、僕のことをいとしく思いますよ」

ママさんはこちらが呆れるほど平氣で、あなたは子供だ、こんな事で人は死ぬものではない、あなたは何も失つてはいないではないか、二人はやはり前の通りの仲良しだ、あらゆる意味で親密なのだ、あなたに對するわたしの情愛は死ぬまで減らないし終りもしない、と答えた。要するに、私の權利は一つ残らず前の通りであつて、それをもう一人の男に預けてやつても、そのために私の奪われるものは少しもない、ということ飲み込ませたのであつた。

*1 一七六二年に故人となつたヴァラン夫人に向つて言つてゐる言葉。

*2 異本。「……」のです。善悪を秤にかけて、公平に量つて貰えるものならば、他のどんな女性でも、若しその内密の生活が暴露されれば、あなたと曰れを敢て比較しようと思つるものはありません。

ママさんに對する私の感情の清純さ、眞實さ、力強さ、私の魂の誠實さ、正直さ、そんなものがこの瞬間ほど自分によく感じられたことはなかった。私はママさんの足元へ駆け寄り、涙を瀧のように流しながら、膝をしっかりと抱きしめた。「いいえ、ママさん」と、私は興奮して、「僕はあなたを愛しすぎるほど愛していますから、あなたを辱しめることなんかできません。僕はあなたを大切に自分のものとしていますから、人に頒けることなんかできません。あなたを自分のものにしたとき、僕には後悔が湧きました。それは僕の愛情と一緒に育って來ました。それほどの後悔をしてまでも、あなたを自分のものにしておくことは、もうできなくなりました。僕はいつまでもあなたを崇拜しています。どうぞ、それに相應しい人になって下さい。あなたを自分のものにするより、尊敬している方が僕には一層必要なのです。ママさん、僕はあなたをあなたに譲っているのです。二人の心を結びつけることに、僕の快樂をみんな犠牲にしてしまいます。快樂を味わって愛するものを漬すぐらいなら、死んでしまった方がましです」と、言った。

私はこの決心を確固不動に守り通した。それは、敢て言えば、その決心を私にさせた確固たる感情にも相應しいものだった。この時以後の私は、この愛しいつくしんだママさんを、實の子の眼をもって見るだけであつた。そして、ここに特に言っておかなければならないが、私の決心は、自分にも十分氣がついたように、ママさんのそれとない承認は得なかつたけれど、しかし、ママさんとしては、誘惑的な言葉とか愛撫とか、また女が身を委せずに使つて滅多に失敗することのない例の巧みな手管とかいうものを用いて、この決心を醸えさせようとはしなかつたのである。私はママさんとは別の運命をたどらなければならぬようになったが、それがどんなものか想像してみることはできなかった。やがて極端から極端へ走つて、その運命をすべてママさんのうちに求めた。すべてを完全にママさんのうちに求めようとしたために、終にはほとんど自分自身を忘れるようになった。どんな犠牲を拂つても、幸福なママさんを見ていたいという強烈な慾望は、私のすべての愛情を吸い取つた。ママさんは私の幸福を自分の幸福と別物にしようとしたが、それは駄目だった。相手がどう考えようと、私はママさんの幸福を自分の幸福と見た。

このようにして、私の心の奥底にあつた美德の種子は、私の不幸と共に芽ぐみはじめた。その美德は學問によつて培われ、花を開くためには逆境という酸醜素を待つばかりだったのである。まことに公正無私なこのような覺悟から第一に實つたものは、自分の地位を奪つた男に對するあらゆる憎悪と羨望の情を、自分の心の中から、拭い去ることだった。實際に

私はそれを望んだ。そして、この青年と親密になり、この青年を立派な人間に仕立て上げ、その教育のために骨を折り、自らの幸福を思い知らせてやり、できればその幸福に相應しい人間にしてやる、一言で言えば、これと同じような場合に、かつてアネが私にくれた通りのことを、私がこの青年にしてやる、と眞面目に思つたのである。ところが、前の場合とは人物に逕庭があつた。私はアネと比べて柔和なことを學問のあることは優つていたが、アネのような冷靜と決斷がなく、また盲くやるにはどうしても必要な迫力が缺けていた。相手の青年の方は、また、アネが私に見出したような色々な長所、つまり柔順さとか愛情とか感謝の氣持、殊に自分は人から面倒を見て貰わなければならないという心掛と、面倒を見て貰つてそれを役に立てようという強い慾望、そんなものが缺けていた。今度の場合は足りないものばかりだった。私が仕立て上げてやる、と思う相手は、私のことを無駄事しか喋らない煩さい物識りだらけにしか考へなかつた。その上、自分はこの家になくてはならない重要な人物だと自惚れていた。そして、自分の立てる物音を尺度にして、おれは大した役に立っているのだと思ひこんでいたから、私の古本などよりは自分の斧や鶴嘴を遙かに有用なものを見ていた。考へ方によつては、それも間違いではなかつたが、その考へを土臺にして、はたの者が見ると可笑しくてたまらないほどの様子ぶつた風をしていた。百姓を相手にすると、まるで田舎の郷士のように氣取つた。やがて、私に對してもそういう風をするようになり、おしまいはママさんに向つてさえそうだった。ヴィンツェンリドという名は、あまり立派らしくないと思つたのであろう、その名をやめて、クルティエユ氏という名に變えた。そして、その後、シャンベリーや、この男の結婚したモーリエンヌ地方では、このクルティエユという名で人に知られたのであつた。

とうとう、この大した人物が威勢を張つて、家ではこの男がすべてとなり、私はゼロになつた。私が運悪くこの男の御機嫌を損じるようなことがあると、叱られるのは私ではなくママさんだったので、ママさんをそんなひどい目に遭わせたくなふと思つて、私は相手の望むことにはすべて柔順に従つた。そして、この男が最も得意でやつた仕事は薪割りだつたが、これをしていて、いつも私はその傍にいて、見事な仕事ぶりを手を束ねて眺めていたり、靜かに感服していたりしなければならなかつた。しかし、この青年は根から性質の悪い男でもなく、ママさんを愛していた。というのは、ママさんは愛さずにはいられない人だからであつた。また私に對して反感を持つてもいなかつた。そして、例の血氣にまかせ

て働き廻っている合間にこちらから話しかけると、時には素直に言うことを聴いて、自分がまったく馬鹿者にすぎないことを率直に認めることもあった。その口の下から、相變らず新たに馬鹿をやるのである。その上、この男の知識は狭く、趣味も低劣だったから、理を盡して話しても難かしいし、一緒にいても少しも面白くなかった。この男は、魅力に満ちた婦人を自分のものにしてにしている上に、赤毛の、歯抜けの婆さん女中をつまみ喰いしていた。ママさんはこの女中が胸糞の悪くなるほど嫌いだったが、辛抱してその厭らしいサーピスを我慢していた。私はこの新しい色事に気がついて、憤激のために苛立った。しかし、さらにもう一つ別のことにも気がついて、こんな色事よりもひどく心に悩むようになった。それは、今まで起ったどんな事よりもひどく、私を深刻な失望の中に投げ入れたのである。ママさんが私に對し冷淡になったのであった。

私が自らに課し、またママさんも承認したらしくしていた禁慾は、女としては、どんな顔つきをしていようと、内心では容赦していられない事柄の一つである。それは、そのために女自身が禁慾していなければならぬ結果になるから、というよりも、そこに女を所有することについての男の無關心が見られるからである。最も思慮のある、最も哲學的な、最も肉慾に恬淡な婦人を考えてみたまえ。その婦人に對して、男が、しかも、その婦人が全然氣にもとめていないような男が、何かこの上もなく赦し難い罪を犯すことができるものとすれば、それは、男がその婦人を享樂できる場合でも、何も手出しをしないでいる、ということである。この事では例外がなかったらしい。というのは、ママさんのあれほど自然な、あれほど強かった同情心が、ひとえに美德と愛著と尊敬から來た禁慾のために、薄らいで來たからである。今まではいつも私の心のこの上のない甘美な享樂を作りなしていた心と心の親密さは、その時以後はもはやママさんのうちには見られなくなった。ママさんは、新來者のことについて何か苦情を言う時のほかは、もう私に心を打明けようなこともなくなつた。二人が仲良くやっている時には、私とその話に加わることとはほとんどなかった。そのうち、ママさんは次第に私を仲間はずれにする態度を取るようになった。私がいればママさんも氣持がよさそうだったが、私がいることが是非必要というわけではなくなった。幾日もママさんの顔を見ずにも、向うでは氣にも留めなかったであらう。

かつては私はこの家の中心であり、この家で、言わば人よりも倍の生活をしていたのに、今はその同じ家について、いつとはなしに獨り孤^{さび}しい自分自身を感じた。私は次第に、家の中で行われていることから、家に住んでいる人々から

さえも、自分を引離す習慣がついた。そして、不斷の苦惱を紛らすために、本を携えて部屋に閉じこもったり、林の中へ入って、溜息をつき、心ゆくまで泣いた。こうした生活は、やがてとても耐えきれなくなった。自分にあれほど大切だった婦人の、身體は傍らにあって心は遠く離れているということが、自分の悩みを咬むのだ、その人の姿さえ見えなくなれば、こんなにひどく別離の悲しみを味わわなくて済むのだ、と感じた。そこで、ママさんの家を出る計畫を立て、そのことを言ってみた。すると、ママさんは反對するどころか、却って私の計畫に力を添えてくれた。グルノーブルにママさんの知人でデイバン夫人という人があって、その人の夫はリヨンの裁判長マブリ氏の友人であった。このデイバン^{*1}氏がマブリ氏の子息たちの教育を私に申し入れて來た。私はこれを承諾した。そして、リヨンへ向けて出發することになったが、今までだったら、別れることを考えただけでも、二人とも死ぬほどの悲しみを感じたのに、その時は、いよいよ別れることになつても、名残おしがられることもなかったし、名残おしいと思うこともほとんどなかった。

私は家庭教師として必要な知識は大抵備えていた。しかも、その才能もあるものと信じていた。マブリ氏の家で過した一カ年の間に、この思いがいがすっかり分明した。生れつきの柔和な性質だったから、時々癩癩の暴風雨を起すことがなかったら、この職に適していたと思う。萬事が順調に行き、骨身を惜しまぬ自分の注意や苦勞が成果を擧げている間は、私はまるで天使のようだった。ところが、一たん事がちぐはぐになると、悪魔になった。教え子の息子たちが言うことを理解しないと、私は無茶をやった。若し悪いことでもすると、殺してしまつたかも知れなかった。これは子供たちに知識を授け、子供たちを賢明にする道ではなかった。子供は二人いて非常に性質がちがっていた。一人はサント・マリイという八歳の男の子で、可愛らしい顔をして、なかなか利發で元氣がよく、そそっかしくて剽輕な悪戯坊主だが、悪氣はなかった。弟のコンディヤックという子は、まるで白痴のようならくら者で、驛馬のように強情で、何一つ覺えることができなかった。こういう二人の小僧に扱まれた私の仕事は、なかなか面倒なものであったことはお察しの通りである。それ

*1 原文にはデイバン氏 M. Deybens とあるがデイブー氏 M. Deybens 或はデイベン氏 D'Eybens である。

*2 一七四〇年四月の末頃であつた。五月一日に俸給四百リヴァルでマブリ家へ入つた。

*3 「弟のコンディヤックという子は」の代りに、異本では「弟は、その後有名になつた伯父と同名のコンディヤックという名で」となつてゐる。この少年の伯父が第七巻に出て來るコンディヤック師で、後にルソオと親交を結んだ哲學者である。

でも、忍耐と冷静をもってすれば、恐らく成功しただろうと思う。ところが、その両方とも持ち合せていない私は、何一つ旨く行かず、教え子たちは非常に悪くなってしまった。私は勤勉さには缺けるところがなかったが、心の平衡、殊に慎重さに缺けていた。子供たちに對しては三つの武器しか用いることを知らなかった。つまり、感情と理窟と憤怒の三つであつて、これは兒童に對して常に無益であり、屢々有害なものである。時には、サント・マリーを相手に、心を昂ぶらせ、おしまいは泣いてしまうことがあつた。子供といふものが、心の本當の感動に動かされ易いものと思ひこんで、相手を感動させようと考へたのである。また時には、サント・マリーを相手に、こちらの言うことが分ると思ひこんで、一生懸命に理窟をならべ立てたこともあつた。そして、この子が時々ひどく氣の利いた議論をしかけて來たりすることがあつたので、こいつはなかなかの理窟屋だから物の理非もよく分るのだろう、などと本氣に信じこんだりした。弟のコンデイヤックの方は、これよりまだ厄介だつた。何も分らず、何も返事をせず、何事にも感じがなく、何と言つても挺でも動かないという強情さで、おしまいはこちらを怒らせてしまうから、そうなれば向うの勝であつた。私が怒つてしまえば、向うの方が私より利口になつて、私の方が子供みたいになつた。自分の缺點がみんなよく分つたし、また感じられもした。私は教え子たちの精神状態を研究し、それを非常によく洞察していたから、ただの一度でも相手の奸策に騙されたことはなかつたと思つてゐる。しかし、藥の使い方も知らずに、病氣ばかり知つていても何の役に立つだろう。一切がよく分つていながら、何一つ豫防もできず、何一つ旨く行かず、自分のしたことは何から何まで、正にしてはならないことばかりであつた。

教え子に對してもそうだが、自分についてもやはり旨くいかなくつた。私はデイバン夫人からマブリ夫人へ紹介され、行儀作法を仕込んで、上流社會の品格を備へさせるようにとマブリ夫人へ頼んであつた。マブリ夫人はこの點にいくらか意を注ぎ、家のお客様の接待の仕方などをみこむように望んだ。ところが、私のやり方がひどく不器用で、はにかみ屋の上に阿呆と來てゐるので、夫人は愛想をつかして、それっきり取り合はなくなつた。そうされても、私は、例の癖で、やはり夫人に戀心を覺えた。それをおもてにも出したので、おしまいは先方でも氣がついたが、私は思ひきつて戀を打ち明けるとはしなかつた。夫人は自分から言い出すような性質の人ではなかつた。そして、こちらはせいぜい色眼をつかつたり、溜息を洩らしたりするだけだつたが、それも到底望みが達せられそうにないことが分つたので、やがて厭になつてしまつた。

ママさんの家にいた間に、私の手癖はすっかり治つてゐた。すべてが自分のものだつたから、盜むものがなかつたわけである。その上、自分が守ることにしてゐた立派な主義は、それ以來、私をそのような低劣な行爲から超越させておくべきものだつた。そして、その後の私が通常は超然としてゐたことには間違ひない。しかし、その根を斷つてしまつてゐても、誘惑に勝つ術は學んでゐなかつた。だから、子供の頃と同じ慾望に驅られると、同じ盜みをするかも知れない恐れが多分にあつた。マブリ氏の家でその證據が示された。私のまわりには盜みやすい色々な小さいものが澤山あつたが、そんなものには眼もくれなかつた。ただ、アルポア製の或る旨い白葡萄酒がほしくなつた。その二三杯を時々食事の時に飲んだことがあつて、すっかり口ざわりがよくなつてしまつたのである。この葡萄酒は少し濁つてゐた。私は葡萄酒の澄まし方を知つてゐるような氣がしてゐて、それを自慢した。葡萄酒が私に預けられた。私はそれを澄まして却つて悪くした。しかし、悪くなつたのは見た目だけのことだ。飲んでみれば相變らず旨かつた。そういう機會に、私は二三本の葡萄酒を失敬して、自分の部屋に引込み、ゆるゆると一杯やつた。生憎なことに、私は何か食べないと飲めないちだつた。パンを手に入れるには、どうすればいいだろうか。貯えておくことはできなかつた。下男を買いに行くと、すぐに見つけてしまふし、しかも主人には恥をかかすことにもなる。といつて、自分でパンを買いに行くのは、一寸その勇氣がない。佩刀を帯びた立派な紳士たるものが、一片のパンを買いにパン屋へなぞ出かけられようか。そこで、とうとう或る立派な女王様の次善の策といふのを思ひだした。それは、百姓たちが、食ふパンもないといふのを聞いた女王様が「それでは、パン菓子でも食べたらよからう」と、お答へになつたといふ話である。しかし、そのパン菓子でさえ、手に入れるには、どんなに骨を折つたことだつたらう。その目的でただ一人家を出た私は、時には町じゆりを歩きまわり、何處かの店へ入るまでには、三十軒の菓子屋の前を素通りした。店には人が一人だけで、しかもその顔つきがひどく氣に入らなければ、鬨を跨ぐ氣にならなかつた。しかし、こうして一度貴重なパン菓子を手に入れ、自分の部屋にとじこもつて、戸棚の奥から酒瓶を取り出して來れば、あとは小説を讀みながら、實に楽しく獨酌で一杯やるわけであつた。このように、差し向いの會食の代りに、一人で食ひながら讀むといふのは昔からずっと私の最も好むところである。私に缺けてゐる社交の代りなのであ

*1 異本。「わたしはパン菓子を買ひました」。

る。本の一頁と菓子的一片を交互に貪り食うわけである。本が私と會食しているようなものであった。

私はだらしのない人間でもなかったし、放蕩な者でもなく、今までに泥酔したことは一度もない。それだから、私の一寸した盗みは、それほど無鐵砲にはやらなかったのだが、それでも事が露れた。空瓶が露見のものになったのである。しかし、誰もこのことを素振りに現わさなかった。ただ、私はもう酒庫を自分の自由にはできなくなった。こういうことにつけても、マブリ氏は誠實にまた慎重に事を計った。この人は、非常な粹人で、職掌柄なかなか厳格な外見をしていたが、その外見の下には、本當に柔和な性格と、稀に見る温い心があった。理非をよく辨え、公平な人で、乘馬憲兵隊の將校にはまさかと思われるほどの非常な人情家でもあった。私はこの人の寛大な氣持を感じて、段々と惹かれるようになった。そういうことがなくても、この人の家には永くいたのだが、そのために滞在は益々長びいたわけだった。しかし、とうとう、自分に不適當な職業と、少しも楽しくない非常に窮屈な地位とが厭になつて、少しも骨身を惜しまずに働いた一年間の試みの後に、教え子たちのもとを立ち去ることに心をきめた。自分にはとてもこの子たちを立派に教育できないと分つたからである。このことはマブリ氏自身も私と同じ見込だった。しかし、向うから言ひ出されるのを待つていたら、いつまでたってもマブリ氏は私に暇を出すとは言わなかつた。思つては、この上もなく立派な計畫を胸に抱き、それを實行に移したいと心を燃やした。一切を見捨て、一切を放擲して、出發する。飛ぶように行く。少年時代と同じあの

私の境遇を一層たまらないものにしたのは、前に捨てて來た境遇とたえず比較してみていたからであつた。なつかしいシャルメット、あの花園、あの樹、あの泉水、あの果樹園なぞの思い出、とりわけ、それらに魂を興え、私がその人のために生れて來たあのママさんの思い出であつた。ママさんのこと、二人の歡樂のこと、二人の無垢な生活のことなぞ思ひかえしてみると、心はしめつけられ、息は詰つて、そのために何を元氣も出なくなつた。私は何度となく激しい誘惑を感じ、即刻この家を出て、ママさんの傍に歩いて歸りたい氣になつた。もう一度ママさんに會えさえすれば、その場で死んでも満足したであらう、どんな犠牲を拂つても、私をママさんのもとへ呼び戻そうとするあのなつかしい思い出に、とうとう抵抗できなくなつた。自分は辛抱が足りなかつた、愛想も優しさも足りなかつた、前よりずっと身を入れて盡したならば、まだ甘い友情の中に幸福に生活できるのだ、と私は自分自身に言つた。私はこの上もなく立派な計畫を胸に抱き、それを實行に移したいと心を燃やした。一切を見捨て、一切を放擲して、出發する。飛ぶように行く。少年時代と同じあの

有頂天な氣持で到著する。そして、ママさんの足元に再び自分自身を見出す。あゝ、ママさんの取りもちの中に、その愛撫の中に、また、その心の中に、昔私の見出したもの、今もなお有るものと思つてゐるものの四分の一でも再び見出すことができたならば、私はよろこびの餘り死んだかも知れなかつたのである。

人の世の事の何と恐しい幻影であらう。ママさんは、死ぬまで變ることのないあの優れた心をもつて、相變らず私を取りもつてくれた。しかし、私は、もはや存在しない、そして、もはや甦ることのない過去を求めて來たのであつた。ママさんと三十分ほど一緒にいるかいないうちに、私の以前の幸福は永久に死んでしまつてゐることを感じた。前に逃避せざるを得なかつたと同じ悲しむべき立場に私自身を見出したのである。しかも、それは誰が悪いとも言いきることができなないのであつた。クルテューヌは根からの悪者ではなく、私に面會しても、厭な顔どころかむしろよるこんでゐるように見えた。しかし、かつては私をそのすべてとし、また私からも今なおすべてであるママさんの傍にいて、どうして自分が餘分の人間として我慢していられようか。自分が實の子として暮した家に、どうして他人として暮していられようか。幸福な過去の證人である色々な物を見るにつけ、昔のことを思い合せていよいよ切ない心持がした。別のところへ住んでいきたら、こんな苦しみはしなくても済んだであらう。ところが、此處にいて、多くの甘い思い出がたえず心に浮んで來ると、色々なものを失くしてしまつたという感じが唆られるのであつた。私は徒な哀惜に心わずらい、この上もなく暗い憂愁に耽つて、食事の時以外はただ獨りであるという前の暮し方をまたはじめた。本を携えて一室にとじこもり、そこに有益な慰藉を求めた。それから、昔あれほど心配した焦眉の危急を今も感じて、ママさんが無一物になつた時、それに備える方法を自分のうちに見出そうと、非常に心を悩ました。前に私は家計がひどく悪くならないように處理しておいた。ところが、その後一切が變つてゐた。ママさんの出納係は浪費者であつた。立派な馬、立派な馬車など、派手なことが好きだつた。好んで近所の人々の眼にお上品らしく見せかけようとした。自分に少しも分らない事に絶えず何か計畫を立ててゐた。年金は前から食いこんでゐるし、その四半期拂いは抵當に入つてゐるし、家賃は滞つてゐるし、借金はどンドン嵩む一方であつた。この年金は今に差押えられる、そして恐らく停止されるだらう、と私は豫見した。要する

*1 一七四一年五月。

*2 ルンオはリヨン出發後、眞直ぐにシャルメットへ歸つた。

に、私の直面しているものは、破産と災禍より他にはなかった。しかも、その時は目前に迫って、今からでもその恐ろしさが身近に感じられるほどだった。

なつかしい書齋がただ一つ心を慰めるところだった。ここで心の悩みの対策を求めているうちに、自分の豫見する一家の不幸の対策をも求めてみようと思いついた。そして、また昔のような氣になって、氣の毒なママさんが今に陥りそうになっている窮地からママさんを救い出そうと、再び空中に樓閣を築きはじめた。文學界に名をなし、その道で財を獲るほど、自分は十分に學者ではないような氣がしたし、十分に才知があるとも思えなかった。凡庸な才能しかないために、どうしても持つことのできなかつた自信が、ふとした思いつきから心の中に芽生えて来た。私は、前に音楽の教授をやめてから、音楽を棄てたわけではなかつた。それどころか、音楽理論は相當に研究を積んで、少くもこの方面では學者だと自任できた。楽譜の読み方を習いおぼえるのに非常な苦勞をしたことと、今でも初見の本を直ぐ歌うのに非常に苦勞することとを考えて、この困難は、自分にも原因はあるが、同時に、誰にとっても一般に音楽の學習は生易しいことではないところを見ると、楽譜そのものにもその原因がある、と考えるに至つたのである。私は音符の組織をよく調べて、これはひどくまずいものを發明したものだと思つた。ずっと前から、私は、ほんの一寸した歌曲を譜に取るにも、一々五線を引いて譜を作らなければならぬ面倒を避けるために、音階を數字で書くことを考えていた。ところが、オクターヴの難かしさや、拍子や歴時の難かしさのために、足踏みをしていたのである。この昔の思いつきが心の中に甦つて来た。そして、これをもう一度考え直してみても、右の難かしさは必ずしも克服できないものではない、と氣がついた。色色に工夫して、とうとう行く行くようになった。そして、どんな音楽でも私の數字を用いても簡単に譜に取れるようになったのである。この時から、私はもう幸運がひらけたと信じた。そして、この幸福を自分の恩人のママさんに分けたいという熱望を抱いた私は、自分の新案をアカデミーに提出しさえすれば、必ず大革命を起すにちがいないと信じて、一日も早くパリへ出發したいと、そのことばかりを考えた。私はリヨンからお金をいくらか持つて来ていた。本も賣つた。私の決心は十五日ばかりのうちに固まって、實行に移された。こういう決心を私につけさせたすばらしい思いつきで頭は一杯だった。相も變らぬ私は、とうとう、その昔エロンの噴水器を持つてトリノを發つたように、自分の新方式を持つてサヴォアを出發したのである。

以上が私の青年時代の錯誤と過失であつた。私はこの物語を、自分の心の満足がいくほどの忠實さで述べたのである。これから後、私の壯年時代をいくらかの德行で飾ることがあるかも知れないが、それもまた同じ率直さで語りたいと思ふ。そして、それが私の計畫だったのである。しかし、私はここで中止しなければならぬ。時が来ればこの秘密の帳を揚げる事ができる。若し後世に私の記憶が傳わり得るならば、恐らくいつかは、私の言わねばならなかつた事が知つて貰えるであらう。その時こそ、私がなぜ沈黙したかが分るであらう。

註

三頁註一 ルソオは一七二二年六月二十八日に生れ、同年七月四日に洗禮を受けている。ルソオ自身がこの洗禮の日を誕生日と思ひ違えていたことが、その書簡によつて明かとなっている。ルソオ誕生の時、父イザークは四十歳、舞踏教師、後に時計職。母シュザンヌは一つちがいの三十九歳。ルソオを生んで十日ばかり後に死んだ。

三頁註二 これは誤りである。ガブリエルはイザーク・ルソオの妹テオドルと一六九九年に結婚しているから、五年ほど早かつたことになる。

四頁註三 原註。それは母の身分にしては立派すぎるほどの才能だった。母を溺愛していた母の父の宣教師が、その教育に非常な注意を拂つたからである。母は繪も描いた。歌も歌つた。堅琴で伴奏を弾いた。讀書力もあつた。また詩も相當に作つた。次に掲げる詩は、兄弟と夫の不在中、義妹とその二人の子を連れて散歩していた時、誰かが兄弟や夫のことを話したことから、母が即興的に作つたものである。

Ces deux Messieurs qui sont absens
Nous sont chers de bien des manières;
Ce sont nos amis, nos amans;
Ce sont nos maris et nos frères,
Et les pères de ces enfans.
(今はお留守のお二人も)
(あれやこれやでいとしいお人)
(おさな友達、戀しい殿御)
(だんな様やら兄おとと)
(この子たちにはお父さま)

四頁註四 ルソオの母はベルナル夫人を訪ねて行つて、そこで突然産氣づいた。

五頁註五 この疾患は膀胱の先天性畸形によるほとんど繼續的な尿閉であつた。

七頁註七 スカエヴォオラはローマの勇士。刺客として敵王のもとへ潜入したが、捕えられて拷問にかけられた。その時スカエヴォオラは祭壇上の烈火に手を突込み、己れの決意を示したので、敵王はその勇氣と誠實に感じ、これを宥した、という話がある。

七頁註八 イザーク・ルソオの長男フランソワ。一七〇五年に生れ、十七歳の時、時計職の見習に徒弟となつたが、その後、出奔して行方を晦まし、消息を斷つた。

九頁註九 この歌の後半の全文は次の通り。

Un coeur S'expose (なやけも仇だよ)
A trop s'engager (深入りするとき)
Avec un berger (羊飼ふとき)
Et toujours l'épine est sous la rose (薔薇には棘があるからよ)

一〇頁註一〇 この事件は一七二二年十月九日に起つた。イザークは十月十一日にジュネーヴを退去したが、缺席裁判によつて、三カ月の懲役、五十エキュの罰金の判決を受けた。

二三頁註二 二三年ではなくただ數カ月であつた。ボセーからジュネーヴへ歸つたのは、一七二四年の終り頃であつた。異本に據れば、この後に次の文章が加えられている。「それから暫くして、ジュネーヴへ歸り、クータンスを通ると、女の子たちが『ゴトンとルソオと豆炒り』と、小聲で囁し立てるのを聞いたことがあつた。」

四二頁註三 ルソオのジュネーヴ出奔は一七二八年三月十四日、十六歳の時。

四四頁註四 ブノア・ド・ボンヴェールはこの時凡そ七十五歳。三十八年間もコンフィエヨンの司祭をしていて、實際に「匙の貴族」の子孫でもあつた。「匙の貴族」というのは、サヴォア公家の家臣のことを言い、この貴族たちは當時サヴォアの敵であつたジュネーヴ人を、匙に盛つて食つてやる、と豪語し、この誓を忘れないために、始終頭から一つの匙を懸けていたのでこの名がある。

四八頁註五 ヴァラン夫人の改宗は一七二六年九月八日、聖母誕生祭の日に行われた。

四八頁註二六 六年でなく二年が正しい。夫人はアマシーの聖母訪問會の修道院に暫くいた後、一七二六年十月にこの地に定住した。

四九頁註二七 イザークは一七二六年五十四歳の時、ジャンヌ・フランソワという三歳年上の女と再婚した。

五〇頁註二八 この旅行は實際は三月二十四日から四月十二日まで凡そ二十日ばかりかかっている。

五一頁註二九 洗禮志願者救護所の記録によると、この日は四月十二日ということになっている。

五二頁註三〇 誓絶の行われたのは四月二十一日。翌々日の二十三日には洗禮を受けている。

五三頁註三一 フランス王アンリ四世は新教徒として宗教戦争の騒亂のうちに一生を終つたが、一五九三年大臣シュリーの勸告に従つて、カトリックに改宗した。ここで大使というのはシュリーのこと。

五四頁註三二 二十フランでなく、五フラン十サンチームであつた、と言われている。

五五頁註三三 第八巻に出て来るミュサール氏とは同姓異人。この人はフランソワ・ロベール・ミュサールというルソオより一つ年少の微細画家で、一七三五年にはパリに定住していたと言われる。

五六頁註三四 ルソオがトリノを出奔した時はまだ十七歳になつていなかった事が分つてゐるから、この十九歳は誤りである。

一〇三頁註三五 『スペクタトル』Le Spectateur はイギリスの詩人ジョセフ・アディソン Joseph Addison (1672—1719) が一七一一年から出した雑誌であるが、これに倣つてフランスでは劇作者・小説家として有名なマリヴオー Pierre Carlet de Chamblain de Marivaux (1688—1763) が一七二二年から翌年にかけて『フランス・スペクタトル』Le Spectateur français という新聞を出したことがある。ルソオが述べてゐるのは恐らくこの後者であらう。

一〇九頁註三六 『ラ・アンリアッド』の第二章三三七行—三三八行。この詩の大體の意味は、
或いは、主君の血に對する舊い尊崇の念が、
これら逆賊の心になお慰えるところがあつたものか。

一一三頁註三七 この逸話については二説ある。一説にはサヴォア公カルロ・エマヌエル一世が、パリのアンリ四世の宮廷に

行き、或る侯爵領のことで談判をしたが、終に言い負かされる。そして、歸國の途次、よほどパリを離れてから、口惜しまぎれにこの言葉を、アンリ四世に向けて放つた、という。他の一説は、同じくサヴォア公がパリ滞在中、或る商店に入つて品物を買おうとすると、その値をあまり安く値切られた商人が、返事もせず、「えゝ、くそ！」と言つて、品物を片づけてしまった。公はその時はこの無禮な商人に格別の注意を拂わなかつたが、歸國の途中でこの事を思い出し、大いに無念に思つて、「絞め殺すぞ、パリの商人め！」と罵つた、という。

一一九頁註三八 「自分に戀する男」別名「ナルシス」Narcisse ou l'Amant de lui-mêmeは一七五二年十二月、王室俳優一座によつて上演された。

一二三頁註三九 ルソオは四月二十五日頃に歸つて來た。ヴァラン夫人は同月末頃に何か秘密の使命を帯びて、アマシーからパリへ行つた。パリからリヨンまで戻り、ここに七月末から八月初め頃まで逗留、その後トリノへ行き、使命の報告を行うと共に、新住居の選定について王室の便宜を願つた。かくして、一七三一年の春にはシャンペリーへ定住した。

一二四頁註四〇 ルソオと父との會見は此處に描かれてゐるような情味溢れたものではなかつた。父はルソオの改宗を許さなかつたのである。

一二六頁註四一 原註。「その頃の私は、後に私が肖像に描かれたような人相をしていなかったと見える」。これは或る畫家がルソオの顔を熊のように描いて諷刺したことを言つてゐるのである。

一二八頁註四二 この家屋はサン・レジェ廣小路五六番地に現存してゐる。この地域は昔シャンペリー市の上流階級の住宅區域であつた。

一三四頁註四三 異本に據ると、この文章の後に次のような一文が書き加えられてゐる。「私はイギリスの繁榮の最中にも、この國が衰微することを豫言しておいたが、この衰微がそろそろ始まりかけてゐるのを見ると、今度は勝利の順になつたフランス國民が、現在私の生活してゐる哀れな囚われの状態から私をいつかは多分救い出してくれるのではあるまいか、と馬鹿らしい希望を抱いて自ら慰めるのである」。迫害を逃れ、ヒュームに伴われ

てイギリスへ行ってこの稿を執筆していたルソオは、自分の状態を囚われの身と感じ、此處でも安住できなかったたのである。

二〇三頁註四 原文にはどの版にも「前立」Punnetとあるが、前立は軍人が盛装の時、帽子に着けるものであつて、此處では不適當な言葉である。従つてこのPunnetは恐らく劍術の稽古の時に用いるfleuret(撥刀)の書き誤りであるう、と言われている。

二〇五頁註五 「容易にしよう」の代りに或る異本では「好都合にしよう」とある。しかし「好都合」という言葉はすぐ前にも用いてあるし、二三行先にも用いてあるから、此處は「容易にしよう」が適當と思われる。

二〇二頁註六

異本に據ればこの次に以下の句がある。
「先方の氣を悪くしないために、私はこの貴重な尻拭き紙を受取つて、ポケットの中にねじこんでいたが、これを使うただ一つの適當な用途が起つた時のほかは、この紙のことなぞ頭に浮んだこともなかつた」。

二〇六頁註七

原註。「その後私はこの人に再會したが、この人が全く變つていて見出した。あゝ、シヨアズール氏の何と偉大な魔術師であることよ！ 私の舊知の誰一人としてシヨアズール氏の變身術を免れたものはいなかつた」。シヨアズールは時の外務大臣。ルソオとの交渉は第十一卷に詳しい。

二〇七頁註八

ここにはルソオの記述に前後の誤りがある。即ちヴォルテールの『哲學的書簡』が公表されたのは一七三四年であり、ヴォルテールとフレデリックとの文通の始まつたのは一七三六年の八月八日以後で、この文通は一七四〇年五月十八日に終つてゐる。従つて、一七三五年には、ルソオは、『哲學的書簡』を讀むことはできなかったが、文通は讀むことはできなかった筈である。尙、皇太子が父王を襲いだのも右の一七四〇年五月十八日で、この點にもルソオの思い違ひがある。

二〇三頁註九

異本。「……この人に倣ひ、また、オザナンの『數學の遊び』を参照しながら、魔法インキを……」

二〇二頁註一〇

オザナンというのはフランスの數學者で、一六九四年に出した『數學と物理學の遊び』二卷は有名である。この事件は一七三七年六月二十七日に起つた。この日ルソオは公證人を呼び遺言を書かせてゐる。この遺言書は一八二〇年シャンペリーで發見され好事家をよるこぼせた。

二〇七頁註四

二〇五頁註三

ヴァラン夫人は聖ヨハネ祭の日、即ち一七三八年六月二十四日(一七三六年ではない)にシャルメットに移り住んだのである。ルソオがこれを一七三六年のこととしてゐる事については種々の臆説があるが、第六卷の大部分を占めてゐる事件が、實はシャルメット移轉前のことであるとすると説は正しい想像と思われる。ルソオは一七三七年六月二十八日で二十五歳の成年に達した。この日は第五卷に述べられた魔法インキの實驗の事故があつた翌日に當る。ルソオは健康を恢復すると直ぐ同年七月三十一日にジュネトヴに赴き、母の遺産のうち自分の取得分を受取つた。ルソオがシャンペリーへ歸るまでに起つた事件は、前註に述べたように、すべて一七三七年末のことに屬する。これに先立つシャルメット滞在中の記述は一七三八年のことである。

二〇〇頁註三

異本。「……なかつたからである。そして、別れる前に私はこの残されたものを心のままに弄ぼうと思つた。夫人はモンペリエの娘たちを警戒する意味で、これを忍んでくれたのである」。

ルソオの著作の中で最も広く讀まれているものがこの『懺悔録』である。従つて、今さらその解説にも及ばない程であるが、初めてこの書を読む人のために、ごく簡単に贅言を費しておく。

ルソオは一七六二年、丁度五十歳の時に、『エミール』を發表し、そのためにフランスを追われることになった。それより以前、ルソオの異常な性格は他人と合わず、ルソオ自身それを他人から受ける迫害のように感じていたが、『エミール』の事件が意外であつただけに、ルソオの被害妄想は益々甚しくなつた。フランスを遁れて、スイスのモティエに隠れ住むようになった頃、かねて腹案を抱いていた自叙傳を執筆する決心を固め、一七六四年の終り頃から、いよいよ筆を取つて書きはじめたのがこの『懺悔録』である。多くの友人から裏切られ迫害されている、フランスじゅうはおるか、全世界のものから陰謀によつて加害されている、と考へたルソオは、一個の人間たる自分の正真正銘の、赤裸々の姿を描き、これによつて世人から歪曲されている自分の眞の行爲や性格を後世に伝えよう、と試たのである。

従つて、『懺悔録』の第一の特色は、ジャン・ジャック・ルソオという人間の有りのままの姿を描いた大膽な告白である。これは當時としては洵に破天荒なことであつたばかりでなく、人間がこれほどあらゆる虚飾を捨て去つて赤裸になり得たことは異常の事に屬する。そして、この率直な自己解剖は、ルソオ一個人の解剖のみにとどまらず、廣く人間の解剖にまで深まり、複雑で矛盾の多いルソオの性格の中に、讀者は必ず自分自身の一部を見出し、啓發・反省させられるところがある。

ところが少くないであろう。この書が人間解剖の名作として、古來多くの人々に絶大な影響を與へたのは理由のないことではない。

『懺悔録』の第二の特色は、ルソオという一個の人間の興味深い生活記録である。臆病で、熱情的で、夢想を好み、放浪癖のある「自然兒」たるジャン・ジャック・ルソオの半世の記述は洵に面白く、これを點綴する自然描寫も筆者の感傷からにじみ出る美しいものである。この書が深刻な自己反省の書であると共に、讀者の興趣を惹かずにおかない小説的讀物として広く讀まれている所以がここにある。

スイスに遁れて筆を取つたルソオは、そこにも安住することができなかつた。スイスの各地を轉々とし、終に一七六六年にはイギリスに渡つたルソオは、ロンドンを五十里ほど距てたウットンに隠栖し、此處で『懺悔録』の稿を進めた。第五卷まではウットンで脱稿することができた。ルソオの被害妄想はウットンにも安住を許さなくなつた。一七六七年には發作的な衝動に馳られてウットンを飛び出し、祕かにフランスへ歸り、再び放浪的な生活を送るようになったが、その間、『懺悔録』の筆は相變らず進め、一七七〇年八月ぶりでパリに歸つた時には、すでに十二卷まで書きこんでいたのである。

こうして、『懺悔録』十二卷は前後約八年にわたり、放浪生活中の餘暇に心魂を傾けて執筆した血のにじむような作であつて、書齋の中で安穩に書いたものでないことを、讀者としては眞先きに銘記しておかなければならない。殊にこの放浪八年の生活中、絶えず迫害の手に脅かされ、陰謀團の間諜や探偵が身邊に付きまといつてゐると思ひこんでいたルソオは、第七卷の冒頭に自ら書いてゐるように、常に「びくびくし、そわそわして、大急ぎで紙の上に二三の斷片的な言葉を書きつけ」て、「訂正するどころか、讀みかえしてゐる暇さえない」有様だつたのである。

『懺悔録』はルソオの死後三年目の一七八一年に第一部が、一七八八年に第二部が、それぞれ初めて發表され、その後多くの版を重ねる毎に編纂者の手によって修正・訂正・改竄されている。これは『懺悔録』の原稿に二通りあって、その第一はルソオが生前に或る友人に託しておいたもの、その第二はルソオの死後にその手もとにあったもの、という事實に基いている。前者がジュネーヴ本であり、後者がパリ本と言われているが、その差異や正確度というような考證的な興味はこの『懺悔録』の鑑賞の上には大して関係はないと思つていい。

譯者は翻譯の便宜上からフランソマリオン版の『懺悔録』をテキストとした。これは最も一般に普及している版である。各處に挿入した註は主としてガルニエ版のものに據つた。その他は譯者自身の手になるものである。本文の左端に*印をもつて示した註は、すぐその場で参照する必要があるかと思ふものであり、「註」として巻末に纏めたものは、あとでゆっくり見ても差支えないものと考えたのであるが、これは譯者の獨斷で、適當でないものもあつたかも知れない。

尙、『懺悔録』第三部の執筆を斷念したルソオは、この續篇に代るものとして、一七七七年頃から、『孤獨な散歩者の夢想』というのを書きはじめ、それが翌年の筆者の死によって中斷されている。ルソオの絶筆となつたこの佳篇は既に三笠書房版の世界思想選書の一として上梓されているから、『懺悔録』の讀者は必ずこれを併讀して、ルソオの眞價に觸れて頂くようお願いする。また『懺悔録』に述べられた以後のルソオの晩年の生活や心理については、右の『孤獨な散歩者の夢想』の詳細な解説を参照して頂きたいと思つている。

一九五〇年春

譯者

譯者略歴

大井 征おおい せい

明治卅八年一月廿一日山口県山口市に生れ、幼少の頃東京に移住す。

昭和二年三月法政大學文學部卒業。昭和四年一月より法政大學豫科にてフランス語を講じ昭和十四年に至る。昭和十四年より陸軍教授として廣島陸軍幼年學校に赴任し、昭和十六年東京陸軍幼年學校教授に轉じ終戦に至る。終戦後母校法政大學に歸任し、現在同校文學部に於てフランス語、フランス文學を講じつつあり。

譯書

アナトール・フランス『プチ・ピエール』(新潮社)

アナトール・フランス『花ざかりの頃』(白水社)

アナトール・フランス『聖母と輕業師』(岩波書店)

ジャン・ジャック・ルソオ『孤獨な散歩者の夢想』(三笠書房)

世界文學選書 49

懺悔錄 全二卷

上卷

¥ 150



昭和二十五年八月二十五日
印刷發行

譯者

おお
大井

た
たす
征

發行者

廣瀬

文子

印刷者

鈴木

貞三郎

發行所

株式會社

三笠書房

東京都千代田區神田神保町二ノ二〇
電話九段部六五〇四番
振替東京二〇九六番

協同社印刷所 印刷・壽製本所 製本

Handwritten text on a small, rectangular piece of paper, likely a label or note, placed on the left page of the notebook. The text is faint and appears to be in Chinese characters, possibly including a date and a name.







